巻頭言

み言葉を宣べ伝えよ

芦屋川教会牧師
小島　十二

『イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。』　（マタイ28・18）

「み言葉を宣べ伝えよ」とは、天地の創造主と罪のあがない主と聖霊、すなわち三位一体の御神の慈愛と尊厳に満ちた命令です。この御声に従う群れが今日の生きた教会です。あなたも、その群れに生まれ、結ばれたクリスチャンです。キリストの体の交わりの中にある永遠の命と神の国の生き証人です。そのために、あなたの祈りと献身がなければ神の国のあかしは伝わらないのです。

伝えるみ言葉（聖書）とは、主イエス・キリストのことです。永遠の神の御計画に基づき、その預言どおり神が人となられたイエス様のお言葉です。このみ言葉は第一に光です。無キリストの世界は暗黒で、偽りの光の偽預言者と悪の権化である悪魔に支配されて、まじめに生きても人生の確証が得られず空虚と不安に満ちています。また神と人、人と人を愛のうちにつなぐ力も希望も足りません。第二に、み言葉の真理であるキリストに来なければ、人は真実の愛と知恵に欠け、偽り、怒り、争い、裏切り、妬み、焦燥、恨み、殺意など世は混乱し、また恐るべき死にのみ込まれ永遠に滅びるのです。

第三に、世界に多くの教訓、哲学、宗教がありますが、元をただせばすべて死ぬべき人間から出た言葉にすぎません。実に普遍的基準となる永遠の生命の神の言葉がないために、偶像礼拝、占い、まじない、悪が地にはびこり、人の心は混乱、腐敗、堕落、暴虐は氾濫（はんらん）し、ますます自己防衛と自己中心となり、神よりも金と快楽を愛し、平和の道を知らず、正しい神の裁きと永遠の地獄が口を広げて待つ人生となるのです。

ですから救いの言葉を宣べ伝える対象はすべての人です。幼子から大人、高齢者、男女もれなく。苦難逆境にある人だけでなく、すべての人に、時がよくても悪くても宣べ伝えるのです。言葉だけによらず、善い行いと神の霊によって励むのです。

しかし、主は一人でせよとは言われません。罪のゆるしと聖霊を受けて祈り、上からの能力を賜り、善いわざの準備ができ整えられて、信仰と愛と希望の種まきです。十字架のことばは滅び行くものには愚かですが、救われるわれらには神の力です。そしてパウロの言ったように人の知恵の説得力ある言葉によらず、聖霊の賜る霊のことばで語るのです（Iコリント2章）。決してまじめな自分でできるものではないのです。自分を捨て、明け渡し、自分の十字架を負って従い歩んでこそ主の愛と御力が証しされるのです。主の十字架の愛に迫られるからです（IIテモテ3、4章）。

さあ、御霊に導かれ、常に喜び絶えず祈りすべてのこと感謝し御声に従いましょう。

牧羊者

目次

巻頭言……………………………………1
教師養成講座
「ありのままで子育てお母さん大丈夫ですよ」(4)……3
山上の教え　《七月教案》…………………7
主のみわざ　《八月教案》…………………27
救い主　《九月教案》………………………43
牧羊ひろば（待望教会）……………………59
おわりに……………………………………60

教師養成講座
2003年 兵庫教区CS部主催 教育講演会
「ありのままで子育て―お母さん大丈夫ですよ」(4)

講師 内田みずえ師（聖書宣教会）

（講演内容に加筆修正したものです）

4．聞くこと

聞くことがどれほど大切かということは、ここで改めて申し上げるまでもないでしょう。ただ一つ申し上げるとすれば、子どもの話に親が真摯に耳を傾けることをしないならば、その子のセルフ・イメージが低くなるという、恐ろしい結果をもたらすかもしれないということです。

子どもの話をきちんと聞かない、ということは、実は、「あなたの話はつまらない」、「あなたの言っていることは価値がないから、私はそんなに時間を取ってあげられない」、「私には、あなたの話を聞くよりも、もっと大切なことがある」というメッセージを送っていることになります。

そのメッセージは、「あなたの考えていることは大したことはない」、「あなたは耳を傾けるに値しない人間だ」、「あなたは面白くない人間だ」ということを暗に意味すると考えたことがあるでしょうか。

もちろん子どもはそのようなメッセージが送られていることや、そのメッセージの意味に気づいてはいないでしょう。けれども子どもは、ことばになっていないことばを柔らかな心で感じ取り、全身で受け止めているのです。このような経験を積み重ねていったら、子どものセルフ・イメージはどうなるでしょうか。

小さい時から、どんなに小さなことでも親に真剣に耳を傾けてもらった子は、「私の話は大切なんだ」、「私の話は面白いんだ」、「私の話は大人も聞いてくれるんだ」と自然に思うようになるでしょう。そして自分は大切な人間なのだと自信を深めていくでしょう。

聞くことの重要性は誰でも認識していますが、「正しい聞き方」がどういうものであるかを意識している人は少ないように思います。ましてや、それを実践している人はもっと少ないでしょう。

〃Self-esteem for Children〃（『子どもが良いセルフ・イメージを持つために』邦訳なし）という本の中で、著者デール・R・オーレン博士は「正しい聞き方」の5つのステップを提唱しています。私の解説を加えながら、この5つのステップを紹介したいと思います。

①聞く。

当り前のことですが、まずは「聞く」ということです。しかしこれがなかなか難しいのです。

私たちは、しばしば子どもの話を最後まで聞かないうちに口を挟み、話を奪い取ってしまいます。回りくどい話はまとめたり、言葉遣いの間違いを指摘したり、頼まれてもいないのに助言をしたり、勝手な結論を出したりします。

子どもとの会話を1度テープに録音して聞いてみるといいかもしれません。自分があまりにも子どもの話を聞いていないので愕然とするかもしれません。

私の父は、私が5歳の時に天に召され、働きに出た母と共に過ごすことのできた時間は本当にわずかでした。その限られた時間の中で、母が私に語ってくれた言葉は、いくつも私の心の中にしっかり残っています。

「人間にとって自己憐憫とプライドは最後まで戦わなければいけない罪なのよね」。母のひとりごとのようなこのことばは、この歳になってみて、本当にそのとおりだ、としみじみ思わされます。

母の口ぐせの一つは、〃Delayed obedience is disobedience〃でした。「あとになってから言うことを聞いても、もう遅い」ということです。すなわち、「言われたら、すぐ従いなさい」という厳しい要求ですが、神様に対する全き従順を教えたかったのでしょうね。

私が小学校に入る前に母が言ったことはただ一つでした。「授業中は先生の目をしっかり見て、ひとことも聞き漏らしてはいけません」。

一言一句聞き漏らさないように集中して人の話を聞く、という姿勢は、本を読む時、勉強をする時の姿勢にもつながり、私にとって大きな宝物となりました。

私の耳に今でも響いてくることばは、「みずえちゃん、人の話の腰を折ってはいけません」です。自分ではそんなつもりはなかったのですが、それだけ頻繁に話の腰を折っていたのでしょうね。

子どもの話を丁寧に、そして最後まで聞く努力を致しましょう。

②理解をする。

ことばは聞いていても、本当に相手の言いたいことを理解し、相手の気持ちを汲んでいない場合も多々あります。真に理解するためには、声の調子や表情に注意を払うだけでなく、想像力を働かせなければなりません。

箴言20章5節に「人の心にあるはかりごとは深い水、英知のある人はこれを汲み出す」と書かれていますが、私たちはどうでしょうか。何気ないことばの背後に深い意味が隠されている場合があります。「この子は、今なぜこんなことを言っているのかしら」と想像力を働かせながら、心の深い所にある思いを汲み出すことの出来る親は英知に富んだ人です。

子どもの気持ちを本当に理解したいと願うなら、神様は、知恵にも、洞察力にも欠けている私たちに神様の知恵を与えてくださると約束していてくださいます。

「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます」（ヤコブ1章5節）。

子どもが小さい時から、子どもの心を大切にし、その気持ちを理解しようと努めるなら、思春期になって、ことば数が少なくなっても、親は自分を理解しようとしてくれる、という信頼感を持ち続けるのではないでしょうか。

③尊重する。

子どもの言っていることを丁寧に最後まで聞く…これだけでも私たちにとっては大きな進歩でしょう。その上、子どもが真に言いたいことを理解しようと努める…これは画期的なことです。さらに、子どもの気持ち、あるいは考え、意見、言い分、言い訳も尊重する、となると私たちの側に大きな意識改革が必要になるでしょう。たとえそれが未熟な考え方であっても、受け入れ難い意見であっても、支離滅裂で筋が通っていない話であっても、嘘が見え隠れしていても、共感できないような気持ちであっても、まずは、それが子どもが表現したいものであることを認め、受け入れ、そして尊重するのです。

これは、クリスチャンの親にとって、かなりのチャレンジかもしれません。なぜなら、私たちには子どもに正しいことを教えたい、子どもを正しく導きたいという強い気持ちがあるからです。私たちには長年の経験から得た知識と常識があると自負しています。そして何よりも、私たちは聖書の教えに従って子育てをしているのだから、私たちには聖書という強力な味方があり、神様がバックにいらっしゃるという確信があるのです。ですから、子どもの間違いを何とかして、早く指摘してあげたいと思うわけです。

今はもう社会人になった息子が中学生の頃、Tシャツをズボンの上に出して着ていたことがありました。私にはそれがだらしない格好のように見えたので注意しました。すると2歳年上の姉がこう言ったのです。「お母さん、今時Tシャツをズボンの中に入れてる人なんかいないよ」。よく見たら、確かに、中学生だけでなく、神学生も同じ格好をしていました。

聖書のどこにも、Tシャツはズボンの中に入れて、ベルトをしっかり締めて…とは書いてありません。それでも、クリスチャンの服装はこうあるべき、という私の思い込みがあり、それが、あたかも聖書の支持を得ているかのように錯覚していたのです。その錯覚ですら、姉の指摘がなければ気づかなかったでしょう。彼女の口添えが無ければ、私は息子の好みや願いを尊重することができなかったのです。

もちろん、聖書に書いてあることや、どこまでも主張しなければいけないこともあります。けれどもそれは次の段階です。ここでは、あくまでも子どもの言っていることを受け入れ、尊重するのです。

④意見を述べる。

ここまできて、私たちはようやく賛成なり反対なりの自分の意見を言うことができるのです。大抵の場合、①聞く、から、あるいはその途中から、②理解する、と③尊重する、を飛ばして一気に④意見を述べるところに行ってしまいますから、子どもが不満に思うのも無理はありません。しかし、①～③の道筋を丁寧にたどるなら、ここで親が反対意見を言っても、子どもの中には、それを受け止める土壌がかなりできています。自分の話を最後まで聞いてもらい、自分の言いたいことを理解してもらい、そして尊重してもらっているという感触を持っているなら、親の反対意見に対して耳を貸し、理解しようと努め、そして尊重しようと思う姿勢が自らできるのです。親の側で反対する理由をきちんと説明するのは必須条件ですが。

⑤問題の解決法を一緒に考える。

④の段階まで来ても、なお親子の意見が一致しない問題が残るなら、解決法を一緒に考えるのです。双方が歩み寄って、一方が納得して折れるかもしれません。

適切な妥協点を見つけることができるかもしれません。

思春期に入った子どもたちが教会から離れ、神様からも離れてしまうのは、様々な問題に関して親と話し合うことができないと感じ、諦めてしまうからかもしれません。

話し合っても、話し合っても、なかなか解決法が見つからない、一致点が見出せないという問題も少なくないでしょう。けれどもお互いに心を開いて、時間を取って向き合っていくうちに、親子間の溝は埋められていくでしょう。

振り返ってみると、「あの時、あの場面でこの5つのステップを踏んでいたら…」と後悔することもあるでしょう。午前の部・前半でも申し上げましたように、「後悔」ではなく、「悔い改め」をして、今からでも話し合いの糸口を見つけることができるように神様に祈り求めましょう。

普段の生活の中で、この5つのステップを実行しよう

とすると、すぐにフラストレーションを感じるかもしれません。本当に急がなければいけない時もあることでしょう。疲れていてそれどころではないということもあるでしょう。けれどもこの5つのステップを頭の片隅に置き、少しずつ努力をするなら報いは大きいでしょう。

5．希望を持つこと

世の中全体が希望を持ちにくい時代にあって、私たちが子どもの将来に対して、悲観的になるのも無理のないことですね。ましてや子どもが今現在あまりいい状態でない時、私たちの思考は螺旋(らせん)階段を下るようにどんどん落ちて行きます。「今こんな状態だったら、将来はどんな風になるのかしら」と悪い想像を働かせます。

しかし、私たちには、「成長させてくださるのは神です」というお約束が与えられているのです。たとい「神の協力者」として、私たち親やCS教師が植えたり、水を注いだりするという責任を完璧に果たしたとしても、私たちが成長をもたらすわけではありません。成長させてくださるのは神様です。完璧に責任を果たすことのできない私たちは、神様に期待しなくて、どこに期待するのでしょうか。子どもの姿の中に希望の光が見えないような時、どこに希望を見出そうとするのでしょうか。子どもの内におられる神様、子どもの背後におられる神様、問題のまっただ中にいてくださる神様を信頼し、そのゆえに希望を持つなら、その希望は決して失望に終わることはありません(ローマ5章5節)。

イザヤ書35章1、2a節にこのようなみ言葉があります。「荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。盛んに花を咲かせ、喜び喜んで歌う」。私は、これは贖(あがな)われた者(8～10節)の喜びを比喩的に表しているのだと思っていました。ところが、しばらく前のテレビ、「世界不思議発見」を見た時、死海周辺に文字通り花が咲くことがあることを知りました。死海周辺には、イザヤ書35章に書かれているような荒野、砂漠、荒地が広がっていて、花どころか草木もありません。ところが、10年に一度くらいの周期で2月頃(ごろ)に集中的に雨が降ると、それまで砂や岩の下で眠っていた種が一斉に芽を出すのです。砂漠の熱帯性気候の特性で、芽を出すと、ぐんぐん伸び、一ヶ月すると辺り一面は花畑になるのです。人はこれを「奇蹟の花園」と呼びます。

神様の恵みの雨が砂漠に注がれると文字通り花畑が出現するように、今はかさかさに渇き、荒れ放題になっている子どもの心の内にも、恵みの雨は奇跡をもたらすことができるのです。神様がいつかきっと恵みの雨を注いで花を咲かせてくださることを信じ、希望をもって祈り続けていきましょう。

6．愛を注ぐこと

パウロは、同じ第1コリント13章のいわゆる「愛の賛歌」と呼ばれている個所で、たといあらゆる奥義に通じていても、あらゆる知識を持っていても、山を動かすほどの完全な信仰があっても、愛がないなら何の値打ちもない、ときっぱり言い切っています。また自分の体を焼かれるために渡しても、愛がないなら何の役にも立たない、と言っています。

パウロは私たちに向かっては、たとえ私たちが「待つこと」が出来ても、「過程を大切にすること」が出来ても、「観察すること」が出来ても、「聞くこと」が出来ても、「希望を持つこと」ができても、もし、愛がないなら、何の役にも立たないと言うことでしょう。

農作物や植物が育つのに暖かい日差しや雨、そして肥料が必要であるように、子どもの成長に必要なもの、欠かせないもの、それが愛です。

これは私が力説するまでもなく、皆様良くご存知のことです。良く分かっているはずなのですが、現実にはなかなか愛せない、優しくしてあげられない、柔和に接してあげられない、というのが私たちの悩みではないでしょうか。

ところで、「愛」とは何でしょう。私たちが「愛せない」と嘆く時、何ができていないから自分は愛せないと思うのでしょうか。猫かわいがりすることではないですよね。それは本当の愛ではないことは、私たちにはよく分かっています。子どもの要求を全部飲んであげて、何でも「いいよ」と言ってあげるのが愛ではなく、甘やかしに過ぎません。それでは、いつも心の中に暖かいものが溢れている状態でしょうか。子どもが可愛くてたまらないと常に思っていることでしょうか。子どもにいつも笑顔を向けてあげることができて、いつも優しい言葉をかけてあげられることができて、いつも、励ましの言葉をかけてあげることができて…それが、愛でしょうか。もちろん、そのようにできればそれに越したことはないでしょう。けれども、もし愛とはこういうものであるというイメージや基準を持っていて、自分がそれを満たしていないから自分には愛がないと思うのは少し違うような気がします。

愛とは相手が幸せになることを願い、それにふさわしい行動をとること、と定義してみました。

皆様はご自分のお子さんが幸せになることを望んでいらっしゃいますか。日頃(ひごろ)はガミガミ叱りつけて、「ほんとにしょうがないわね」と思っている子どもでも、今ここに電話が来て、「お宅のお子さんが交通事故に遭(あ)われました」と言われたら、皆さんはどんな反応をなさるでしょうか。きっと自分の命を差し出してでも子どもの命を救ってください、と神様に必死に祈ることでしょう。

愛がないと思っている私たちでも、それくらい子どもを愛しているのです。イエス様はおっしゃいました。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません」(ヨハネの福音書15章13節)。神様は私たちに、子どものために命を捨てても惜しくないと思うほどの愛を与えていてくださるのです。

それではなぜその愛にふさわしい行動を取れないのか、と問われるなら、私たちは黙って首をうなだれるしかありません。けれども、そのような時にこそ、午前にお話しましたように、くよくよ後悔するのではなく、潔く、そして、こまめに悔い改めましょう。それを繰り返しているうちに、自分でも気づかない間に、神様の愛が私たちを通して子どもに注がれ、私たちの行動が愛に満ちたものに変えられていきます。

午前のセッションで私は言いました。「…私自身も、子育ての中で、何度も何度も神様に悔い改めの祈りをし、子どもたちにあやまりました。その繰り返しをしていくうちに、ふと気がついたらあやまらなくてはいけない事態が減り、間隔が広がり、神様が私をきよめていてくださり、心に平安と喜びが広がっていくのを体験しました」。心に広がっていったのは平安と喜びだけでなく、愛そのものでした。子どもを見る自分の目が変わっていくのを感じました。以前はイライラの種でしかなかった行動が、何と子どもらしく、可愛い仕草なのだろうといとおしく思えるようになっていたのです。

「子育ての時は夢中で楽しむことなんてできなかったけど、孫は本当に可愛いわ」という話をよく聞きます。私の場合は、子どもたちがまだ小さいうちに、私の努力や頑張りではなく、神様が私の心に注いでくださる愛を感じながら子育てを楽しむことができるようになったのは本当に感謝なことだったと思っています。

「もっと早くこの話を聞いていたら良かったのに…」と心に痛みを覚えていらっしゃる方もあると思います。そういう方に申し上げたいと思います。"Never too late"です。遅すぎることは決してありません。気がついた今が一番早い時なのです。"Better now than never"ということばもあります。「今始める方が永遠にやらないより良い」という意味です。子どもたちがいくつになっても、私たちは彼らの親であり、彼らは私たちの子どもです。今からでも遅くはありません。子どもたちにできるだけ優しく話しかけましょう。親切にしてあげましょう。心を込めて美味しいものを作って食べさせてあげましょう。楽しくなるようなことをいっぱい工夫しましょう。

こんな努力を重ねていくなら、子どもの心は幸せで満たされるようになるでしょう。幸せになった子どもは感謝と喜びの笑顔を向けてくれるようになるでしょう。その笑顔が、今度は私たちを幸せにしてくれるという好循環が生まれます。たとえ笑顔を向けてくれなくても、このような努力を重ねているうちに、私たち自身が幸せになり、自分の顔に笑顔が浮かんでいることに驚くかもしれません。

7．祈ること

今までの話の中にも、「祈る」ということばは何度も出てきましたが、「植える者」と「水を注ぐ者」である私たちが心がけるべき第7番目のことは、まさに「祈ること」です。私たちは神様に祈り、神様に助けを求めることなしに、前述の6つの心がけるべきことを実行することなど到底できません。

午前のセッションの最後に、「子どものための祈り」から抜粋して読みました。その祈りは、「あなたへの愛と、子どもたちへの愛を増してください」ということばで結ばれています。その祈りを私たちの日々の祈りとしましょう。そして子どもたちのために具体的な執りなしの祈りを積み重ねていきましょう。子どものことで思い煩ったり、悩んだり、心配することに時間を費やすのを止めて、むしろ祈ることに時間を使いましょう。お皿を洗いながら、掃除機を動かしながら、洗濯物を干しながら、子どもたちのために祈りましょう。特に子どもたちの霊性について祈りましょう。子どもたち自身が祈れるような状態にない時、霊的に貧しくなっている時こそ私たちの執りなしの祈りを必要としているのです。

サタンは私たちが子どもたちのために祈るのを嫌います。祈りの結果、神様が子どもたちの心の内にお働きになり、御心が成されるのを嫌います。サタンは、私たちが祈るよりも悩んでいることを喜び、私たちが執りなしの祈りをするよりも落ち込んでいることを喜びます。これは霊の戦いです。私たちはサタンの策略にはめられてはなりません。私たちは子どもたちにとって「植える者」、「水を注ぐ者」であると同時に、彼らの霊性の支えとなる大切な「祈り手」なのです。そのことを自覚して、祈りの手を挙げ続けることができるように神様の助けを乞い願いましょう。

最後にテーマ聖句をもう一度お読みします。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」第1コリント3章6節

子どもたちを成長させてくださるのは神様です。ですから私たちは安心して子育てが続けられるのです。「お母さん大丈夫ですよ!」の励ましのことばを背中に受けながら、子育てと子どもの教育の働きに、これからも携わっていきましょう。

成長させてくださる神様に、すべての栄光をお返しし、感謝しつつこれからの生涯も共に歩ませていただきましょう。これで私のお話を終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

7月

3日　聖書講解

聖　書　マタイ5・1～12
テーマ　幸福の教え

序論

（鎌野）

これから5週間にわたって、いわゆる「山上の垂訓」を学ぶ。だが並行個所であるルカ6章では、これは平地でなされたと記されている（6・17）。聴衆も弟子だけではなく、群衆もいたようだ（マタイ7・28参照）。多分、主イエスがあちこちで話された説教を、マタイはここにまとめて書いたのであろう。ここには、6月1週に学んだ神の国の福音とはどういうものかが明らかにされている。ただ、ユダヤ色の強いマタイは、「神の国」と言わないで「天国」と言い換えていることに注意していただきたい（4・17参照）。今週のテキストは「八福の教え」とも言われるが、それらはこの地上の国における「幸福」とは根本的に違っている。

一、物質では得られない幸福

第一に挙げられる幸いな人は＜こころの貧しい人たち＞である。ルカの並行個所を見ると、彼はあえて＜こころの＞を省いている（6・20）。第二の＜悲しんでいる人たち＞も、第四の＜飢えかわいている人たち＞も、この世の基準ではとてもさいわいとは言えない。主イエスの教えを聞こうとして集ってきた者の多くは、まさにそのような人々だった。その彼らに、主は、物質では得られない幸福があることを教えようとされた。

＜こころの貧しい人＞とは、自分が神の前には破産状態であることを知る人だ。つまり、自分が義人だとは考えもしない人であり、そういう状態を＜悲しんでいる人＞、だからこそ＜柔和な人＞（新改訳の欄外注では「へりくだった者」）であり、神から義とされることに＜飢えかわいている人＞である。物質的に貧しいだけでなく、神の前にも貧しいことを認める人は、富ではなく義を求める（6・32）。だから＜天国は彼らのものである＞。また＜彼らは慰められ＞、＜地を受けつ＞ぎ、神の義に＜飽きたりるようになる＞。このような神との関係をもつことが、主の教えられた幸福である。

二、権力では得られない幸福

第五番目以降は、より積極的な表現がとられている。神から義を受けると、＜あわれみ深い人＞、＜心の清い人＞となる。そしてさらに神からあわれみを受け、神を見ることができるようになる。そういう人こそ、本当に幸福なのである。それと反対に、当時の宗教的権力者はあわれみを見のがし、外側だけをきよめていた（23・23、25）。だから、主イエスを神と認めることができなかったばかりか、十字架につけてしまったのである。

あわれみと心のきよさがあるなら、第七の＜平和をつくり出す人＞（原語では一語で、直訳すると「平和製作者」「ピースメーカー」）になれる。だが、武力で平和をつくり出そうとしていた当時の政治的権力者は、＜神の子と呼ばれる＞はずがない。かえってその武力で義人を迫害することになる。真にさいわいなのは、神の義を貫いたために＜迫害されてきた人たち＞である。旧約の預言者たちは、まさにそのような人々であった。

三、天国でしか得られない幸福

現代でも、多くの人々は、富を得るなら、権力を得るなら、幸福になると思っている。しかし主イエスは、全く違った幸福を教えられた。最初の＜こころの貧しい人＞と、最後の＜迫害されてきた人＞は、どちらも＜天国は彼らのものである＞で結ばれている。＜天国＞は死んでから行く所と考えてはならない。そこは神が支配しておられる「神の王国」であり、そこにはこの地上の国と全く違った価値基準がある。そしてこの地上にいる間にも、神の国に生きることができる。

神の国では、神と人の交わりが最も重要である。罪を認めて謙遜（けんそん）に神の前に出る者こそ、あわれみを受ける。彼らは神を見るだけでなく、神の子としていただけるので、たとい人々から迫害されたり、悪口を言われたりしても、喜ぶことができる。もはや人の評価を気にせずに、ただ神が望んでおられることをするようになる。神は、必要なすべてを備えてくださるから、幼子のように信頼すれば十分なのだ。このような生き方こそ、天国でしか得ることのできない幸福である。

結論

主イエスが教えられた幸福は、まず自分が心の貧しい者であることを悟るところから始まる。自分の罪深さを知り、それを悲しみ、謙遜に主の義を求めよう。そのとき、天国は私たちのものになる。この地上に生きている間にも天国を味わうことができる人は、それこそどんな富や力を得るにもまさるしあわせ者である。

研究資料

（足立）

マタイ5・1～12はイエスが語った山上の説教（5～7章）に含まれている。山上の説教は主として弟子たちに語られたもので（5・1）、未信者が神の子となる条件ではない。むしろ恵みによって救われた者たちが、人間の能力ではなく主の恵みによって天の父に似たものに変えられていく生き方の見本である。

テキスト

3　心の貧しさ　とは信仰の質的貧困に言及しているのではなく、人の霊的無力さに関する自覚やキリストを離れた魂の破産を言わんとしているのであろう。並行個所のルカ6・20では単に **貧しい人たちは幸いだ** となっているが、それは貧乏を奨励しているのではない。マタイも同様、この世的な精神、つまり富により頼まないと言う意味で貧しさを用いていると考えられる。要するに心の貧しい人とは生ける神の前に、自分の無力さを知っている人であろう。自分の財産、才能、立場、学歴等あらゆる人間的なものに拠り所を持たない人である。そのような人こそ神の支配下にある幸いを経験している。

4　悲しんでいる　とは、単に泣いている人のことを言うのではない。イザヤ61・2～3から考えるなら、霊的かつ社会的な関心を考慮に入れる必要がある。悲しんでいるとは、自らの罪と喪失また社会的な悪と悲惨との両方に起因する悲しみを含んでいる。イエスの悲しみ（ルカ19・41）やパウロの悲しみ（ローマ7・24）が意識される。神に対する罪を悲しんでいる者は大いなる慰めを経験する（5・3～4）。

5　柔和な人　とは生まれつきの性質ではなく、波風を立てないイエスマンのことでもない。謙虚さや親切心を持ち、攻撃的な態度に出ない人のことである（参照民数記12・3、モーセ）。また真理のために戦い、必要ならば死をも辞さない人である（参照使徒7・54～60、ステパノ）。このような人は僅（わず）かなもので満足し、幸せを味わう。まさに地を支配していると言えよう（参照詩篇37・11）。

6　義に飢えかわいている人　とは、主なる神との正しい関係に飢えている人である。また神のことばに服従することを自覚する人のことでもある。つまり神のみこころに生きる人のこと。実際には主の十字架を仰ぎ（Ⅱコリント5・17、21）、罪を告白し続け（Ⅰヨハネ1・9）、永遠の神の国における義の完成を待ち望む（ピリピ1・10～11、コロサイ1・22）人のことである。

7　あわれみ深い人　とは、他者の赦しのために寛大な特徴を示す人のことを言う。特に苦しみのために深い同情心を持ち、あらゆる種類の癒（いや）しを提供しようと関わる人。また6・12、14～15にあるように神のあわれみと私たちのそれとの間には結びつきがある。そしてこの特徴は預言者のメッセージをも反映している（参照ミカ6・8）。出エジプト34・6から見れば、あわれみは神の最も基本的な属性と言えよう。

8　心の清い人　とは、倫理的な実直さへの言及であって、儀式的なきよさを言うのではない。ここでパウロ神学におけるきよさの追求を読み込むべきではない。むしろイエスが弟子たちに要求するのは、神を喜ぶことに特徴づけられる信仰の実質である。心のきよさは神への一途（いちず）な献身を表しており、イエスに従うことによって造られる内面のきよさに起因するものである。きよさは神の臨在に触れることに不可欠なものである。心のきよさは、罪の告白と結びついていて（Ⅰヨハネ1・9）、聖霊が私たちの内をきよめてくださる実際を経験し続けること。その上で神を見、主との豊かな交わりを経験し続ける（参照詩篇24・3～4）。

9　7節の **あわれみ深い人** と同様に、**平和をつくり出す人** は対人関係に焦点をあてている。**平和の君**（イザヤ9・6）であるイエスは、**その十字架の血によって平和をつくり** 出してくださった（コロサイ1・20）。シャロームのために働く人、また他者を神や各人たちと和解させる人は **神の子と呼ばれる**。

10　義のために迫害されてきた人　とは、自分自身の愚かさのゆえに他者から批判されている人のことではない。あくまでキリストのため、神のみこころに従う故の迫害である。迫害は個人的な罪やぶっきらぼうな態度に起因するものではなく、義の生活の結果でなければならない（参照Ⅱテモテ3・12、Ⅰペテロ3・14、4・14～15）。義の生活は異彩を放つ（マタイ5・14～16）。

参考図書　内田和彦『神の国はあなたがたのもの』（いのちのことば社）、D・M・ロイドジョンズ（井戸垣彰訳）『山上の説教』上巻（聖書図書刊行会）、Blomberg,C.L.,Matthew（Broadman）

7月 3日

礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ5・1～12
タイトル　ほんものの幸せ
暗唱聖句　こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。　マタイ5・3
目　標　本当の幸せをイエス様の教えによって知る。

（小野）

導入

「幸せになりたい」「幸せってどこにあるの？」「ほんとうの幸せって？」「いつまでも幸せでいたいよ」みんなもこんなこと考えましたか？ 今だって考えている子がいますか。幸せな子になるようにと願って「幸子（ゆきこ）」とか「幸子（さちこ）」とか、「幸（ゆき）」、「幸（みゆき）」なんて名前をつけてもらった子もいっぱいいると思います。今日はイエス様の教えから、本当の幸せって何なのか心に刻みましょう。ではまず、

みんなが思っている幸せは？

さあ、どうですか？ みんなが幸せって思っているのはどんなことでしょう？ お金がいっぱいいっぱいあって、何のお仕事もしなくてもルンルン遊んで暮らせること、食べ物も自分の好きなものをいつでもお腹いっぱい食べられること、ああ、これって、天国みたい！ って思うでしょうか。毎日好きなだけテレビを見たり、ゲームをしたりできること、ほしいと思うソフトもいつでもパッと手に入る！ ほんとにこれって天国みたい、幸せいっぱーいと思いますか？ さあ、どうでしょう？

聖書の中に、そんなふうに思って幸せを求めていったひとりの息子の話が載っています。イエス様のたとえ話の中です。お金がすべてと思い、お父さんが死んだ時に、もらうはずの自分のわけまえを、先にもらって、遠くの町へ出かけていきました。そこで、今まではお父さんやお家の仕事にしばられてできなかった遊びをじゃんじゃんしました。悪いこともいっぱいしました。すると、お金はあっという間になくなってしまいました。幸せと思っていたのもアッという間でした。世の中の人が考えている幸せというのは、みんなニセモノのようです。ただ自分のよくばりな心がほんのちょっと満たされるくらいですね。心の底から満足する幸せ、いつまでもつづく幸せってどんな幸せでしょう。それをイエス様が教えてくださいます。

イエス様が教える幸せは？

「こころの貧しい人たち」、え？ ルカというお弟子さんは「貧しい人たち」とだけ書いています。その時イエス様のお話をしーんと聴いていた人たちは、とても貧しい人たちでした。え？ ボクたち？ ワタシたち？ 幸せなの？ って考えたことでしょう。「悲しんでいる人たち」、えっ？ 悲しんだり、泣いたり、ため息ついたりしている人がどうして幸せなのかしら？ ワッハッハって、いつもおもしろおかしく、笑いころげている人の方が、よっぽど幸せな人たちではないの？ 神様を信じているというので、他のお友だちからのけものにされたり、いじわるされたり、もっとひどいのは、迫害される、つまり、ののしられたり、たたかれたりいっぱい苦しめられる、そういう人が幸せですよとイエス様は言われます。えーっ、なぜですか。

心の貧しい人は幸せなのです。天国がその人のものになるからです。何でも自由にでき、楽しめて天国みたい、というのと全然ちがうのです。心の貧しい人、心の中が汚れて、とてもいいものや、美しいものがない心のことです。そのことがわかることがまず幸せへの第一歩！ あの息子にもその時がきました。お金も友だちもなくなり、飢饉（ききん）が起こり、彼は村の人にやとってもらい、みんなが最低！ と思っている豚飼いをしました。食物がなくなり、ガリガリにやせて、豚の食べるいなご豆でも食べたい！ と思った、その瞬間、「ああ自分はなんてことをしたんだ。私は身も心も物乞いだ。家では雇人たちさえ幸せに養われているのに…」とハッとわれに返りました。悔い改めてお父さんの所に帰ろうと。そしてトボトボ家の近くまで行った時、お父さんは走り寄って迎えてくれました。この息子の心はとことん貧しくなって、悔い改めました。この心こそが一番幸せな心だよとイエス様は言われるのです。

「天国」、それは好きほうだい、やりたいほうだいができることではありません。神様のきよい愛のみちたところ、神様と仲直りして、きよい愛の交わりができるようになった心、その心に天国はもうすでにきているのです。そして、神様といつも交わるこの幸せは、いついつまでも続いて、決してなくなったりしない、本当の幸せなのです。「悲しんでいる人たち」それは、自分の罪を心から悲しむ人たちです。そういう人たちの心に、あなたの罪は赦されたよと大きな慰めをイエス様はくださいます。さあ、イエス様が教えてくださっているホンモノの幸せの中を歩きましょう。

♪ハッピネスはしあわせのこと♪（友よ歌おう66番）

7月 3日

ワーク解説

ワーク A

●話し方のヒント
皆さんは毎日幸せですか？ 毎日遊べて楽しいですか？ イエス様は、本当の幸せはただ毎日楽しいということではなく、天国に行けることだよ、と言われました。どんな人が天国に行けるのでしょうか。それは心の貧しい人です。「私の中には神様に喜ばれるきれいな心がありません」と悲しんで、「イエス様、わたしの汚い罪を赦して、きれいな心を与えてください」とイエス様を信じてお願いする人が、天国に行ける幸せな人です。

●ワークについて
今日のみ言葉の文字をたどってゴールしよう。

ワーク B

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　私たちの考えている幸せと、イエス様の教える幸せがどんなに違うものであるかを、しっかりと知ることが大切です。

●質問3　その幸せをいただくには、自分の心の中には罪があると分かることが大切です。その罪の身代わりとなってくださったイエス様を信じ、イエス様の教えてくださる幸せをいただきましょう。

ワーク C

●み言葉を覚えてから書き入れます。まずは空欄を埋めないで暗唱し（3回ぐらい）その後書き入れます。

●第2問　自分の罪を認めると同時に、イエス様の救いを求める（助けが必要と認める）ことも、確認できたら良いかと思います。

●第3問　答え【イエス様】【とりのぞき】【いつも】神様と共にいる所が天国であること。神様と共にいるために、罪が取り除かれる必要があったこと。そのために罪を認め、イエス様を信じる必要があること。天国は死んでからのものだけでなく、今与えられる恵みであることなどを、この問を通して確認してください。

ワーク D

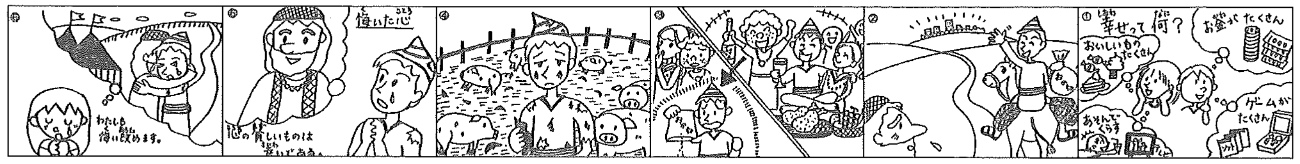
●2．の①、⑧のどれにも該当しない子どもには、気持ちを聞いてあげるチャンスでしょう。「あなたはどれにもあてはまらないの？」「自分にあてはまるものがなくて淋しい？」「あなたはどんなタイプだと思う？」など適切な質問を投げかけて気持ちを聞いて上げると、話してくれることがあります。どんな子どもも自分に関心を示してくれることを喜びますし、心を開く大きな助け、きっかけとなるでしょう。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう
1　あなた（中高生）が考える幸せとは何ですか。楽しい友だちづきあい、勉強や部活が充実していること、音楽、映画、ゲーム、ファッション、趣味など…）
（例・勉強や部活が充実していること、楽しい友だちづきあい、音楽、映画、ゲーム、ファッション、趣味など…）
2　あなたが考える幸せがかなったならば、ほんとうに幸せになるのでしょうか。その幸せを失ったらどうなりますか。（中高生自身が物質的な幸せだけでは行き詰まってしまうことに気づいてほしい）

●考えてみよう
1　今日の聖書には「さいわい」であると9回でてきます。あなたが今まで考えていた「幸せ」とちょっと違うのでは？（幸せについての発想の転換）
2　「貧しい、…、義のために迫害されてきた人」の8つの項目を考えてみましょう。［聖書講解、研究資料を参照］
3　「天国」（3、11）という言葉がありますが、どんな意味ですか。（死後の天国だけではなく、この世でも神の支配の中に生きること）

●自分に当てはめてみよう
1　この世の幸せだけではなく、主イエス様の言われた幸せを求めていく生き方とはどんな生き方でしょうか。（先生も一緒に考えよう）
2　「天国」を意識することはありますか。（例・信仰の先達たちの召天、困難な時の神の臨在）



聖書　マタイ5・13〜16

テーマ　世の光

論

（鎌野）

先週は「天国＝神の国」に生きる人々のさいわいを見た。しかし、そういう人々は自分のさいわいを喜ぶだけではなく、この地、この世において果たすべき使命があることを忘れてはならない。主はその使命を二つのたとえで示されている。一つは〈地の塩〉で、他は〈世の光〉である。塩と光は対照的な性質をもっているが、両者には共通点もある。それらを見いだすなら、主の言おうとされていることがより明確になるだろう。

一、地の塩の使命

塩にはまず、自らを溶かして食物に味をつける働きがある。神の国に属する者は、それぞれが生かされている地（家庭・学校・社会）において、自分が犠牲になったとしても、周囲の人々に良い味を与える使命があるのだ。パウロも「いつも、塩で味つけられた、やさしい言葉を使いなさい」（コロサイ4・6）と命じている。また塩は、腐敗を防ぐために用いられる。昔から、腐りやすい魚や野菜を塩漬けにする手法は広く用いられていた。それと同様に、神の国に属する者には、この地に悪が広がるのを防ぐ働きが委ねられている。

しかし、〈もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、何の役にも立たず、ただ外に捨てられて〉しまうだけである。この主の厳しい言葉を真剣に受けとめる必要があるだろう。私たちはこの地上の人々と決して同じであってはならない。塩のききめを失ってはならないのである。

二、世の光の使命

自らを溶かす塩とは対照的に、光はまず人々の目をひく働きをする。〈山の上にある町は隠れることができない〉。エルサレムは小高い丘の上にあったため、町の灯は遠くからでも目についた。同様に神の国に属する者は、闇（やみ）の中にある人々に行くべき道を示す使命がある。また、〈あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させる〉。光に照らし出されるとき、善と悪ははっきりする。「光の子」は、「実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい」（エペソ5・11）と命じられている。

塩がききめを失ってはならないように、光は枡の下に置かれてはならない。〈あなたがたの光を人々の前に輝か〉すべきである。と言っても、自分が立派な人物であることを宣伝するためではない。〈人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるように〉なるためである。なぜなら、光の源は、「すべての人を照すまことの光」（ヨハネ1・9）である主イエス、また「わたしは世の光である」（ヨハネ8・12）と言われる主イエス以外におられないからだ。私たちはその光を反射する者でしかない。月の表面は黒い岩石だが、あの強烈な太陽の光に照らされているからこそ、暗い夜空に輝いている。

三、塩と光の共通点

塩も光も、周囲の物とは違っていることに注意しよう。自らを溶かすか、人目に留まるか、その働き方は違うが、どちらも周囲に影響を与える点では同じなのである。神の国に属する者は、この地、この世と同じ価値観をもっていてはならない。世の人々が不幸と思うことを幸福と感じ、世の人々が損と思うことを得と理解するとき、私たちは地の塩、世の光となることができる。

また、塩も光も、少量であっても大きな働きをすることにも目を留めよう。塩は入れ過ぎるとかえって味を損なう。停電の時は、マッチ一本の光が安心感を与える。神の国に属する者は、昔も今も、決して多数ではない。しかし、その少数者がこの地の腐敗を防ぎ、この世に希望を与えているのである。過去にどれほど多くのクリスチャンが地の塩、世の光となったであろうか。彼らに続く者たちが、今必要とされている。

結論

もし、塩と光がこの世界からなくなれば、人類は一日たりとも生きていくことができないだろう。塩型の静かなクリスチャンであっても、光型の活発なクリスチャンであっても、主イエスはそれぞれにふさわしく用いてくださる。この地の腐敗が進めば進むほど、この世の闇が増せば増すほど、少量の塩が、小さな光が、より重要となる。彼らの働きによって、父なる神の御旨が実現し、神があがめられるようになるからだ。教会学校の役割は計りがたいほど大きい。

研究資料

（足立）

5・3〜12に主の弟子が持つ真の幸福感が提示されているとするなら、13〜16には主の弟子の役割、すなわちキリスト者が福音を生きる姿が映し出されていると言えよう。キリスト信仰者は神に敵対するこの世に属する者ではないが、この世に遣わされている。この世の価値観やものの見方とは一線を画す必要があるが、この世から退却するのではない。現実の社会の中でキリスト者として、神と人とに仕えるのである。キリストの祝福に与った者には、その責任が伴う。

テキスト

13　あなたがたは が強調されている。イエスは一般の群衆にではなく、彼に付き従う者に特に語りかけている。ここでは約束を与えているのではなく、一つの主張をしている。ここでは隠喩（いんゆ）としての **塩** と世の人々への言及として **地** を理解することが大切。イエスは明らかに防腐剤としての塩の機能を考えている。特に冷蔵庫がなかった1世紀のパレスチナにおいて塩は貴重な防腐剤であった。その防腐的効果から考えると社会に対して良きこととは、主の弟子たちが倫理的な健全さを保つことである。不正に対して彼らは反対する必要がある。主の弟子は社会で善を貫き、倫理の降下防止のために行動することが求められる。その意味で塩の効き目を失ったなら、キリストの証人として何の力も持たない。結果的に投げ捨てられ、役に立たない証し人として踏みつけられる。

14　再び **あなたがたは** が強調され、多くの群衆にではなくイエスに付き従う者に適用されている。**世の光** とは、世界が闇（やみ）の中にある意味を含んでいる。これはイエスにあてはめられた表現である（ヨハネ8・12、9・5、参照ヨハネ12・35）。このことが主に従う者にも使われていることが興味深い。もちろんその意味はまったく違う。キリストはご自身が光である。一方主の弟子たちは光なるキリストを指し示す以外の何者でもなく、キリストの反映者である。彼らは「主にあって光」となっている（エペソ5・8）。そして主の弟子たちは闇の世界に光をもたらし、この世界は主の弟子たちを抜きにして光を知ることはないであろう。主は弟子たちが光を提供する必然的な存在であることにポイントを進めている。**山の上にある町** が隠れることはまったく不可能である。弟子たちは世俗的な民であってはいけない。真のキリスト者であるなら隠れることはできない。

15　更に視覚的な例が挙げられている。ランプは **家の中のすべてのものを照させる。** これ以外にあかりをともす目的は全くない。そのあかりが特定の場所に拡散し、放射することにある。この家庭的な挿絵は弟子としての重要な機能を明らかにしている。主の弟子の存在目的は光を提供することにある。光を与えることは一つの付属品ではない。いわば弟子は選択するかしないかである。イエスは光を与えるためにご自身の道を選択された。照らす光の性質上、人々が福音の光を受け入れるとき、彼らは闇の世界を照らすようになる。明るさをもたらすことこそ光の真骨頂である。

16　**あなたがたの光** とは、もちろん取り入れた光である。弟子たちはイエスから光を受けたのだから、世に輝くことができる。この光は人々が見る **よいおこない** にあって放射される。但し行動は慎重に理解されなければならない。というのはパリサイ人のような人々がいたからである。実に彼らは他者に見られることで良い行いを確かめた。イエスが推奨しているのはパリサイ的な態度ではない。見られるべき良い行いは行為者が賞賛されるためにではなく、観察者たちが **天にいますあなたがたの父をあがめるように** なるためにある。そこには徳の行列や自らが賞賛を得る企てがあってはならない。輝かすべきは **光** であって、光の運搬人である特権者たちでない。人々は弟子たちがする行為を常に見ている。そこで弟子たちは自分たちが見る光を確認する。神賛美にいたる道こそ、弟子たちの本分である。また人々が神を崇めるに至ることが最終目的である。ここで本福音書において神が初めて **父** と呼ばれている。神は旧約聖書において、またユダヤ人によって時々父と呼ばれたが、それは特性ではなかった。しかしイエスと彼の弟子たちにとっては特性であった。マタイはしばしば天との関連で父と称している（5・45、6・1、9、7・11、21、10・32、33、12・50、16・17、18・10、14、19）。

参考図書　内田和彦『神の国はあなたがたのもの』（いのちのことば社）、D・M・ロイドジョンズ（井戸垣彰訳）『山上の説教』上巻（聖書図書刊行会）、Morris,L.,The Gospel According To Matthew（Eerdmans）.

礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ5・13〜16
タイトル　光を輝かそう
暗唱聖句　人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。　マタイ5・16
目　標　光の子として生き、天の父があがめられるようにしよう。

導入

（小野）

幸せな一週間をイエス様といっしょに過ごしましたか？ 多くの人が悲しいのは不幸だと言ってるのに、私たちは「悲しむのは幸せ」と言います。他のお友達から見ると、変わってるねと言われそうですね。でも、私たちは他の人とはちょっと変わった子どもたちでいいのです。へえ、そうなの。どういう意味でしょうね？

この世は「やみ」

「赤信号、みんなで渡れば、こわくない」という言葉を聞いたことがあるでしょう？ 神様のことを信じない人たちは、平気で悪いことをします。ある人々は、胸がどきどきするけれど自分だけ他の人と違うことをするとのけものにされることをいやがって、みんなと一緒に悪いことをします。こういう人たちはみんな「やみ」の中にいるとイエス様は言われます。テレビや新聞には、毎日毎日、信じられないような恐ろしいことが出てきます。みんな「やみ」の力にしばられているのです。私たちの毎日はどうでしょう？ そんな恐ろしいことや、激しいことや、すごく悪いことはしないかもしれないけれど、みんなで一緒にいると、ついついつられて悪いことをしてしまうということはないですか？ 道で困っている人を見ても知らん顔、泣いている子を見ても知らん顔、それに神様のことなんか、全然見向きもしない人々ばかり!? なんという世の中なのでしょう。悲しくなりませんか？ どこかにこの「やみ」を照らしてくれる「光」はないのでしょうか。

私たちは「光」

「光」はどんなに小さくても、すごい力があります。暗やみの中で、小さなろうそくをともすだけで、心がほっとして、暖かい気持ち、明るい気持ちになるからすばらしいです。私たち、教会学校へ行って、イエス様を信じている子どもたちは、「世の光」なのです。えーっ、でもぼく、そんなすごいことなんかできないよ、私も小さいし、恥ずかしくて何もできないよ、と言いたくなります？ そう、小さくてもいい、何も特別にスゴーイことをしなくてもいいのです。他のお友だち、他の人たちとまず違うところは、「日曜日には教会へ行って神様を礼拝する」ということですよね。そんな、せっかくの日曜日をもったいない、堅苦しいところでじっと座ってお説教聞くなんて「やめとけ、やめとけ」ってみんなは言うかもしれません。でも神様の愛を知った私たちはやっぱり日曜日は教会！ それだけで、私たちは「やみ」に輝く「光」となるのですよ！ このほかにも他のお友だちが悪いことをやっていても私はできない、という時、そこでもあなたは「光」となっているのです。

エリック・リデルさんの話

リデルさんはイギリスのスコットランドの人。将来は神様のために中国へ宣教師として行こうとしていましたが、神様から与えられた「速い足」をもって神様の栄光をあらわそうと、一九二四年のパリ・オリンピックに出場しようとしていました。その時リデルさんは26才。ところが一生懸命練習した出場予定の百メートル走の種目は、日曜日にあるとわかりました。「安息日には走れない」。神様を心から信じ敬うリデルさんは、回りの人たちとは同じ考えではありませんでした。国の栄誉のためだ、ぜひとも走ってくれとどんなにコーチや皇太子から頼まれても「安息日には走れない」と、ゆずりませんでした。ついに、百メートル走でなく、四百メートル走の人と種目を代わってもらうことになりました。テクニックから言えば、ずい分違う種目になったことでしょう。でもリデルさんは、神様のことを第一にしたのでした。スタート・ラインに立つリデルさんに、一人のアメリカの選手が小さいメモを渡しました。「私を尊ぶ者を、私は尊ぶ」（サムエル上2・30）そのメモを握りしめて、ヨーイ、ドン！ リデルさんは、みごとに一番でゴール・イン！ 応援していた人々は歓声と拍手をもって立ち上がりました！「ブラボー、ブラボー！」神様は神様のことを一番にして、与えられた「速い足」で走りぬいたリデルさんを栄誉で飾りました。そしてリデルさんは、まぶしいばかりに、天の父なる神様の栄光を輝かせることができました。

今、小さい私たちがまず「光の子」として日曜日に神様を礼拝しましょう。み言葉を大切にして従う時、私たちも光を放つようになるからです。

♪わたしは小さい光です♪

（ホーリネスこどもさんびか 79番）

ワーク解説

ワーク Ⓐ

●話し方のヒント

皆さんの心は光の心ですか？ 闇（やみ）の心ですか？ 光の心とは、神様に喜ばれるきれいな心、愛の心です。反対に闇の心とは、神様を悲しませる、汚くて悪い罪の心です。大人も子どもも、ほとんどの人の心はこの「闇の心」なのです。けれども教会学校に通い、イエス様を信じる皆さんは、イエス様が光の心に変えてくださったので、どんなに周りの人々が悪いことをしていても、清く正しく愛をもって歩むことができるのです。ハレルヤ！

●ワークについて

光の子・闇の子の行いを、それぞれに貼（は）りましょう。

ワーク Ⓑ

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　やみの中の生き方と、光の中の生き方を具体的に考え、話し合うことはとても大切です。リデルさんの生き方は勇気を必要としますが、その勇気は、神様が与えてくださると励ましましょう。

●質問3　やみと光のどちらの中を生きているかを考えましょう。私たちはイエス様を信じ、光の子としてみ言葉に従い、天の父が崇められる歩みをしましょう。

ワーク Ⓒ

●み言葉を覚えてから書き入れます。まずは空欄を埋めないで暗唱し（3回ぐらい）その後書き入れます。

●第2問　太陽、月、星、電球、蛍など。

●第3問　暗闇（くらやみ）を照らす、物をあたためる、行く先を示すなど。

●第4問　答えを選ぶだけでなく、私たちにできる光の仕事を考えてもらいます。

ワーク Ⓓ

●2．の実験ができるように準備をしてください。無理な時はどちらか片方でも結構です。それぞれ実験の感想を述べ合います。

●3．は自分はどちらのタイプかを考えます。

●塩も光もとても大切なものです。それと同じように、私たち一人一人も世にあってとても大切な存在であることを自覚できる時間になりますように。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　自分の存在意義（家族、友だち、学校などで）を考えたことはありますか。

選択肢は、①必要とされている　②必要とされていない　③わからない。

2　①はこれからも周囲の期待に答えてください。②は自分で勝手にそう思ってしまっているのでは。③はあなたにも必ず存在意義はあるはず。

●考えてみよう

1　主イエス様は神様を信じて生きている人を「地の塩」「世の光」としてくださいます。

2　「地の塩型」は、目立たない、静か、陰で人を生かす、黙っていてもジワジワと良い影響を与えるような人。

3　「世の光型」は、目立つ、活発、リーダーシップがある、その人の存在で周囲が明るくなるような人。

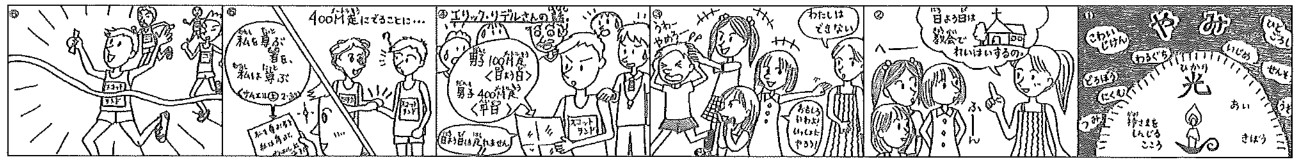
4　「世の光型」だけではなく、「地の塩型」も必要なのです。

●自分に当てはめてみよう。

1　小さな存在でも「地の塩」「世の光」となれるように祈りましょう。

2　存在意義がなくなってしまう危険性も主イエス様は指摘しています。あなたにとってはどんなことでしょうか。（世との妥協、罪の誘惑）

3　あなたの存在によって神があがめられるとはどんなことでしょうか。



7月

17日 聖書講解

聖書 マタイ5・43〜48

テーマ 天の父

序論

（鎌野）

地の塩、世の光としての働きは、律法を真の意味で実行することによって実現する。当時の律法学者やパリサイ人は、律法を厳守していると自認していたが、神の国に属する者は、彼らの義にまさっていなければならないと主は宣告された(5・20)。そして、当時の律法解釈の例を6つ挙げ(21、27、31、33、38、43)、それらにはるかにまさる律法の真意を示されたのである。今週は、6つの例の総まとめといえる最後のものを学んで、律法の本来の目的は何かを探り出そう。

一、地の人の思い

ここに挙げられている6つの例はみな、〈『……』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである〉という定形文になっている。『……』と書かれていたこと」ではないことに注意しよう。これらは律法そのものではなく、当時の人々に伝承として伝えられていた解釈であった。最後の例でも、〈隣り人を愛し〉は、確かにレビ19・18の引用だが、〈敵を憎め〉とは、律法のどこにも書かれていない。しかし、当時のユダヤ人は、異邦人の敵に侵略され苦しめられてきた過去の歴史を振り返るなら、敵を憎むことは当然のことだと思っていた。また、同じユダヤ人でありながら、ローマ帝国の手先になって重税を取り立てている取税人も敵であった。〈隣り人を愛し、敵を憎め〉という定めなら、ユダヤ人でなくても皆、「そのとおりだ」と賛成するに違いない。それが一般的な「地の人の思い」であろう。

二、天の父の思い

だが主イエスは、〈敵を愛し、迫害する者のために祈れ〉と言われた。これが「天の父の思い」なのである。なぜなら、〈天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである〉。天の父は、隣り人でも敵でも区別されない。全世界の人々をまったく同じように愛してくださっている。〈自分を愛する者を愛〉することや、〈兄弟だけにあいさつ〉することなら、ユダヤ人が悪人と思っていた取税人や異邦人でも同じようにしているではないかと、主は聴衆に厳しく迫られたのである。

主イエスは、当時の律法学者やパリサイ人の律法解釈は、「地の人の思い」であって、「天の父の思い」でないことを見抜いておられた。彼らは、これ以前の5つの例においても、外見だけを整える行動さえすれば律法を守る義人であると考えていたが、主が命じられたのは、単なる外面的な義ではなく、もっと内面的な義であった。天の父は、人の行動ではなく、その動機を問われるからである。律法の本来の目的は、正しい動機で正しい行動をとらせることにほかならない。これこそが、律法学者やパリサイ人の義にまさる、真の義をもたらすものであった。主は、当時の律法解釈を遥かに超えることを教えられたのだ。

三、天の父が求められる完全

最後に主は、〈あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい〉と命じられる。「こんな命令は実現不可能だ」と言う人々もいるだろう。しかし、あきらめてしまえば、それまでである。たとい人間的には不可能のように思えても、主のご命令であるならば、それを目指して行かねばならない。

主が、6つの例の最後に〈敵を愛し、迫害する者のために祈れ〉と言われたことに注目したい。後に記されているとおり、神と人を愛することこそが最も大切な戒めだからである(22・34〜40)。「律法の全体は、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』というこの一句に尽きる」(ガラテヤ5・14)。愛は感情ではなく、意思であることを忘れてはならない。敵を好きになれなくても、敵のために祈ることはできる。主ご自身、敵のために祈られた(ルカ23・34)。天の父が求められる完全は、神と人を心から愛することによって成就する。そのときにこそ、〈天にいますあなたがたの父の子となる〉ことができるのである。

結論

神の国(＝天国)に属する者は、天の父の子であることを忘れてはならない。子ならば父に似た者となる。父と共に生きて、父を愛し、その教えと行動とに従うならば。父がすべての人を愛されているのなら、子である私たちもそれに倣おうではないか。それでこそ、私たちは地の塩、世の光としての使命を果たすことができるのである。

7月

17日 研究資料

研究資料

（足立）

この個所はクリスチャンが愛の基準を考える上で根本的に重要なことを教えている。私たちはみな自分の友だちなら愛せるが、自分の敵を愛することはまったく別問題である。しかしイエスに従う者は、自分たちが生まれながらに持っている基準を選ぶべきではない。主の弟子が仕える神は愛の神であり、それ故彼らは愛する人々になるように求められている。イエスは弟子たちが神の愛から徹底して学ばなければならないことを指摘している。神の良き贈り物である日差しや雨は、良い人々と同様に悪い人々の上にも等しく与えられている。神に仕える人々は友と同様に敵対する人々にも同種の寛大さを示すべきである。

テキスト

43 イエスは27節や38節にあるように同様の導入的な常套(じょうとう)語句を用いて律法学者の教えを紹介している。「隣り人を愛し」とはレビ記19・18からの引用であるが、**あなた自身のように** が省略されている。これはレビ記が求めるよりかなり低い基準を律法学者が設定したことを示している。イエスは当時の解釈者たちが、聖書それ自体が引き合いに出していない敵に対する教えを認めたことを要約しているように思える。というのは「敵を憎め」とは旧約聖書のどこにも主張されていないから。実際敵に対する教えは複雑である。確かに敵に対する厳しい態度を説き聞かす個所はある(出エジプト34・12、申命記7・2、23・6)。詩人も神を憎む者を憎むよう言及している(詩篇139・21〜22)。しかし他の旧約聖書の個所は少なくとも在留異国人に愛を示し(レビ記19・34)、敵にさえ助ける態度を示すよう求めている(出エジプト23・4〜5、箴言25・21〜22)。律法学者やパリサイ人は隣り人をイスラエル人に限定した故、憎しみの規定を加えたのであろう。

44 イエスの言葉は強調的に対照を示す常套語句である。**愛** が単に賞賛されているのではなく命令されている。**敵** とは神の民の共同体の外側にいて、かつ敵対する人々のことであろう。宗教的迫害に対する弟子たちの態度は、報復を越えて積極的な愛を求められている。そしてイエスが意味する具体的な行動は、迫害者のために祈ることである。しかしこれは私たちのセンチメンタルな感情からは出てこない。主の十字架によって贖(あがな)われた者として、彼の十字架上の祈りを想起させられる(参照ルカ23・34)。殉教者となったステパノの最後の言葉は、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」(使徒7・60)であった。

45 迫害者を愛し彼らのために祈ることは、天の父の子である存在として、私たちクリスチャンの最も重要な部分の一つである。結局神は、**悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる。** 神はご自身の御子を与えるほどに反逆する罪人たちを愛して下さった(ヨハネ3・16、ローマ5・8)。私たちが神の子であるなら、神のご性質を持つに至る。義のために迫害されることは預言者たちと自らを一列に並べることになる(5・12)が、私たちを迫害する者を祝福し祈ることは、神のご性質と自らを提携させることになる。

46 **取税人** とは、当時パレスチナを支配していたローマ帝国の手先となって、同胞のユダヤ人から税金を徴収していた者たち。彼らはしばしばローマの権威を使って不正な取り立てをしていた(ルカ19・8)。言うならば彼らは貪欲の代名詞のような存在。イエスがここで言わんとすることは、どんなに自己中心で自分の利益しか考えない人間でも、自分を愛してくれる人は愛するではないかと言うこと。

47 **異邦人** は、まことの神を知らず、偶像を拝み、キリストの救いを知らない人々。聖書の神を知らない異邦人でさえも、**兄弟** には挨拶するではないかと言うこと。言い換えるならイエスに従う者は社会の低水準に屈服していてはならないと言うこと。弟子は天の父に自らを倣わせる存在。友好関係にある人を愛したからと言って、主の弟子にとって特別なことではない。それは律法学者やパリサイ人の義にまさっていない。神のみこころは、敵をも愛する愛に私たちをレベルアップしようとするところにある。

48 真に新生した者は天の父に似せられていく。失敗や挫折を繰り返し、不完全な自分を認めながらなお主にある完全を求めて続けていく。

参考図書 内田和彦『神の国はあなたがたのもの』(いのちのことば社)、Carson,D.A.,The Sermon on the Mount(Baker), France,R.T.,MATTHEW(IVP),Morris,L.,The Gospel According To Matthew(Eerdmans).

礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ5・43～48
タイトル　天の父の子として
暗唱聖句　敵を愛し、迫害する者のために祈れ。　マタイ5・44
目　標　天の父の完全な愛を知り、信じる。

（小野）

導入

夏がやってきました！ 子どもたちの大好きな季節、暑い夏、まぶしく輝く太陽。そのほかに何を思い浮かべますか？ 熱い、熱い神様の燃えるような愛！ 今日の聖書の中にも、「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ」とあります。今日は私たちの天のお父様の愛がどんなものか、その天の父の子として、私たちはどのようにしたらいいのか考えてみることにしましょう。

ふつうの人の子

今日のみ言葉の中に「隣り人を愛し、敵を憎め」と言われていた、と記されています。これは、神様に選ばれた、神様に愛されているユダヤ人たちによってずーっと言い伝えられてきた言葉です。神様から与えられた律法の中には、「隣り人を愛し」というのはあっても、「敵を憎め」というのはありません。ユダヤ人たちは、これまで神様を信じない人々に捕らわれたり、苦しめられたりしてきたので、敵を憎むのは当たり前と思っていました。それにイエス様のおられた頃は、ローマに支配されていたので、ローマの手先になって高い税金を取り立てる取税人たちも、「敵」だったのです。同じユダヤ人だったのにー。もともと神様を知っているユダヤ人たちだってこんなだったのですから、神様のことを全然知らない、信じない「普通の人」だったら、隣り人を愛することだってむずかしいし、敵なんか、憎んで当たり前でしょう！ だから神様を信じない人たちの間には、いつも憎み合いや争いとか恐ろしいことが次々とおこるのです。

天の父の子

そんなユダヤ人たちに対して、そして今日、私たちにも、イエス様は、「天の父の子として生きるのですよ」とお話ししていてくださいます。天の父の愛がどんな愛かというと、「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」とあります。そのとおりですね！ 天の父なる神様の愛は「完全」と、イエス様は言われます。そんな天の父の子となるためには、どうすればいいのでしょうか。イエス様の言われることは、ユダヤ人たちの言い伝えとは全然ちがっています。「しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と！ いったい、敵を愛することなんて本当にできるのでしょうか。本当にできるようにしてくださるのが天の父です。感動的な、本当にあった事をお話しします。

例話

エリック・リデルとスティーブン・メティカフ・スティーブンは1927年、中国に誕生したイギリス人です。両親が宣教師だったので18歳まで中国で過ごしました。14歳の時第二次世界大戦がおこり、日本軍によって収容所に入れられました。そこで出会ったのが彼の魂の教師となったエリック・リデルでした。ある時リデルの聖書クラスで、今日のみ言葉が開かれました。少年たちはみな、「敵」すなわち〝日本兵〟を愛する？ とんでもない教えだ、この教えは理想だと思っているのをリデルは知って、ほほえみつつ言いました。「僕もそう思うところだった。だけどこの言葉に続きがあることに気がついた。〝迫害する者のために祈れ〟とね。イエスは愛せない者のために祈れと言われた。だから君たちも日本人のために祈ってごらん。人を憎む時、きみたちは自分中心の人間になる。でも祈る時、きみたちは神中心の人間になる。神が愛する人を憎むことはできない。祈りは君たちの姿勢を変えるんだ。」そう言うリデル自身、毎朝15分早く起きて日本と日本人のために祈っている人でした。この敬愛するリデルの言葉によりスティーブンも日本と日本人のために祈るようになり、心の変化を体験しました。リデルはやがて脳腫瘍（のうしゅよう）に犯され、43歳で天国へ帰っていきました。カナダに妊娠中の妻と二人の娘を残して。スティーブンは墓地の穴に彼の棺をおろし、ほんの十数人の人々と収容所へ帰る道すがら、心に決心しました。「神さま、もし僕が生きてこの収容所を出られる日が来たら、きっと宣教師になって日本に行きます」。1952年スティーブンは、宣教師として日本に来ました。そして、38年という長い間、天の父の子として、天の父の完全な愛を日本人に伝えてくださいました。

今日、私たちも、敵を愛し、迫害する者のために祈る、天の父の子として生きる決心をしましょう。

♪あいをください♪
（ホーリネスこどもさんびか78番）

ワーク解説

ワーク Ⓐ

●話し方のヒント

皆さんは、皆さんをいじめたお友だちを赦して優しくすることができますか？ イエス様は「敵を愛しなさい」と言われました。それは、全ての人を造られた神様は全ての人を愛しておられ、私たちが赦し合い、愛し合うことを願っておられるからです。イエス様を信じる人は、神様の子どもとされ、全ての人を愛される父なる神様の心が与えられて、敵を愛することができるのです。

●ワークについて

神様の子どもとして、「お友だちを赦します。お友だちを愛します」と告白しましょう。

ワーク Ⓑ

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　少年たちは、敵や迫害する者を憎むことは当然のことだと思っていました。しかし、イエス様は敵を愛すること、迫害する者のために祈ることを教えられました。リデルさんはその教えを実行し、少年たちを導きました。

●質問3　私たち1人1人は、今日、その教えを知りました。イエス様の教えを知った者として、そのみ言葉に従って生きる者と、主にあってならせていただきましょう。

ワーク Ⓒ

●み言葉を覚えてから書き入れます。まずは空欄を埋めないで暗唱し（3回ぐらい）その後書き入れます。

●第2問　分級の中で自分で聖書を開き、読む機会を持ってもらいたいと思います。

「太陽を上らせ、雨を降らして下さる」事が、一人一人の必要を満たす神の愛である事、またそこに差別がない事を確認します。

●第4問　【いのる】エリック・リデルの例話をもう一度思い起こすと良いです。

ワーク Ⓓ

●地に住む私たちは、地の人の思い（言い伝え、世間体、上辺（うわべ）の作法等）の中に大きな影響を受け、また自分自身もその中につかって生きていることの方が自然であり、当たり前の様に思って生きていないでしょうか。今日のみ言葉は、私たちの住む地の思いとははるかにかけ離れています。崇高で自分など無理と思ってしまうでしょうか。でも誤ってはならないのは、このように生きることによって神の子となるのではない、ということです。私たちのために十字架で死んでよみがえってくださったイエス様を信じ、受け入れるとき、神の子となる力が与えられます。そして肉によって仕上げることをやめ、信仰によって（御霊によって）歩む人こそ、神の子です。信仰によって歩む人は父の思いを喜んで受け入れることができるのです。

●4．は私たちのために十字架で死んでよみがえってくださった。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　人を憎んだことはありますか。

2　人を憎んだ時は、自分の心がすっきりしますか。（選択肢・①すっきりした。②少しはすっきりした。③ますます憎しみが増えた）

3　憎しみの心を持つ時に、自分の心も平静ではないので、苦しみませんか。

（思春期は、感情をコントロールするのが難しい時代と言えます。また情緒の不安定な子や、家族に問題を抱えている子もいるかもしれません。問題を感じた時は、祈ると共に、牧師や専門家にも相談してください）

●考えてみよう

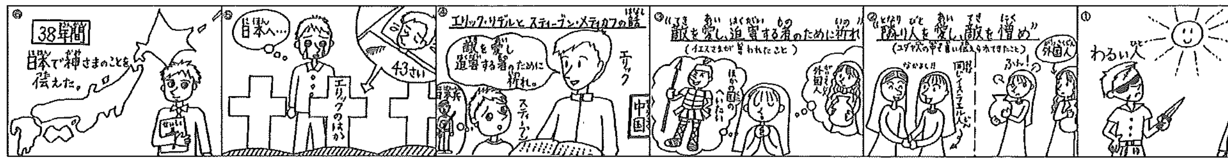
1　主イエス様は「敵を愛し」と言われました。復讐（ふくしゅう）の連鎖はどこかで止めなければなりません。誰かが「敵を愛し」て、敵を赦さなければ、復讐は止まりません。誰がするのでしょうか。

2　主イエス様は言葉だけではなく、身をもって敵を愛し、赦してくださいました（ローマ5・10）。主イエス様に赦されているならば、敵を愛することができる？ できそう？

●自分に当てはめてみよう

1　感情的には憎んでいても、憎んでいる人のために祈ることはできるのではないでしょうか。

2　祈り続けている時に、自分も冷静になれるし、憎しみの感情も神様が静めてくださるのです。そんな経験はありませんか。



7月 24日

聖書講解

聖　書　マタイ6・5〜8
テーマ　真の祈り

（鎌野）

序論

6章前半において主イエスは、律法学者やパリサイ人を〈偽善者〉と呼び、彼らと比較しながら、神の国に属する者はどのように生きるべきかを教えておられる。当時、ユダヤ人にとって重要であった三つの善行（施し、祈り、断食）において、神の国に属する者たちの動機と行動は、偽善者と根本的に違うべきであった。今週はそのうち、今日でも大切な「祈り」に焦点をあて、真の祈りはどのようなものかを考えてみよう。

一、人に見せる祈りではない

偽善者たちは、〈人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む〉。多くの人々が集まったり行き来していたりする所で、立って祈ることは、非常に目につく。偽善者たちは自分が信心深い者であることを見せびらかし、評価してもらいたかったのである。〈偽善者〉と訳されている原語は「俳優」という意味でも用いられるが、まさに彼らの祈りは演技であった。

公の祈りがみな悪いのではない。人に褒められようとする動機が問題なのである。〈よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている〉（この句は2節と16節でも繰り返されている）。真の祈りは、人に見せたり聞かせたりするものではない。公の祈りでも、「立派な祈りだ」などと評価されることを求めてはならないのだ。

二、隠れた祈りである

偽善者とは反対に、〈あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい〉。神は人の目には見えない所、隠れた所においでになる。だから、他の人のいない部屋で祈りなさいと、主は言われる。真の祈りは、見えない神に語りかけたいという動機によって生まれる。人から報われることなど、これっぽっちも考えないのである。〈すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださる〉（この句も4節と18節で繰り返されている）。神の報いは人の報いにはるかにまさる。

「隠れた」という語が、前後の段落においても多用されていることに注目したい。施しも祈りも断食も、すべて人の目から隠れたものであるべきなのだ。それこそが神がご覧になる義、律法学者やパリサイ人の義にまさる義である（6・1参照）。隠れた所におられる父を知っている者は、人の目に隠れたことがらを大切にする。隠れた祈りをする人こそ、霊的に成長していくのである。主イエスもことあるごとに、寂しい所や山へ行って祈っておられた（14・13、23、26・36）。

三、信頼に基づいた祈りである

さらに主は、〈異邦人のように、くどくどと祈るな〉と命じられた。例えば、お題目を何万回も繰り返すというような場合であろう。どんなことを祈るかよりも、どれだけ多く唱えるかが重要視されているのだ。そのように教える宗教が、異邦人の国であるこの日本には、どれほど多くあることだろうか。〈彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている〉。

しかし、〈あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである〉。人間であっても、普通の親なら、自分の子どもが何をほしがっているか、だいたい見当がつく。それでも、子どもが正直に「これ欲しいの」と言うのを待つだろう。全能の父なる神も、同じように、ご存じだが待っておられる。だから、このお方に信頼し、「事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げる」（ピリピ4・6）ことが大切なのだ。

ユダヤ人の中にも、申命記6・4〜9を柱とする祈りの決まり文句（「シェマ」と言われていた）を繰り返すだけの者もいた。また、この直後に主が教えてくださった主の祈りも、へたをすると単なる決まり文句になるかもしれない。真の祈りとは、父なる神を信頼し、一回一回新鮮な思いで、ありのままを申し上げることだ。喜びの朝も悲しみの夜も、良いことでも悪いことでも、そのまま素直に主にお話しするとき、それは父なる神の喜んでくださる真の祈りになるのである。

結論

天の父なる神に愛されている者は、神と親しい交わりの時、祈りの時を持つことを心から求める。そういう人は、偽善者にはなりえない。「私どもを偽善から救うのは、『御前の生活』、『臨在信仰』である」（『小島伊助全集』6巻273頁）。しっかりと心に刻みつけたい言葉である。

研究資料

（足立）

マタイ伝6章は、キリストの弟子が実践する敬虔に関して記している。1〜4節は施しについて、5〜15節は祈りに関して、16〜18節は断食について言及。施し、祈り、断食の三つは、当時のユダヤ人が重要視していた宗教的善行であった。

テキスト

5　偽善者たち　とは当時の律法学者やパリサイ人たちのことであるが、彼らはそのすることはすべて人に見せるためゆえ偽善者（ヒュポクリテス）である（23・5）。**会堂や大通りのつじに立って祈る**　とあるが、当時敬虔なユダヤ人は通常朝九時、昼零時、夕方三時に都エルサレムの神殿に向かって祈る習慣があった（使徒2・15、3・1、10・9、ダニエル6・10）。そこで律法学者やパリサイ人たちは祈りの時間になると町の広場や街角にわざわざ出向いて祈った。これは明らかに人からの称賛を得て、目に見える敬虔さを評価されたいためである。イエスはここで公の祈りを否定しているのではない。あくまで自分の敬虔さを人にわからないようにすることを求めている。祈りは神に聞いていただくもの。

6　人からの称賛を求める誘惑を避けるためには、人の目が届かない場所で祈ることが賢明。それは密室である。イエスはここで二人称単数を強調している。「あなたは…、あなたの部屋に…、あなたの戸を…、あなたの父に…、あなたの父は…」。このことにより祈りは神との個人的かつ人格的な関係（交わり）であることがわかる。**自分のへやに入り**　真の敬虔ではなく、敬虔への評価が気になる罪人の弱さを克服するためには、人が神と一対一になることが必要である。**戸を閉じて**　神と交わりを豊かに持つ人は、主と二人だけになり一切のものと隔たることが大切。**隠れた所、隠れた事**と二度同じ表現が繰り返されているのは、第三者が入ってこない状態を強調しているのであろう。親密な主との交わりは他者の介入を許さない。ここで日本の住宅事情を嘆く必要はない。密室の祈りの大切さをイエスが強調されたのは、あくまで人前で見せる祈りをするなということである。天の父は見ておられ、確かに報いてくださる。イエス自身祈るために山に行き（14・23）、いつもオリブ山で祈っておられた（ルカ22・39〜40）。

7　ここで批判されているのは偽善者ではなく、異邦人（異教徒）である。**くどくど祈る**　とは、無意味なことばを繰り返すこと。異教徒たちは言葉数が多ければ祈りは聞かれると思い込んでいたようである。もちろん主イエスは天の父への時間をかけた祈りを否定されていない。イエス自身12弟子選択の為には徹夜の祈りをささげられた（ルカ6・12）。又ゲッセマネの園では同じ内容を三度繰り返して祈られた（マタイ26・44）。ここでのイエスの主張は、祈りの量によって効果のあるなしが決まるのではないということ。

8　イエスは異教徒の　**まねをするな**　と言われた。それは祈ることばや祈りの言葉数に思いを向けるのではなく、祈る対象がどのようなお方であるかを大切にするのである。祈りの対象とは**父なる神**。実は父なる神は私たちが祈る以前から、私たちの必要をすべてご存知であられる。不信仰者は、神が私たちの必要をご存知なら、祈る必要はないというかもしれない。しかしそれは逆で、私たちの必要をすべてご存知のお方だからこそ、その神に信頼して祈る中で、主が最善をなしてくださることを私たちは経験できるのである。

9　イエスは弟子たちにどのように祈るべきか一つのモデルを提供した。**父よ**　と、イエスはまず呼びかけから教えている。父よという呼びかけはアラム語の「アバ」という幼児語で、全能なる神を「パパ」とか「お父ちゃん」と呼ぶことになる。このような子どものことばで聖なるお方に語りかけることはきわめてユニークである。**われらの**（私たちの）　主の祈りのすべては　**われらの**（一人称複数）なのである。信仰は確かに個人的な面が強いし密室の祈りもひとりで祈ることで成り立つ。しかしひとり神の前に立つとき、私たちはひとりでないことに気づかされる。自らが神の家族のメンバーであることを。**天にいます**　神は人間の知恵で量ることのできない絶対者である。

参考図書　内田和彦『神の国はあなたがたのもの』（いのちのことば社）、D・M・ロイドジョンズ（井戸垣彰訳）『山上の説教』下巻（聖書図書刊行会）、Blomberg,C.L.,Matthew（Broadman）. Morris,L.,The Gospel According To Matthew（Eerdmans）.

7月 24日 礼拝メッセージ例

聖　書	マタイ6・5～8
タイトル	お祈りしよう
暗唱聖句	あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。　マタイ6・6
目　標	本当の祈りをささげる生活をする。

導入

(小野)

「私ね、教会へ行って、賛美したり、お話聞いたりするのは大好きなんだけど、お祈りって苦手なの。うまく言えないし、恥ずかしいし、ドキドキするし、お祈りって、なければいいのにと思ったりするの」というお友だちが、いるかな？ もちろんお祈り大好き！ のお友だちもいるかも。今日は、お祈りが苦手なお友だちもホッとする、イエス様からのお話です。

本当のお祈りはこうじゃないよ

これからまず始めましょう。イエス様のおられた頃、イエス様が「偽善者」と呼ぶ人々は次のようにお祈りしていました。偽善者とは「俳優」つまり、スターという意味をもつ言葉だそうです。だから、お祈りといっても、演技するみたいにしてお祈りしていました。つまり、その人々は人にかっこいいところを見せて、すごいな、あの人のお祈りは、すごく神様を信じているんだな、と感心してもらったり、ほめてもらいたくてお祈りをしていたのです。だから、たくさんの人たちが集まってくる会堂とか、大勢の人々が行ったり来たりする大通りの、よーく目立つところに立って、かっこよく、大きな声でお祈りをしていたというわけです。

その次にイエス様は、異邦人のようにくどくどと祈るな、と言われます。異邦人というのは、神様に選ばれた民イスラエル以外の人々です。その人たちは、同じことをくどくどとくり返しお祈りをしていました。何回も何回も唱えれば聞かれると考えていたのです。日本人も異邦人です。たった一人のまことの神様以外の、神様でない神様に、何回も同じ言葉を唱えている人たちがたくさんいます。お経をあげたり、お題目を唱えたりです。こんなのはみんな、本当のお祈りじゃないって、わかりますよね。それでは、

本当のお祈りはこうですよ！

1、どこでお祈りするの？

「自分のへやにはいり、戸を閉じて」つまり、誰にも見られないで、自分のへやにはいって、戸を閉じてしまって、お祈りするならいいのですよとイエス様は言われます。つまり「隠れた所」で、ゆっくりとお祈りをしなさいということです。お祈りが恥ずかしくて、苦手な人は、ああ、よかった！ と思いますよね。そうだったら、まちがえてもいいし、本当に何でも、心から正直にお祈りができると思うでしょう？

2、誰にお祈りするの？

偽善者といわれていた人々は、自分のまわりにいる人々によく聞こえるように、大きな声を出してお祈りをしました。しかも、みんなが感心してうなるような、美しい気のきいた言葉を並べ立ててお祈りをしました。本当に彼らは一体お祈りとは誰に向ってするのか、わかっていたのでしょうか。お祈りは、「父なる神様」にお祈りするのです。そして父なる神様は、「あなたの父」「あなたがたの父なる神」ですよと、イエス様は言われます。父なる神様は「隠れたことを見ておられるあなたの父」です。誰にもわかってもらえない、誰にも言えない、言いたくない。父なる神様はそんな隠れたことを見ていてくださり、知っていてくださり、私たちが隠れた所で心からするお祈りをちゃんと聞いていて下さり、そして、「報いてくださる」。つまり、必ず答えてくださいますよ、とイエス様は教えてくださいます。お祈りが苦手の子もとても元気が出ますね！ これからは、誰もいない所で心からお祈りしましょう。それに父なる神様は、私たちがお祈りをして求めない先から、何が必要なのかわかっていてくださるというのですから、うれしくなります。さあ、どんどんお祈りをしましょう。

お祈り大好きっ子もちょっと考えましたか？ もちろん教会でみんなの前で、献金のお祈りとか、その他のお祈りをすることがあるでしょう。その時、隠れたこと、つまり私たちの心を見ていてくださる神様に、心から感謝のお祈りをしたいものですね。

集会の中で、みんなで、イエス様が教えてくださった「主の祈り」をよくお祈りすると思います。今日の聖書の続きに書かれている模範のお祈りです。この「主の祈り」も口先だけで、ツラツラと唱えるお題目のようにならないように注意しましょう。さあ、今日から、お祈り苦手っ子も、お祈り大好きっ子も、隠れた事を見ていてくださる父なる神様に、隠れて本当のお祈りをし続けましょう！ お祈り聞かれたよ、とまた先生に教えてね！

♪アーメンソング♪

（ノアオリジナル礼拝賛美集Vol．2の31番）

7月 24日 ワーク解説

ワーク A

●話し方のヒント

皆さんはいつもお家でお祈りをしていますか？ お祈りは皆さんがお父さん・お母さんとお話するのと同じ、皆さんと神様との会話です。イエス様は、神様の喜ばれるお祈りについて教えてくださいました。1、誰にも見られない自分の部屋に入り、嘘のない正直なお祈りをしなさい。2、人に聞かせて誉められるためのお祈りでなく、神様に心からお祈りしなさい。そうするなら、神様は皆さんのお祈りを、ちゃんと聞いて答えてくださいます。

●ワークについて

戸を閉じて、一人で祈ることを確認しましょう。

ワーク B

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　神様は目には見えませんが、すべてを見ておられ、祈りを聴いてくださるお方です。お祈りは人にするのではなく、神様に心から真実に、正直に祈ることが大切です。

●質問3　私たちが人の目を気にすることなく、神様に喜んでいただける心で祈りをささげる生活を送るなら、神様がお祈りを聴いてくださることがよく分かり、祈りの生活の大切さを理解し、体験することができるのです。

ワーク C

●み言葉を覚えてから書き入れます。

●第2問

①「報いを受けている」ことがどういう事なのか子どもたちに分かるように説明してください。人の評価を求めることは神の評価を失う事です。

②呪文やお経など。祈りが聞かれるかどうかは言葉の多さではない事、偶像にささげる祈りも意味がない事などを話すと良いでしょう。

ワーク D

●人前で祈って、評価を得たいとか、説明の多いくどくどした祈りは、子どもではなく、むしろ大人に多く、大人への忠告かも知れません。子どもはどちらかと言えば、祈りたいけど祈り方がわからない。何を祈っていいかわからない。と思っています。立派な言葉は不要であること、何を祈ってもいいこと、神様が聞いていてくださっていることが分かることの方が必要でしょう。（お祈りのワンポイント）を書いていますが、必要なものはこれだけなので、お祈りはとてもシンプルで簡単だとわかると思います。

●子どもにとって、お祈りの見本となる大人の祈りは、子どもたちといるときは、出来る限り簡単な日常の言葉、未信者にもわかる言葉で祈ってあげる配慮がほしいです。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう。

1　お祈りのできる人は、いつ、どんな時にお祈りをしているかな。家庭では？ 学校では？（クリスチャンホームの子でも、お祈りが疎かになったり、家族で一緒にお祈りをすることが難しい時もあるようです。またマンネリになってしまう時もあるようです。もう一度、子どもだけではなく、CS教師の方々やクリスチャンである親も祈りの祭壇を築き直しましょう）

2　お祈りのできない人は、お祈りは、簡単なので、短くても、今日、お祈りをしてみませんか。

（強制にならないように、聖霊に委ねて、祈りを勧めてみましょう。また、祈らない子は無理をしないで、次の機会に）

●考えてみよう

1　主イエス様がお祈りを教えてくださいました。偽善者の祈りとはどんな祈りですか。（人を気にする、格好良く祈ること）［説教、講解参照］

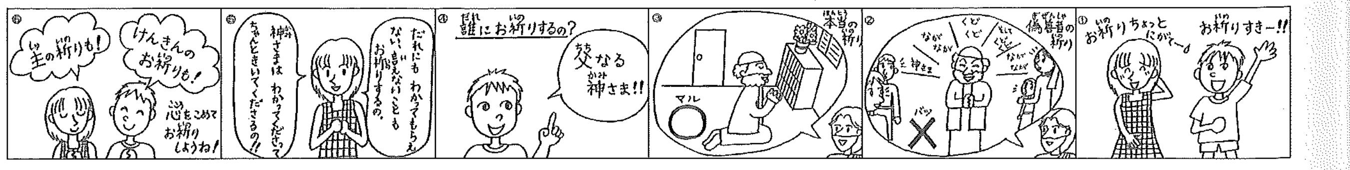
2　ほんとうの祈りとはどんな祈りですか。（正直な真実な祈り）［説教、講解参照］

●自分に当てはめてみよう

1　自分のお祈りがより良い祈りとなるように、どんなことに気をつけますか。

2　主の祈りの言葉の意味を考えて、心をこめて祈ってみましょう。

3　お祈りの課題をあげて、一緒に祈りましょう。



7月

31日　聖書講解

聖　書　マタイ7・24～27
テーマ　大切な土台

序論

（鎌野）

今週のテキストは、5章から始まった山上の垂訓の結論部分である。主イエスは、「神の国」がどのようなものかを言葉で教えられてきたが、それらを聞くだけであってはならないことを示されたのだ。同じことがヤコブ書では、「御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけない」と忠告されている（1・22）。ただし、人が救われるのは良い行いによるのではないことも忘れてはならない。救いの土台は、決して良い行いではなく、「岩」なのである。

一、土台とは何か

主イエスは大工の息子だったので（13・55）、土台の大切さをよくご存じだった。だからこそ、＜岩の上に自分の家を建てた賢い人＞という表現ができた。では、この岩（＝土台）とは何か。ペテロが主に対して「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と信仰告白したとき、主は「この岩の上にわたしの教会を建てよう」と宣言された（16・18）。岩とは、主イエスを神の子と信じる信仰である。パウロも、「わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。…この土台はイエス・キリストである」（Ⅰコリント3・10～11）と明言している。

今まで4週間、山上の垂訓を学んできたが、それらの言葉を聞いて、「自分はそのとおりできる」と言える人がいるだろうか。たとい言えても、その自信が土台なのではない。自信はしばしば失敗を招くことになる。反対に、自分にはその力がないと認める「貧しい人」こそ、キリストを土台とすることができるのである。

二、岩を土台とする人

＜岩の上に自分の家を建てる＞といっても、岩の上に直接家を建てるのではない。ルカ福音書の並行個所では、「地を深く掘り、岩の上に土台をすえて」（6・48）と記されていることに注目しよう。岩を覆っている土砂を取り除き、現れた岩の上に土台をすえることが求められているのだ。

山上の垂訓が教えている原理は、「まず神の国と神の義とを求めなさい」（6・33）という一句に集約できるだろう。先週も学んだように、主なる神、主イエス・キリストとの親しい交わりこそが、この地に神の国を実現するのである。私たちと主イエスとの間にある様々な土砂（衣食住の様々な思い煩いや、人間関係の諸問題など）を取り除き、どんな時でも主の臨在を覚えて生きることが、＜岩の上に自分の家を建てる＞ことにほかならない。そのような人は、＜雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない＞。厳しい試練に直面しても、常に主イエスのもとに逃れ出て、そのみ言葉により頼むならば、試練に押しつぶされることはないのである。

主の＜言葉を聞いて行う＞とは、必死で良い行いをしようと努力することではない。まず、聖書に記されている主イエスの言葉を聞くことを喜びとし、主が歩まれたように歩み、主の光を反射して生きることである。それが岩なるキリストを土台として生きることにほかならない。

三、砂を土台とする人

岩を覆う土砂を取り除く作業は、決して簡単なことではない。その労を惜しんで、てっとり早く＜砂の上に自分の家を建て＞ようとする人がいる。主の言葉を聞くには聞くが、そのとおり行うために必要な犠牲を払おうとしないのだ。「敵を愛しなさい」という教えを聞いても、「実際にそんなことはできっこないよ」とあきらめてしまい、「愛する力を与えてください」と主に祈り求めることをしない。主イエスに接する時間よりも、この世で楽しく過ごすことのほうを優先する。彼らは＜愚かな人＞である。普通の状態では何の問題もなさようだが、＜雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである＞。

嵐は最後の審判の日にもやってくる。パウロは「かの日は火の中に現れて、…それぞれの仕事がどんなものであるかを、ためすであろう」（Ⅰコリント3・13）と警告している。そのとき、キリストを土台としていなければ何も残らない。砂を土台にしている人の悲惨な結果である。

結論

神の国に属する者は、キリストなしでは一日も生きられない。キリストが中心におられるのが神の国だからである。このお方を土台とし、どんな時もこのお方に信頼して歩む毎日としよう。

7月

31日　研究資料

研究資料

（足立）

この7・24～27は山上の説教の結論部分（7・13～27）に含まれている。マタイはここでキリスト信仰者に二者択一の道を語っている。＜1＞狭い門と広い門（13～14）。＜2＞良い実と悪い実（15～23）。＜3＞賢い建築家と愚かな建築家（24～27）。この結論部分でマタイは、主のみ言葉を聞くだけで満足し、み言葉を実行しようとしない危険性に対して警鐘を鳴らしている。

テキスト

24　この小さなたとえにより、イエスは岩の上に建物を築いた人とその基礎を砂にした人とを比較している。その強調点はイエスの教えに従って行動することにある。主はここで彼が語ったみ言葉を聞いて賛同することを求めていない。ただみ言葉への服従を求めている。み言葉に信頼して従うことだけが堅固な結果をもたらす。原文では文頭に〝すべての〟（パス）という言葉がある。イエスの教えはすべての人に適用される。すべての信仰者が各自で主の言葉に応答するか否かが問われている。**岩**とは究極的にはキリストご自身（参照Ⅰコリント3・11）であるが、文脈から主の言葉とわかる。イエスのみ言葉を実践する人が賢い人にたとえられている。賢さの答えは、み言葉を実行に移すと言うこと（ヤコブ1・22）。

25　どんな建物でも使用する間に、何らかの劣化や損傷に直面する。従ってイエスはこの家が試みられる特定の状況をリストアップしている。**雨**は大雨、**洪水**とは大雨による河川の氾濫（はんらん）を意味する。**風**は雨を伴う暴風であろう。そしてそれらが家に打ち付けられる。最も厳しい自然の試みがその家を襲う。しかし堅固な基礎により倒れることはない。根拠は岩を土台としているから。

26　今度は愚か者に注意が向けられる。愚か者とはイエスの言葉を軽率に聞いている者のこと。ここでも文頭に〝すべての〟（パス）という言葉がある。それはどんな例外をも閉め出すことを意味する。ほとんどの言葉は24節の繰り返しであるが、**行う**（24）が**行わない**に、**岩**（24）が**砂**に、**賢い**（24）が**愚か**に置き換えられている。これは熟慮された上での砂の選択というのではなく、堅い基礎を選ぶのに失敗している。ここに描かれている人はイエスの言葉を聞いて、おそらくその内容を楽しむ者であろう。しかし彼は聞いたことを実践しない。その人が愚か者。彼こそ無感覚な行為をする愚か者。これが砂の上に家を建てる人と見なされる。不安定な底土は家を建てるにはあまりにも貧弱な基礎となる。

27　愚かな建築家にも、賢い建築家が直面したのと同じ過程の試みがやってくる。使われている言葉は、**倒れてしまう**を除いてほとんど厳密に25節の繰り返しである。雨、洪水、風の働きかけがあまりにも激しかったので、貧弱な基礎の家は持ちこたえられない。そして倒れてしまう。しかもその倒れ方は完全な壊滅。砂の上に家を建てることは、結局完全な崩壊という運命をたどるより他にない。イエスの言葉を聞いても、それに心を留めない人は誰であっても同じ結末を迎える。このことは十分な示唆を伴いつつも、驚くべき警鐘として教えられている。同様に神のさばきの前に立たされるとき、主の言葉を実行に移してきた者は揺るがされないが、み言葉を無視して生きてきた者は悲劇的な結末を迎える。

実はこのたとえの中には二重の比較がある。二人の人と二つの家である。二人の人の類似点は、ふたりとも自分の家を建てたこと。また二人とも同じメッセージを聞いていたこと。二人の人の相違点は、聞き方、受け止め方が違う。一方は主の言葉を聞いて実行に移す。み言葉の生活への適用がある。しかしもう一方は、み言葉を聞くには聞くが実行に移さない。究極的には主の言葉に関心がない。結果自分の考えや好みに関心があり、自分の何かを選び取る。

二つの家の類似点は、両者とも全く同じ試みに見舞われたと言うこと。相違点は、土台が違うと言うこと。一方は岩であり、それはみ言葉であり、主ご自身でもある。しかしもう一方は砂が土台で、砂とは主のみ言葉以外のもの。それはこの世が提供するものであり、神ご自身から出たものでは決してない。表面的にはごまかせても、本質的には何ら役に立たない。試みには耐えられない。私たちはどちらであろうか？　賢い者となるか、愚かなものとなるか、私たちは主の言葉を前にして、常に岐路に立たされている。

参考図書　内田和彦『神の国はあなたがたのもの』（いのちのことば社）、D・M・ロイドジョンズ（井戸垣彰訳）『山上の説教』下巻（聖書図書刊行会）、Blomberg,C.L.,Matthew(Broadman).
Morris,L.,The Gospel According To Matthew(Eerdmans).

7月

31日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ7・24～27
タイトル　賢い人はだれ？
暗唱聖句　わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。　マタイ7・24
目　標　一回きりの人生を岩の上に建て上げよう。

（小野）

導入

7月はずっと、イエス様の大切な教えを学んできました。今日のところはそのまとめです。ここでイエス様は、「世の中にはふた通りの人々がいます、愚かな人と賢い人です」と言われます。みなさんは愚かな人とはどんな人だと思いますか？いつもテストをすると100点満点のうちの20点とか、10点とか、時には0点なんかとる人でしょうか？それと逆に、賢い人とは90点とか、100点満点ばかりとる人でしょうか？ところがイエス様の目から見ると、10点くらいしかとれない人でも賢い人として生きていけるのです。100点満点を算数や国語や理科のテストでとっていても、その人は愚かな生き方をしていることもあるのです。エーッ!? 何が何だかわかんなくなっちゃう!?

どちらが賢い人？

イエス様のたとえ話はとってもよくわかりますよ。さて、次のふたりのうちどちらが賢い人でしょう？あるお天気のよい日、ふたりの人が家を建てようとしていました。家を建てるには土台がとても大切なことです。イエス様は大工さんでしたからこのたとえはよくわかっておられました。ひとりの人は、ざっくざっくとラクラクと砂を掘って、砂地に土台をすえました。なぁんだ家を建てるってこんなにも簡単なんだと思いました。

ところがもう一人の人は、堅い岩を掘り始めました。コーン、コーン、カチ、カチ、カチーン、一本の柱を立てるのにも何日もかかりました。一本のためにこんなに苦労するなんて、僕も簡単な土台にしようか、いやいや、やっぱり岩の上じゃないと、いざという時、家がそれこそ簡単に倒れてしまうだろう。力がいるし、とっても疲れるけど、時間がかかっても、やっぱりやりぬくことにしようと、何日もかかって、苦労に苦労を重ねて、やっと岩を土台とした家を建て上げることができました。砂の上の家も、岩の上の家も、お天気の日や、そよそよと気持のいい風の吹く日は何ともありません。ちゃんと建っています。

でも！さあ大変！大雨です。大風も吹いてきました。洪水となって大水が流れ、押し寄せ、風がビュンビュン吹きつけます。岩の上の家は？もちろん倒れることはないばかりか、ビクともしません。ああ、苦労して建ててよかったなぁ。砂の上の家は？姿も形もなくなってしまいました。その倒れ方はとってもひどかったし、何もかも押し流され、散らされてしまいました！このふたりのうち、どちらが賢い人か、よくわかりますよね。

わたしはどちら？

岩の上に家を建てた賢い人とは、「わたしの言葉を聞いて行うもの」のことだよと、イエス様は言われます。砂の上に自分の家を建てた愚かな人とは、「わたしのこれらの言葉を聞いても行わないもの」のことだと言われます。つまり、イエス様のみ言葉を土台として生きる人こそ、賢い人なのです。

まず、第一にイエス様のみ言葉をよく聞く子どもになりましょう。いつ、どこで、どうやって、イエス様のみ言葉を聞きますか？お父さんやお母さんがクリスチャンだったら、朝一緒に聖書を読むでしょうか。じゃ、お家でみ言葉を聞けないお友だちは、いつ、どこで聞けますか？日曜日、教会で、ほかの曜日の教会学校で、聞くことができるのはとっても幸せなことです。また、先生やお家の人から聞けなくても、字の読めるお友だちは、聖書を読みましょう。生きておられる神様が、み言葉を語ってくださるのです！神様のみ言葉を聞けることが誰にとっても一番の幸せなのです。どんどんみ言葉を聞いて、読んで、そして暗唱していきましょう。

第二のステップ、それは、そのみ言葉を行うということです。エーッ、とてもむずかしいと思うよ、とみんな言うかもしれませんね。でも神様にお祈りして、助けてもらうことができます。神様が行う力も与えてくださいます。やっぱりむりだよ、できっこないよ、聞くことは聞くけど、ダメだね。とあきらめるか、人生の嵐がやってきても大丈夫なように、神様、み言葉を行う力をくださいとお祈りして、できることからやっていけるようにしていく、ここがわかれ道ですね！すべったり、ころんだり、失敗したり、あきらめかけたりするかもしれないけれど、み言葉とお祈りで、どんな日も賢く歩き続けましょう。ではまず今日、岩であるみ言葉を土台とした毎日を過ごせますようにと決心のお祈りをしましょう。

♪かしこい人とおろかな人♪
（ホーリネスこどもさんびか24番）

7月

31日 ワーク解説

ワーク A

●話し方のヒント

皆さんは、賢い人ってどんな人だと思いますか？英語を習っている人？塾に行っている人？イエス様は、賢い人とは「み言葉を聞いて行う人」と言われました。み言葉は教会に行くと聞くことができます。聖書を開けば読むこともできます。み言葉を聞いて、読んで、覚えましょう。そして、そのみ言葉を行うことが大切です。み言葉を行うことは簡単ではありません。けれども、神様に心からお祈りするなら、神様がみ言葉を行う力を与えてくださいます。

●ワークについて

賢い人と愚かな人はどんな人か確認しましょう。

ワーク B

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　賢い人は岩の上に、愚かな人は砂の上に家を建てました。普段は分かりませんが、雨が降り、洪水になったら大きな違いがはっきり分かります。砂の上の家は押し流されましたが、岩の上の家は大丈夫でした。イエス様のみ言葉を聴いて行う人は、岩の上に家を建てた賢い人なのです。

●質問3　私たちはどんなところで、どんなふうにみ言葉をきいているでしょうか。私たちは神様に助けていただいて、しっかりみ言葉を行う賢い人にならせていただきましょう。

ワーク C

●み言葉を覚えてから書き入れます。

●第2問

②【解答例】聖書を読む、教会でお話を聞く、両親に教えてもらう。

③【解答例】行う力が与えられるように祈る。イエス様を信じる。などですが、解答例にとらわれず、子どもたちの考え（発想）を良く聞いてあげてください。

ワーク D

●「わたしの言葉を聞いて行うもの」という言葉を聞いて、良い行いをしなければ救われないのだと勘違いすることがあります。救いの土台は「岩」すなわちイエス・キリストご自身であり、賢い人とは彼を信じる信仰によって生きる人です（聖書講解参照）。神のみ心を無視して、ボランティアや社会活動に熱心になるのは本末転倒です。反対に神の言葉を聞くことしかできない寝たきりの人にとって、良い行いによる救いであれば救いは縁遠いものとなります。岩なる主イエスを土台とすることは、どんな状況の中にある人にも可能で平等なものであり、「キリストなしでは一日も生きられない」そのような人のことでしょう。子どもたちが主イエスを土台として人生を築けますように。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう。

1　今日で「山上の説教」は終わりです。今までのお話で特に印象に残ったことはありますか。

2　「良いお話を聞きました」で終わり、何も変わらない人がいますが、あなたはどうですか。

3　「変わる人」と「変わらない人」の違いはなんでしょうか。

●考えてみよう

1　主イエス様は、誰(だれ)でもわかる「賢い人」と「愚かな人」の話をされました。二人の人の違いは何でしょうか。
（建物は同じ、嵐も同じ、しかし、土台が違う）

2　あなたにとって現在、または将来に予測される人生の嵐とはどんなことですか。

3　嵐に耐えることができた岩の土台とは何ですか。（主イエス様の言葉を聞いて従うこと）

4　砂の上に家を建てる人はどんな人ですか。
（主イエス様の言葉を聞いても行わない人）

●自分に当てはめてみよう

1　「聞いても行わない」とはどんなことですか。
（本気になって聞いていない、聞き流して、心にとまっていない。信じていないから、行わない）

2　主イエス様の言葉を聞いて行うとはどんなことですか。（み言葉をしっかりと心にとめること。イエス様を信頼して、従って行くこと）

8月 7日

聖書講解

聖　書　マタイ8・5〜13
テーマ　百卒長の信仰

（金井）

序論

私たちは日本の宣教に厚い壁があることを感じている。この壁を破るためにまず必要なことは、主イエスの宣教に学ぶことである。主の宣教はキリスト教会の宣教の原点であり、モデルである。今も主イエスは、私たちを通して同質の宣教をこの地に進めようとしておられる。先月の「山上の教え」に続いて、今月は「主のみわざ」を学ぶ。

一、主イエスの御前にへりくだった

イエスは山を下りた後、〈カペナウム〉に帰られた。カペナウムはガリラヤ湖畔にある港湾都市である。主はここを宣教活動の本拠地とされた。

その時、ユダヤ人の長老たちがイエスのもとに来て、ある百卒長からの依頼を伝えた（ルカ7・3。マタイは出来事の細かい部分を省略している）。〈主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています〉。当時、パレスチナはローマ帝国の属州であり、ローマ軍が各地に駐屯していた。百卒長は百人ほどの部隊を率いる指揮官である。

長老たちはイエスに、「あの人はそうしていただくねうちがございます」と熱心に訴えた（ルカ7・5）。百卒長は兵卒の15倍もの給料をもらう高給取りだが、彼は自らの財力をもってユダヤ人のために会堂を建てたのである。当時、ローマの軍人の中には、割礼を受けて改宗するところまではいかないが、聖書の神を信じて、ユダヤ教の礼拝に参加する者たちがいた（使徒10・2）。

イエスは、〈わたしが行ってなおしてあげよう〉と言って、彼の家に向かわれた。ところが、その途中で、百卒長は友人を遣わしてイエスに伝言した。〈主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません〉。

ユダヤ教では、異邦人は神の契約の外にあり、神に見捨てられた者と見なされていた。彼はローマの軍人であるが、主の御前にへりくだり、自らが神に近づき得ない罪人であることを認めたのである。「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」（Ｉペテロ5・5）。

二、主イエスの権威を認めた

謙遜（けんそん）とは自らのあるがままの姿を正当に評価することである。真の謙遜は人との比較においてではなく、主の御前にある時に生まれる。主の無限の力と尊厳と栄光を認めるならば、誰でも自らの無力さ、低さを悟り、へりくだらざるを得ない。

百卒長は主の権威を認めて言う。〈ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいまして、ひとりの者に「行け」と言えば行き、ほかの者に「こい」と言えばきますし、また、僕に「これをせよ」と言えば、してくれるのです〉。

百卒長はローマ皇帝に派遣されて、領主ヘロデ・アンティパスのもとで治安の維持にあたっていた。彼はこのシステムになぞらえてイエスを理解した。ローマの全軍と属州の人民の主権者は皇帝である。百卒長は皇帝に派遣されて、皇帝の権威の下に、その権力の一部を分与されて軍隊を指揮し、ユダヤ人を制圧している。イエスは神に派遣されて、神の権威の下に、神の権力を分与されて人類を統治し、救済するメシアである（28・18）。宣教の本質は霊的な征服戦である（12・28）。この軍人はこれをよく理解した。

イエスは百卒長の言葉を聞いて〈非常に感心され〉、〈よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない〉と激賞された。今や〈東から西から〉異邦人が続々と救われて、天国に集められる新約時代に突入している。

権威の理解は重要である。神は人々に恵みを下すために、選ばれた者たちに権限を委（ゆだ）ねておられる。私たちは教会の権威と秩序を尊ぶべきである（マタイ10・1、16・18〜19、28・18、ローマ13・1〜7、Ｉコリント14・33、40、エペソ4・11）。

三、主イエスの言葉に信頼した

百卒長は主の権威ある一言で部下がいやされると信じた。イエスは言われた、〈行け、あなたの信じたとおりになるように〉。〈ちょうどその時に、僕はいやされた〉。み言葉には魂を救う力がある（ヤコブ1・21）。み言葉を信じ、伝えよう。

結論

イエスの宣教は権威ある言葉と力あるわざによって進んだ。日本の人々が救われるために私たちは①主の御前にへりくだって悔い改めよう。②イエスを全能の救い主と崇めよう。③み言葉に救いの力があると信じよう。信仰を持って求めるならば、主の救いといやしのわざがこの地に現される。

8月 7日

研究資料

研究資料

（足立）

本福音書の構成から見るなら、マタイは、山上の説教を終えたイエスが、続いて社会的に弱い立場にある人々に関わり続けたことを伝えている。マタイ8・1〜17には3人の癒（いや）しの奇跡が記されている。彼らは当時のユダヤ人の視点からは受け入れにくい人たちだっただろう（重い皮膚病に冒された人、異邦人、女性）。これらの個所はイエスの御力と同様、彼が深い同情心を持ち、人の痛みに共感するお方であることを伝えている。8・5〜13は選民意識を持つユダヤ人には大いなる挑戦となるだろうし、私たち異邦人読者には信仰の本質を教えてくれる。

テキスト

5　マタイはイエスの伝道の拠点となった **カペナウム**（参照4・13）に言及している。そこでイエスは **百卒長** と接触を持った。名前が意味するように百卒長は、初めはローマの兵士百人を管理する指揮官であったが、時の経過に伴いその数は多様であった。この百卒長はヘロデ・アンティパスの軍に所属していたと思われる（参照ルカ3・1）。彼がイエスに **訴えて言った** とは、礼儀正しいアプローチを意味している。

6　百卒長はイエスに要求はしていない。ただ事実を伝えている。**しもべ**（パイス）は直訳すれば、子、若者となる言葉。

7　イエスは率直に苦しむ者に憐（あわ）れみを示している。主が直接病める者の所に足を運ぼうとしたことは注目に値する（他にはヤイロの娘の場合がある）。他の場合は病める者がイエスのところに連れて来られた。

8　彼はイエスに自分の家に入ってもらう価値はないと謙虚な思いで伝えている。彼は客としてイエスを迎えるには、自分は不十分だと自覚していたのであろう。原文には、しかし（アラ）と訳せる接続詞がある。これには強意が含まれる。彼がイエスに求めることは言葉を語ってもらうことだけ。すなわち言葉は自分の部下が癒されるための道具である。この時点まで物理的な距離があってイエスが癒された実例はなかった。それほど百卒長の信仰は並はずれて強かった。

9　百卒長は自らが権威の考えに通じていることを示している。彼は自分の高い地位を強調しているのではなく、**権威の下に** ある自分自身に言及している。軍隊における全権限は皇帝に与えられていた。したがって百卒長は皇帝の権威に服従した。この人の応答は、イエスが権威をもって語ることに百卒長自身が並はずれた理解を持っていたことを示している。彼自ら自分より下級の兵士たちがいて、彼が与える命令によく従うことを知っている。**兵卒** から **僕** に移行していることは、大きな意味を持つものではないだろう。

10　マタイはイエスの驚きを記録している。このような信仰は異邦人に期待されるべきものではなかった。イエスは百卒長に即座に反応していないが、彼に従う人々に語った。**よく聞きなさい**（まことにあなたがたに告げます）とは、以下重要なことを語り、十分に留意すべきことを意味する。**信仰** はクリスチャンにとって大切な概念であるが、本福音書では8回だけ見受けられる（8・10、9・2、22、29、15・28、17・20、21・21、23・23）。ポイントはイエスへの信頼であり、ここでの文脈においては期待できない状況下でイエスに可能性を認め、助けを求めることにある。イスラエルの国中でイエスは百卒長のような信仰を見たことがなかった。別の異邦人であるカナンの女性に対しても、イエスは彼女が持った信仰を賞賛している（15・28）。

11　本福音書はユダヤ人を第一の読者と想定して書かれたと思われるが、マタイが異邦人の立場に十分関心を持っていることを見逃すべきではない。**あなたがたに言うが** とは、もう一つの厳かな真理を導入している。**多くの人が** とは特別な存在ではなく、イエスが膨大な人々に言及していることは明らか。**東から** とは、2・1を参照。それは特別な地域を意味するのであろうが、**西** との関連を考慮に入れるなら全世界を指すのであろう。結局救われる者は地のすべてから **きて**、多くの異邦人が含まれていることは明白。ここでの異邦人への言及が、旧約聖書におけるユダヤ人への言及の個所にも同様に出てくることは重要かも知れない（例、詩篇107・3、イザヤ43・5〜6、49・12）。救われた者の数の中に異邦人が含まれているだけではなく、彼らはここで神の国で族長たちとともに横たわることに象徴される祝福に入れられていると言うこと。

12　イエスはここで神との国家的関係のゆえに御国での将来を期待しているが、信仰の欠如の故に自分たちの立場を没収されるユダヤ人に言及している。

参考図書　内田和彦『マタイの福音書』『実用聖書註解』いのちのことば社、Morris,L.,The Gospel According To Matthew(Eerdmans).

8月

7日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ8・5〜13
タイトル　心から聞いて、信じよう
暗唱聖句　ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。マタイ8・8
目　標　主のみわざを見るために、百卒長の信仰にならう。

（山田）

導入

「船長の命令です」という命令ゲームがあります。知っていますか？「船長の命令です」とリーダーが言ったときだけ、その指示に従うゲームです。少しやってみましょう。（例、「船長の命令です右手を上げてください。」「船長の命令です。左手をあげてください」。「手を下げてください」。このとき手は下げられません。「船長の命令です」と言わないからです）。命令通りにするって難しいですか？

今日はいつも自分の僕（しもべ）（家来）に命令していたローマの兵隊、百卒長のお話です。

へりくだった心

カペナウムという町での出来事です。イエス様のところに、ローマの兵隊百人のリーダーである隊長、百卒長がやって来ました。自分の家来の一人が病気です。優しい百卒長は、とても心配です。「主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています」。百卒長はイエス様に訴えます。

その百卒長の言葉を聞いて、イエス様は、「わたしが行ってなおしてあげよう」と言われました。

「えっ！」イエス様が来てくださる？百卒長はとてもびっくりしました。それはユダヤの国では、ユダヤ人でない異邦人、外国人は神様に顧みられることなんてない、と考えられていたからです。イエス様に声をかけられて百卒長は、「主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません」と答えました。

百人の兵隊たちのリーダーで、いつも命令している、威張ってもいい百卒長です。これはイエス様に対する、百卒長のとても謙遜（けんそん）なへりくだった心です。

信じる心

へりくだった心の百卒長は、続いてイエス様に「ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります」と言いました。

家来への百卒長の言葉は絶対です。百卒長は、自分の言葉に力のあることをよく知っていました。だから、イエス様の言葉に特別な力のあることを信じることができました。

従う心

また、百卒長は家来に「行け」といえば行き、「こい」と命令すれば、その家来が命令どおりにするのもよく知っていました。だからこそ、イエス様の命令、言われることは何でも聞こうと思いました。また、百卒長には、イエス様が言われることは何でもしようとする、従う心がありました。

へりくだった心、信じる心、従う心のある百卒長は、イエス様から「行け、あなたの信じたとおりになるように」という約束のお言葉をもらいました。

ちょうどその時、百卒長の僕はいやされました。

例話

教会にいる牧師先生は、牧師になる前はお仕事をしていたり、学校に行ったりしていました。あるとき、神様は牧師先生に聖書のみ言葉をくださいました。それは今の仕事をやめて（また、学校を卒業したら）、神様のために教会の牧師になりなさい、というみ言葉です。先生はすぐに「はい」と言えたでしょうか。なかなか言えないこともあります。でも、神様にお祈りしながら、へりくだった、信じる、従う心でみ言葉を聞きました。だから今、こうして教会の牧師をしているのです。（実際に牧師先生に聞いてみてください）。

まとめ

わたしたちの心はどうでしょうか。聖書のみ言葉、イエス様の言われた言葉をへりくだった心、信じる心、従う心で聞いているでしょうか。百卒長のような心がありますか。毎週教会学校で聞く聖書のメッセージを心から聞けていますか。

聖書のみ言葉は神様の言葉です。神様の言葉には力があります。いじめられたり、困ったり、悩んだとき、いつも聖書のみ言葉から力をいただきましょう。そんなふうに聖書を読んでいくと、もっともっと神様のことがわかります。

♪みことばよくきいて♪

（ホーリネスこどもさんびか129番）

8月

7日 ワーク解説

ワーク A

●話し方のヒント

皆さんは先生やお家の人に「〜しなさい」と言われると、その通りにしますね。それは先生やお家の人が、皆さんよりも何でも知っていて間違いが無いからです。百卒長は、イエス様は何でもできる神様だから、イエス様の言われる言葉には間違いが無く、力があることを信じていました。私たちもイエス様からみ言葉をいただいて、み言葉を信じて従っていきましょう。

●ワークについて

イエス様が感心した百卒長を貼（は）りましょう。

ワーク B

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　百卒長は僕（しもべ）の病気のことで、イエス様に助けを求めました。イエス様はへりくだった心、信じる心、従う心がある百卒長にみ言葉を与えてくださいました。僕はその言葉どおりに癒（いや）されました。心を見られるイエス様をいつも思い出し、また、百卒長の信仰に倣いましょう。

●質問3　教会には神様を信じ、み言葉に従っている人がたくさんいます。その人たちの信仰の証を聞きましょう。真実な、生きた証しを聞くことによって、子どもたちは、神様のみ言葉には力があるということを良く理解できるでしょう。

ワーク C

●み言葉を覚えてから書き入れます。

●今週のワークは「イエス様の言葉に力がある」事に焦点をあてています。第2問を通してイエス様の権威を確認し、私たちもイエス様の言葉を信じて（信頼して）求めるように導けたら良いと思います。

●第2問　④人間の力で解決できない事（家族の深刻な問題など）があれば、主に信頼し、み言葉を求めるように共に祈ってあげましょう。また、教師がその問題に対する聖書からの答えを知っていれば、そこを読んで、解決してくださることを信じて一緒に祈ると良いでしょう。

ワーク D

●8月の1ケ月間は、分級でディスカッションタイムを持ちたいと思います。教会学校の礼拝後、大人の礼拝までの短い時間での分級は先生たちも時間的な戦いがあるのではないでしょうか。全部の質問ではなく、いくつかピックアップしてください。

●ディスカッションの時は、先生は司会をしてください。ルールを説明します。①主イエスの名によって集まるところにはイエス様がいてくださいます。②質問に対して、自分が心に示されることは何でも話して良いのです。③聞く人は、他者が語ることを否定しないで、自分の考えと違う時は、語る人がそのように思うことを受け入れます。④この分級で語られる他者の言葉は原則として口外しません。このようなルールがあると安心してディスカッションができるでしょう。

●ディスカッションの最後は必ず招きの質問（☆）をします。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　誰かから命令されたことはありますか。（親、先生、先輩）どうしましたか。（反発した、素直に従った、無視した）

2　あなたにとって命令されることはいやなことですか。

●考えてみよう

1　なぜ百卒長は主イエス様のお言葉（命令）を願っていたのでしょうか。（主イエス様に権威を見いだしていたから）

2　権威とは何ですか。（命令したことは必ず成就すること。だから主イエス様が行かなくても、言葉だけで僕が癒（いや）されることを信じていた）

3　ほんとうに権威のある人の前ではどうしますか。（へりくだって、謙遜（けんそん）になる。心から権威に従う）

●自分に当てはめてみよう

1　主イエス様に権威を見いだしていますか。主イエス様は神、救い主、審判者です。まだの人は主イエス様を信じる決心をしましょう。

2　主イエス様が権威者であれば、命令に従っていますか。主イエス様の命令はいやな命令ですか。けっしてそうではないはずです。信じて従えば、祝福に与（あずか）ることができます。

3　主イエス様のお言葉を信じ、従ってよかった、という経験を話してみましょう。

聖書講解

聖　書　マタイ9・9～13
テーマ　取税人マタイ

（金井）

序論

主イエスは悪霊を追い出し、病をいやし、風や海まで従わせておられた。人々はそれらの奇跡に注目した。しかし、イエスご自身は奇跡そのものではなく、それらが「しるし」として伝えているメッセージを重視された。今日は、主イエスが為された宣教のみわざが持つ意味について学ぼう。

一、罪人を招くイエス

主イエスが宣教の拠点とされたカペナウムは、エジプトとダマスコを結ぶ街道沿いにあり、物産の集散地として栄えた港湾都市である。ここに通関税を徴収する〈収税所〉があった。〈取税人〉はユダヤ人だが、ローマ帝国や領主の下で仕え、異邦人と接触した。彼らは徴税額を偽って上増しし、私腹を肥やした。そのため、彼らは同胞から憎まれ、蔑まれて、会堂から閉め出されていた。

ところが、主イエスは自ら収税所に近づいて行き、そこに座っている取税人〈マタイ〉に、〈わたしに従ってきなさい〉と声をかけられた。マタイはすぐに〈立ちあがって、イエスに従った〉。

マタイは自宅にイエスを招き、宴会を開いた。「すると、見よ」（10節直訳）、〈多くの取税人や罪人たちがきて、イエスや弟子たちと共にその席に着い〉た。〈罪人〉とは犯罪人、売春婦、物ごい、行商人、羊飼い、肉屋、皮なめし職人等、律法を守らない者としてユダヤ社会から疎外されていた人たちである。

二、罪人と食事を共にするイエス

主イエスは彼らを分け隔て無く受け入れ、「罪人の仲間」（11・19）となって〈食事を共にする〉ことを喜ばれた。彼らはどんなに喜んだことか。

このにぎやかな宴会の様子を見て、〈パリサイ人たち〉はイエスの〈弟子たち〉に苦言を呈した。〈なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか〉。〈パリサイ〉という名は、「分離された者」という意味を持つ。彼らは律法の規定を厳格に守り、汚れたものから遠ざかって、身を清めることに熱心であった。彼らは、律法を守らない〈罪人〉と自分たちを分離して、きよさを保つように努めていた。それが神に受け入れられる道であると彼らは信じていたのである。

しかし、主イエスは彼らの誤りをはっきりと指摘された。〈丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである〉。

ここにホセア書6章6節の聖句が引用されている。神がホセアに、淫行の妻を受け入れよと命じられたのは、罪人たちに対するご自身の憐れみの大きさを示すためであった。神のみ旨は、「罪人を招いて悔い改めさせる」（ルカ5・32）ことである。

パリサイ人は会堂の礼拝や律法教育を指導していたが、彼らは聖書が伝える神のみ旨を理解していない。イエスは〈先生〉と呼ばれてはいるが、天来の教師として、律法の本質が愛であることをその言葉と行いによってお示しになったのである。

三、罪人をいやすイエス

イエスは肉体の病もいやされたが、主の本質的な任務は霊的な〈病人〉をいやす〈医者〉である。人は皆、生まれながらに罪の性質を持っている。そのために、人は欲望に支配され、神の戒めに背き、人を傷つけ、人に傷つけられながら生きている。すべての人は、主イエスによる霊のいやしを必要としているのである。〈丈夫な人〉など一人もいない。自分は大丈夫だと思っているパリサイ人こそ、自覚症状を持たない重病人である。

自分の罪を認め、素直に主に救いを求める人は幸いである。〈マタイ〉はイエスの招きにすぐに従った。彼は12使徒の一人として初代教会の宣教を担い、この福音書を執筆した。彼のギリシア語の能力や財務の能力は大いに用いられた。彼のユダヤ名は「レビ」（マルコ2・14）であるが、彼は「神の賜物」を意味する〈マタイ〉を名乗った。それは彼の信仰の証しだろう。一人の罪人が主にあって造り変えられることほどの大きな奇跡はない。

結論

主イエスは今も「わたしに従ってきなさい」と招いておられる。主は私たちを愛してくださり、いやしてくださり、用いてくださる。私たちも主の招きに応え、イエスの弟子となって生きていこう。私たちの周りにも罪に悩む人が多くいる。彼らの友となって、神の愛を伝え、救いに導こう。

研究資料

（足立）

マタイはイエスの弟子となった自らの召命を記すことで、弟子の身分に言及している。マタイ、マルコ、ルカの各福音書は、取税人の召命の出来事を記している（本福音書ではマタイと、他の二つではレビと呼ばれている）。しかも三つの福音書はみな中風患者の癒しの後すぐにこの記事を置いている。三つの福音書は彼が主に召されたとき、税金の取扱所に座っていたことを伝えている。

テキスト

9　イエスは中風の人を癒して後、ご自分の道を進んでいった。そして **収税所にすわっている** マタイに出会った。マルコ、ルカは彼を **レビ** と呼び（マルコ2・14、ルカ5・27）、その名に重要性を与えているが、この著者は自らに注目を与えていない。マタイがいたカペナウムは交通の要所で、彼はここを通過する物品に課税していた一人と考えられる。マタイは前置きの会話には言及していないし、彼が以前にイエスと接触を持ったかどうかに関して、或いは彼がイエスの教えからどのような知識を得ていたかに関しても何も言っていない。マタイは一つの中心的な事柄に集中させている。それはイエスが **わたしに従ってきなさい** という言葉で彼を召し出した事実である。このイエスの言葉は継続して従うことを意味するように思われ、これは疑いなくマタイがイエスの弟子に召されたことを示していると考えられる。するとマタイは **立ち上がって、イエスに従った** 。彼は何も言っていないが、その一つの決定的な行動に集中させている。ルカは **いっさいを捨て**（ルカ5・28）という表現を記すことによりその意味を少し引き出しているが、当然ここでも暗示されている。マタイはイエスに従うために生活様式すべてを捨てた。取税人たちは仕事上利益を得る機会が豊富にあったので、たいていの人は富んでいた。そこでマタイもその事務所を立ち去るとき、おそらくかなりの物質的な損失が起こったであろう。また取税人は後に復帰したいと願っても、決して再帰出来なかったので、その行動は最終的なものであった。漁師は漁に戻れたが、取税人は他の職に就くことも難しい。いずれにせよ後戻りできない決断をマタイが敢えてしたのは、イエスの言葉に絶対的な愛を感じた故で、マタイの応答はイエスへの徹底した信頼を意味する。

10　ルカ5・29によればこの盛大な食事会を催したのはマタイであることがわかる。この大振る舞いはイエスのためであり、マタイがイエスを友人、知人に紹介するためであったと推測される。**家で** とあるが、マルコ2・15やルカ5・29からこの家はマタイのものであることがわかる。彼自身は敢えて自分の家と書かなかったのであろう。その客筋は、本来宗教的な教師がともにいることを望むような人々ではなく、評判の悪い **多くの取税人や罪人たち** であった（今までの同僚を含む）。この組み合わせは社会的な部外者たちを指している。税金取り立て請負人自身は必ずしもきよくないと見なされなかったが、彼らがその実際の仕事をするために雇った人々はきよくないとされた。

11　この出来事はパリサイ人を憤慨させた。パリサイ人は、分離を意味する言葉に名前が由来する宗教的に熱心なグループであった。彼らは律法をとても注意深く研究し、実生活に適用しようと企てた。しかし残念ながら彼らは律法の本質（神を愛し、隣り人を自らと同様に愛すること）を見失い、神の意図するところから決定的にずれていた。この時彼らは食事会に同席していたのではないだろう。家は開かれていて、自由に彼らが入れたのであろう。興味深いことに彼らはイエスにではなく、**弟子たち** に不満を言った。イエスがその招きに躊躇なく応じていたからである。

12　イエスの答えは明快であった。医療の助けを必要とするのは、 **丈夫な人** ではなく **病人** である。霊的な事柄へのこの適用は難なく理解できる。丈夫な人とはパリサイ人への非難であり、病人とは取税人や罪人たちのことである。

13　**学んできなさい** とは、真に理解するための取り組みを要求している。これは神の民に愛と誠実を示すよう預言者が要求している個所である。**わたしがきたのは** とは、イエスがこの地上に来る前に自分が存在したことを示し、ご自分の派遣の本質を要約している（参照5・17）。彼の受肉の使命は、**罪人を招くため** である（参照ルカ5・32）。自分の正しさに自己満足しているパリサイ人を招くことにはない。更にイエスが来たのは、罪人の代わりに死ぬためであったことがわかる（20・28）。

参考図書　内田和彦『マタイの福音書』『実用聖書註解』いのちのことば社、Morris,L.,The Gospel According To Matthew(Eerdmans).

礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ9・9～13
タイトル　心を治すお医者さん
暗唱聖句　わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。　マタイ9・13
目　標　取税人マタイをも呼び出された主のみわざに学ぶ。

導入

（山田）

皆さんはお誕生日会をしたことがありますか？お友だちを呼んだり、呼ばれたりしたことがあるでしょうか。お友だちの誕生日会に招待されるのはとてもうれしいことです。一生懸命プレゼントを用意して、お友だちに喜んでもらえたら、本当にうれしいですね。でも、もしお友だちの誕生日会にクラスのみんなが呼ばれたのに、自分だけ呼ばれなかったら、どんな気持ちがするでしょう。誰にも招待されなくて、仲間はずれにされたとしたらとっても悲しいですね。

今日は先週に続いて、カペナウムという町であった、仲間はずれにされていたマタイさんのお話です。

イエス様に出会ったマタイさん

イエス様の時代、ユダヤの国はローマ帝国という、とても大きな国に支配されていました。ユダヤの国の人は、ローマの国に税金を納めなければいけません。その税金を集める仕事をしていたのが取税人です。ユダヤの国の人にとって、ローマの国は敵です。その敵の国のために働く取税人は、みんなから嫌われていました。取税人はうそをついてごまかし、みんなから余分に税金を集めては、お金儲けをしていました。

取税人は同じ国のユダヤ人から憎まれ、ばかにされ、仲間はずれにされていました。マタイさんはこの取税人の仕事をしていたのです。

あるとき、イエス様は取税所にすわっているマタイさんの所にやって来ました。みんなから嫌われ、仲間はずれにされているマタイさんの所にイエス様が来てくださったのです。そして、マタイさんを見てイエス様は、「わたしに従ってきなさい」と声をかけられました。マタイさんはすぐに立ち上がってイエス様に従いました。

友だちになってくださるイエス様

それからマタイさんはイエス様を自分の家に招待し、パーティーを開きました。イエス様がマタイさんと一緒に食事をしてくださったのです。

取税人のマタイさんはユダヤ人から嫌われていました。仲間はずれにされていたので、友だちもなくてさびしく思うこともありました。イエス様はみんなから嫌われ、仲間はずれにされていたそんなマタイさんの友だちになってくださったのです。

そのパーティーの席には、マタイさんだけでなく、マタイさんの仲間の取税人がとてもたくさん来ました。また、ユダヤの国の人たちから罪人といわれている人たちも来ました。イエス様は、そんな一人一人の友だちになってくださるお方です。

心を治すお医者さん

イエス様が取税人や罪人と食事をしている様子を見て、パリサイ人はぶつぶつ文句を言いました。それを聞いてイエス様は、罪という病気で苦しんでいる人たちに、その罪の心を治すお医者さんだということを周りにいる人たちに教えられました。

例話

理恵ちゃんは三人兄妹です。お兄ちゃんと妹がいて、二番目が理恵ちゃんです。「お父さんやお母さんは一番目に生まれたお兄ちゃんのことをとてもかわいがっているし、小さい妹はとても大切にしている、けど私だけがかわいがられていない」。

小さい頃から理恵ちゃんは、いつもそんなふうに思っていました。いつも心がさびしくて、いっぱい意地悪もするし、反抗していました。

小学校二年生のとき、理恵ちゃんは初めてイエス様のお話を聞きました。四年生のとき、イエス様はさびしい心、意地悪な心、反抗する心も治してくださるお医者さんだと分かりました。そして、イエス様に今までの罪の心をおわびしました。このときから理恵ちゃんは変わりました。イエス様が自分のことをとても大切に愛してくださることが本当によく分かったからです。

イエス様は私たち一人一人の罪の心を治してくださるお方です。

♪両手いっぱいの愛♪　（プレイズワールド13）

ワーク解説

ワーク Ⓐ

●話し方のヒント

一人ぼっちは寂しいけれど、お友だちがいてくれるなら楽しいですね。マタイさんは、人をだましてお金を集める罪深いことをしていたので、だれも友だちがいませんでした。しかし、イエス様はマタイさんに優しく声をかけ、一緒に食事をし、友だちになってくれました。マタイさんは大喜び！それだけでなく、罪の心もきれいにしてくださったのです。イエス様は、どんな罪人の心も清い心に変えてくださる心のお医者さんなのです。

●ワークについて

「つみびと」はどんな人のことか話してみましょう。

ワーク Ⓑ

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　福音理解において大切な所です。イエス様は無条件に罪人を招かれたということを教えましょう。パリサイ人の誤りからも学び、同じ誤りに陥らないようにしましょう。

●質問3　自分が罪人であることを理解しなければ、この福音を「福音」として理解することはできません。聖霊によって一人一人が罪について悟ることができるように、そして一人一人もこのイエス様に招かれていることを悟り、信じて従うことができるよう祈りつつ導きましょう。

ワーク Ⓒ

●【義人】【招く】【罪人】【招く】

●第2問　すべての人は罪人ですからハートは黒、イエス様だけは罪のない白いハートです。しかし、自覚はそれぞれに違います。罪を自覚している者と、自分は正しくきよいと思っている人の2種類がいます。招かれている「罪人」とイエス様を線でつなぎます。

●第3問　自分を「罪人」と自覚している人だけがイエス様とつながりました。そこで、「あなたはどうですか」と尋ね、第2問の中の「あなた」にハートの色と、自分をどのように自覚しているかを「顔」の部分に書き込みます。

●罪人である自分を招き、罪を赦し、救ってくださるイエス様に感謝をささげます。

ワーク Ⓓ

●質問は時間配分によってピックアップしてください。ディスカッションのルールは8/7の解説参照。

●9．と☆の質問に対して、「ノー」の意志を表す子どもがいるかも知れません。その時は、「イエス様がいなくても他に頼れる心強い人がいるのですか」或いは「何かイエス様を信じるために妨げになることがありますか」などの質問を通して、その子どもの気持ちを聞いてあげてください。次週も福音書のイエス様に出会う機会があるので、次週につなげられるようにします。

中高科へのヒント

●話し合ってみましょう。

1　誰かから〝無視〟されたことはありますか。（無視されることは悲しく辛いことです）

2　思いがけなく〝招待〟されたことはありますか。どんな気持ちでしたか。（最高にうれしい）

●考えてみよう

1　マタイは自分が主イエス様に招待されました。自分のことを福音書に書いたということはどんなにうれしかったでしょうか。

2　マタイは招待される資格があったのでしょうか。周囲の者はマタイのことをどう思ったでしょうか。（その場にふさわしくない人、罪人、イスラエル民族の裏切り者）

●自分に当てはめてみよう

1　招待される資格がないマタイは、主イエス様の「わたしに従ってきなさい」という言葉に従いました。あなたはどうしますか。

（従う、迷う、周囲の目が気になるから止める）

2　パリサイ人はどうしてこのような態度をとるのでしょうか。あなたはどうですか。（自分の罪がわかっていない）

3　「義人を招くためではなく、罪人を招くためである」とは、どんな意味ですか。あなたはどちらですか。（自分が罪人であると認めるならば、主イエス様の招待を心から感謝し受け取ることができます。罪人であると認めないならば、パリサイ人と同じように人を見下します）

聖書 マタイ9・27〜31
テーマ ふたりの目の見えない人

（金井）

序論

マタイは8〜9章において主イエスがなされた10の奇跡をまとめて記録している。主は病をいやし、悪霊を追い出し、嵐を静められた。これらはイエスが天と地、肉と霊、万物の主であることを証しする。私たちも主の偉大な力を知りたい。

一、盲人たちはイエスに求めた

イエスは会堂司の娘を生き返らせてから、彼の家を出て、そこを立ち去ろうとされた。その時、〈ふたりの盲人が、「ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と叫びながら、イエスについてきた。そしてイエスが家にはいられると、盲人たちがみもとにきた〉。

この福音書には〈盲人〉の話がよく出てくる（12・22、15・30、20・30、21・14）。この地方では気候風土や環境衛生の問題のために炎症性眼病が多い。しかし、ユダヤ人は、病や障がいは神からの懲罰であると考えていた（申命記28・15〜35、ヨハネ9・2、34）。病者や身体障がい者は律法では「穢れ」（宗教的な不浄を指す。岩波版参照）を負うものとされ、宗教的営みから排除されていたのである（レビ21・16〜24、サムエル下5・8）。

盲人たちはイエスを〈ダビデの子〉と呼んで、救いを求めた。〈ダビデ〉はイスラエル第二代の王であり、王国を確立した民族の英雄である（前1000〜961年在位）。〈ダビデの子〉とは、ダビデの家系から出るメシア（主に油注がれた救世主）を意味する（イザヤ9・6〜7、11・1〜5、エレミヤ23・5、エゼキエル34・23〜24）。メシアが来る時、彼は盲人の目を開き、病者や障がい者をいやすと、ユダヤ人は信じていた（イザヤ35・5〜6）。イエスのいやしのわざは、すでにこの地方では有名であった（9・26）。盲人たちはそのうわさを耳にした。そして、「この方こそ……」とイエスに望みを託した。それゆえ、彼らは大声でイエスに叫び、すがりついてきたのである。

二、盲人たちはイエスを信じた

まさにイエスはダビデの家系に生誕されたメシヤである（1・1、2・2）。彼がなすわざがこれを証明している（11・5、ヨハネ9・32〜33）。

〈イエスが家にはいられると、盲人たちがみもとにきたので、彼らに「わたしにそれができると信じるか」と言われた。彼らは言った、「主よ、信じます」〉。盲人たちはユダヤ教会から蔑視されていたが、イエスは彼らの〈信仰〉をお認めになった。〈あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように〉。なんと慰めに満ち、励ましに満ちたお言葉か！ 信仰そのものに力があるのではないが、信仰を通して私たちは主から祝福を受け取ることができる。

三、盲人たちの目は開かれた

パリサイ人を筆頭に、律法主義を実践するユダヤ人は、穢れた人に触れないようにして、きよさを保っていた。しかし、〈イエスは彼らの目にさわって〉いやされた。イエスは病者や障がい者を差別し、隔離する不浄のタブーを打ち破られたのである。今や律法をお与えになった主ご自身が、律法の縄目から人類を解放してくださる！

盲人たちは主によって霊も心も体もいやされて、社会復帰することができた。キリストが与えてくださる救いは、全人的ないやしである。聖書は、彼岸＝死後だけでなく此岸＝現世における霊と心と体の祝福を教えている。キリストの偉大な力に私たちの霊眼が開かれ、豊かな恵みを受けたい。

ただし、人は目に見える現象に心を奪われて、事の本質を見失いやすいので注意が必要である。イエスは開眼した人たちに厳しく戒告された。〈だれにも知れないように気をつけなさい〉。それは人々がご自身を呪術師や霊能者と誤解する恐れがあったからである。〈しかし、彼らは出て行って、その地方全体にイエスのことを言いひろめた〉。肉体のいやしは一時的な祝福である。人は皆必ず死ぬ。霊的な救い、すなわち罪の赦しと永遠の命を人々に与えることこそ、宣教の本質である。

結論

主イエスは今も問うておられる。〈わたしにそれができると信じるか〉。私たちはなんとお答えしようか？ 越え難い問題の渦中にあって、私たちも信仰を告白したい。〈主よ、信じます〉。主イエスは今も、強く優しき御手を伸ばして、私たちに触れ、いやし、救ってくださる。主を求めて、命を得よ！「すべて彼を信じる者は、失望に終ることがない」（ロマ10・11）。

研究資料

（足立）

旧約聖書に盲人の目が癒される奇跡は出てこないし、タルソのサウロの視力回復（使徒9・17〜18）は別として、福音書後の新約においても記されていない。しかしイエスの伝道では目が見えるようになる奇跡が複数回記録されている。視力が与えられることは神の聖なる行為であり（出エジプト4・11、詩篇146・8）、救い主到来の意味を持っていた（イザヤ29・18、35・5、42・7）。マタイは20・29〜34でこの奇跡と類似した出来事を記している。両方とも「ダビデの子よ、私たちをあわれんで下さい」と盲人たちが叫び、両方ともイエスは彼らの目に触り、そして両方とも彼らの目が開かれた。しかし9章はガリラヤに位置し、一方20章の場合はエリコの近くで起こっている。また9章では男たちがイエスについてきているが、20章では道ばたに座っている。そして9章では二人の盲人がイエスについて家の中に入ったが、20章では、群衆が盲人たちにイエスが通り過ぎることを伝え、その時彼らが叫ぶことを非難したが、イエスは盲人の男たちを自分のところに招いた。20章ではイエスは「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねられたが、ここ9章では信仰に関して尋ねている。そして20章では癒された男たちがイエスについて行くことで終わっているが、ここ9章では男たちはこの奇跡をその地方全体に言い広めてしまう。以上のことから見てこの二つの奇跡は、まったく別の出来事と理解できる。

テキスト

27 **そこから**（そこを）とは、マタイがよく使う表現（4・21、5・26、9・9、11・1、12・9、15・13・53、14・13、15・21、29、19・15）。マタイはしばしばイエスに従う人々に言及しているが、その場合弟子になると言う含みを持たせていることが多い。しかしここで二人の盲人は視力がほしいという理由でイエスに付いて来たのであろう。**わたしたちをあわれんで下さい** とは、ここに彼らの最大の関心があることを意味している。**ダビデの子よ** とはメシア用語（参照1・1）であるが、呼びかけとしてはこの個所が本福音書での最初の使用。この男たちはこの用語が意味することを十分理解していなかったかも知れないが、彼らはイエスを偉大なお方と見て、ふさわしい表現として使った。

28 イエスは家の中に入って初めてその盲人たちに関わられた。これはメシア待望の高まりを鈍らせるためであったかも知れない。或いは、二人の盲人の信仰を導くための計画であったかも知れない。イエスは彼らに自分たちが願うことを尋ねていない。それは明白であった。その代わりイエスは彼らが信仰を持っているかどうかを問うている。文脈から見ても本福音書において9章の三つの出来事（9・18〜26、27〜31、32〜34）は、信仰を教える癒しの奇跡と捉えることが可能。**主よ、信じます** とは、字義的には〝はい、主よ〟となる。彼らの態度は決定的であった。彼らは盲人である故、イエスがなさった数々の奇跡を目にすることができなかった。彼らは人々が語ることに全面的に依存してきた。しかし彼らは決定的かつ積極的な信仰に導かれた。

29 もう一度イエスは触って癒された。マタイは霊的な概念として目を用いることもある（例13・15）が、もちろんここでは肉体的器官を意味している。イエスは信仰の重要性を強調する言葉を語りながら、彼らの目に触って癒しを遂行された。**あなたがたの信仰どおり** とは、あなたがたが持った信仰に従って、と言う理解が妥当であろう。

30 奇跡は極めて単純に起こった。**開かれた** という動詞は、話すために口を開く場合（5・2）、魚の口を開く場合（17・27）、そして再度盲人の目が開く場合（20・33）に使われている。イエスは二人の男たちに、自分たちに成された奇跡に関して沈黙を守るよう厳しく言われた（参照8・4）。何故イエスがこの時点で沈黙を切望されたかについて、マタイは何も説明していない。**だれにも知れないように気をつけなさい** とは、字義的には〝気をつけなさい。だれにも知られないように〟となる。この命令は圧縮されているが、その意味するところはまったく明白である。熱狂的な期待が高まることをイエスは恐れたのであろう。

31 イエスの禁止命令はとても厳しかったにもかかわらず、男たちのうちに起こった喜びがあまりにも大きかったので、彼らは黙っていることができなかったように思われる。

参考図書 内田和彦「マタイの福音書」『実用聖書註解』いのちのことば社、Carson,D.A.,〝Matthew〟The Expositor's Bible Commentary, Vol.8(Zondervan).Morris,L.,The Gospel According To Matthew (Eerdmans).

礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ9・27〜31
タイトル　イエス様、助けて！
暗唱聖句　あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように。マタイ9・29
目　標　見えない目さえも開かれる主のみわざに学ぶ。

（山田）

導入

私たちの教会に目の見えない（視覚障がい）人がいます。盲導犬のルーシーといつも一緒に教会にきます。この人は生まれつき目が見えないのではなく、途中から目が見えなくなりました。時々、この人からいろいろなお話を聞きます。生まれつきの視覚障がいの人は、景色を見たことがないので、色というものがどういうものか分からないそうです。また、「七色の」虹と言われても、「どんな形？」と聞くそうです。

さて、今日はそんな目の見えない人がイエス様に出会ったお話です。

イエス様、助けて！

イエス様が道を歩いていると、大きな叫び声が聞こえます。見ると、ふたりの目の見えない人が、「ダビデの子よ、わたしたちをあわれんでください」。と、大きな声で叫びながらついてきました。この人たちはどこかでイエス様がなさっている、奇跡の評判を聞いていたのでしょう。イエス様ならきっと、この私たちの目も治してくださると思っていたので、「あわれんでください」と何度も叫んでついてきました。

このふたりの盲人は、今まで目が見えないことで、ずいぶん悲しい思いをしていたり、意地悪されたり、ばかにされたりしたことがあったのかもしれません。だから、一生懸命に「イエス様、助けて！」と叫びました。

イエス様にごまかしのない正直な、素直な心で自分のありのままを伝えました。

イエス様、信じます！

イエス様が家に入られると、盲人たちはイエス様の近くに来ました。イエス様はその盲人たちに向かって、「私にそれができると信じるか」と聞かれました。「イエス様、助けて！」と叫ぶ声を聞いていたイエス様は、盲人たちが何を一番してほしいのかよく分かっていました。それは、見えない目が見えるようになることでした。だから「わたしを、目が見えるようにすることのできる神と信じるか」と聞かれたのでした。

すぐに盲人たちは「主よ、信じます！」と答えました。イエス様は何でもできる神様だと、信じる心のあらわれです。

イエス様、ありがとう！

イエス様は、いつでも人の心を見ています。盲人たちの心を見ています。そして、イエス様は心から「信じます」と言った盲人たちの目にさわって、「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」と言われました。すると、盲人たちの目は見えるようになりました。イエス様は目を見えるようにしてくださると、盲人たちが信じたとおりになりました。

例話

Sちゃんはお母さんのお腹の中にいるときから教会に来ています。小学生のとき風邪をひき、夜中に耳が痛くてたまらなくなりました。看病しているお母さんは疲れて眠っています。「お母さん、痛い」と言って起こすのも悪いと思いました。Sちゃんは、「イエス様、助けて！」と心からお祈りしました。すると、辛（つら）い痛みをいつのまにか忘れ、眠ることができました。

まとめ

私たちは困ったことや悲しいこと、悩んでいることがあるとき、どうしたらいいでしょう。お家の人にも、友だちにも誰（だれ）にも言えなくて、独りぼっちだと思っていますか。「それとも神様にお祈りしても聞いてもらえない」と、あきらめてしまっているでしょうか。

そういう時は、今日学んだ盲人たちのように、「イエス様、助けて！」と、そのままをごまかしのない正直な心で、イエス様にお祈りしてみましょう。私たちの「イエス様、助けて！」というお祈りを、神様は聞いてくださっています。そして、神様は必ず答えてくださることを信じることが大切です。神様は私たちが信じたとおりにしてくださる方だからです。

♪よろこびひろげよう♪（プレイズワールド26）

ワーク解説

ワーク Ⓐ

●話し方のヒント

皆さんは、自分ではどうすることもできないことを、だれにお願いしますか？　2人の目の見えない人は、見えない苦しみの中で、イエス様に「助けて」と叫んでついて行きました。イエス様が「あなたの信じたとおりになるように」と言って、2人の目に触ると、信じたとおりに見えるようになりました。私たちも、どんな事もイエス様が良いようにしてくださると信じて、イエス様に「助けて」と叫びましょう。

●ワークについて

「主よ信じます」と叫んでカードを開き、目を開けたり閉じたりして遊びましょう。

ワーク Ⓑ

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　イエス様の力は信仰のある所にあらわされます。二人の盲人は信じたゆえに、いやされました。神は私たちの信仰を喜んでくださる（ヘブル11・6）ことを教えましょう。

●質問3　疑い、恐れの中にあるとき、そのような感情や、目に見える状況に流されてしまわないように「主よ、信じます」と信仰を告白することの大切さと、主を信じる者は失望に終わることがないことを教えましょう。実例を話してあげるとよいでしょう。

ワーク Ⓒ

●【信仰】

●第2問　3種類の人がいます。3人とも自分の願いは「この目を治してください」です。しかし、心の中は①「イエス様には無理」、②「イエス様なら治せる」、③「イエス様が医学部を出て医者になったらできるかもしれない」の三様です。癒（いや）された人は②の信仰を持っていた人です。

●第3問　第2問からの流れの中で、今度は「あなた」について尋ねます。（1）あなたの治してほしいところはどこか、（2）あなたならイエス様にどう答えるか、を書きます。

●信仰をもって素直に願い求める祈りをします。

ワーク Ⓓ

●質問は時間配分によってピックアップしてください。ディスカッションのルールは8／7の解説参照。

●1．①は大きな声を出せる勇気のある人…など想像をふくらませながら、考え得ることを話し合います。以下の質問も同じです。

●3．①や6③など、登場人物、特にイエス様のお心を考える質問は大切です。私たちは自分の気持ちが優先し、イエス様のお心には無頓着であることが多いかも知れません。イエス様のお心を考える時間を持ちたいものです。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　「あわれんで下さい」はどんな意味と思いますか。（国語辞典・あわれに思う心。気の毒に思う心。同情。「〜を感じる」）

2　「あわれんで下さい」と言ったことはありますか。（何かカッコ悪い、みじめな言葉のように感じる）

●考えてみよう

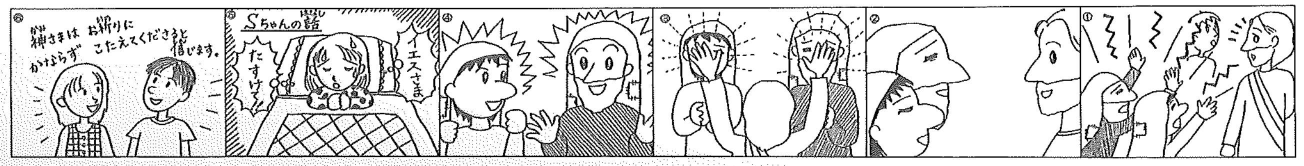
1　ふたりの盲人が「…あわれんで下さい」と主イエス様についてきました。自分の格好や人の目を気にしないで、それも叫んでついて行きました。このように〝なりふりかまわず〟主イエス様に飛び込んで行ったことはありますか。

2　盲人たちがこれほどまでに主イエス様について行ったのはなぜですか。（主イエス様は目を開けることができるお方だと信じていたから）

●自分に当てはめてみよう。

1　「わたしにそれができると信じるか」と言われた時に、「信じます」とはっきりと答えています。あなたも同じように言ってみませんか。

2　「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」とあります。自分の信仰を自分で〝小さく〟感じて、萎縮（いしゅく）してしまうことがありませんか。（けっしてそうではありません。大胆に「信じます」と、主イエス様に告白しましょう）



28日 聖書講解

聖　書　ルカ7・11～17
テーマ　ナインのやもめ

序論

（金井）

前回触れたように、主イエスは人々がご自身について誤解することを危惧しておられた。当時、ユダヤ社会には霊能者として、また、ローマ帝国に反抗する解放者としてメシヤを自称する者たちが出現していた（ヨセフス『ユダヤ戦記』2・57～65、258～263）。イエスは彼らと同一視される恐れがあったのである。イエスは彼らとは絶対的に次元の異なる天来のメシヤである。イエスのメシヤ性を証明するみわざについて、今日は学ぼう。

一、深い同情

イエスの故郷ナザレから南東9kmほどのところにモレという山がある（標高518m）。この山の麓に＜ナインという町＞があった。カペナウムからは約40kmの距離である。イエスがこの町を訪れた時、町の門で葬列に出会った。＜あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだ＞という。

古代ユダヤでは町を挙げて葬儀を行った。埋葬は死んだその日に行われる。遺体は水で洗われ、特別な布にくるまれて棺に収められ、担架に乗せて運ばれた。葬列の先頭には喪主（この場合、母親）が立ち、親族と町民たちが後に続く。墓場は町の門外、町の東にあった。

古代社会において女性は大変弱い立場にあった。夫に先立たれ、一人息子に死なれてしまったこの＜やもめ＞には、もはや、経済的にも、精神的にも、頼りになるものが何も無い。それなのに、この葬式だけでも多額の費用がかかる。その負担は彼女にのしかかるのである。

主イエスは＜この婦人を見て深い同情を寄せられ＞た。「断腸の想いを覚え」という訳もあるが（岩波版）、ここに使われている原語は「内臓まで動かされる」ような強い感情を意味する。主イエスは、私たちの置かれている状況を理解し、私たちと思いを共有してくださるお方である。

二、伸ばされた御手

この葬列では＜大ぜいの町の人たちが、その母につきそっていた＞。専門の泣き女が雇われ、大声で泣きわめいて人々の涙を誘う。けれど、どれだけの人が、この婦人の悲しみを共有していたことか。母親の深い絶望の涙は止まることがない。

ところが、主イエスは＜泣かないでいなさい＞と彼女に言われた。そして、主は＜近寄って棺に手をかけられ＞た。

死者の棺に触れることは、律法で穢れる行為とされている（民数記19・11～19）。しかし、そんなことは問題ではない。イエスの内に燃える激しい愛が、彼を棺に近づけ、手を触れさせたのだ。愛は時に常識を超えた行動を生み出すものである。

主の御手は私たちに伸べられている。主が触れてくださる。私たちはもう泣かなくてよいのだ。

三、いのちのみ言葉

イエスは死人に命じられた、＜「若者よ、さあ、起きなさい」。すると、死人が起き上がって物を言い出した＞。主イエスが言われた「起きなさい」という語は新約聖書の復活用語であり、他の個所では「よみがえる」とも訳されている（ルカ24・6、34）。イエスはご自身の復活の先取りとして、この若者をよみがえらせなさったのである。もちろん、この若者の体はやがてまた死ぬべきものであり、ここで現された力は限定的なものではあるのだが。

＜イエスは彼をその母にお渡しになった＞。母親の驚き、喜び、そして安堵。その姿が目に浮かぶようである。この一文にも、この母子に対する主イエスの温かい愛を感じる。

＜人々はみな恐れをいだき、「大預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神をほめたたえた＞。メシヤを自称する者はこれまでにもいたが、死人を生き返らせた者はいない。死を打ち破る復活の力。これこそイエスが神から遣わされたメシヤであることの確かなしるしである。

結論

復活は唯一無比の恵みである。キリストによる救いは悪霊払いや病のいやし、政治的革命といった地上的・一時的レベルにとどまる救済ではない。キリストは天的な永遠の救いを私たちに与えてくださる。主イエスは今も、悲しみに沈み、弱さに悩む者の良き理解者である。主は御手を伸ばし、み言葉によって私たちを生かし、立ち上がらせてくださる。主イエスの復活の力は今も信じる者に現される（ロマ8・11）。永遠の慰めを受けよう。

研究資料

（石田）

山上の説教に対応するいわゆる＜平地の説教＞（6・17）のあと、主のなさった最初の奇跡は、ある百卒長のしもべの癒しである。この奇跡に続く出来事が、ナインのやもめの息子のよみがえりである。これに相当なインパクトのあったことは、このニュースがユダヤ全国をはじめ近隣諸国を席巻したことからも伺える。これは主イエスが神の国を言葉で語られただけでなく、行為（奇跡）によって見せられたことのよい実例である。

テキスト

11　そののち、間もなく　直前のカペナウムからナインまでは歩いて一日路である（約40km）。「その翌日」と記す写本も多いという（詳訳聖書）。**弟子たちや大ぜいの群衆**　イエスに付き従う者たちは、主の弟子だけでなく、百卒長のしもべの癒しに感動してついて来たと思われる群衆もいた。同じ群衆でも、彼らが出会った群衆は、死の悲しみに沈む葬列であった。これは生と死、明と暗、喜びと悲しみのコントラスト鮮やかな絵である。

12　ちょうど　この劇的な出会いは、偶然ではなく、神の定められたものであろう。**あるやもめにとってひとり息子であった者が死んだ**　この女性は、夫を亡くして一家の大黒柱を失っただけでなく、杖とも頼むひとり息子にさえ先立たれた。この世で最も悲惨な境遇の一つ。医者であるルカは、3人の人を生き返らせた記事を記しているが、みな一人っ子である。やもめにとっての「ひとりむすこ」、ヤイロの「ひとり娘」（8・42）、悪霊につかれた「ひとり息子」（9・38）という具合に。

13　深い同情を寄せられ（スプランクニゾマイ）　はらわたまで突き動かされるほどの同情を表す言葉。内臓は情愛や憐れみの座と考えられていた。この語のルカでの用例は、「（サマリヤ人は）気の毒に思い」（10・33）、「（放蕩息子の父は）哀れに思って」（15・20）がある。ここに主の奇跡を行われる動機の一つが、心の底からの同情であったことがわかる。しかしイエスは同情する以外に打つ手がなかったのではない。**泣かないでいなさい**　主は、泣くなと命じる以上は、泣かないでよい状況を造り出される方である。

14　若者よ、さあ、起きなさい　主は、死んでいる若者の耳に聞こえるように命じておられる。これはラザロにも、ヤイロの娘の場合にも同じ。起きなさいとは、死人に生き返るように命じる言葉である。仮死状態から息を吹き返したということではない。イエスの言葉には神の権威があり、無から有を生み出し、文字どおり死から命へ移す力がある。**近寄って棺に手をかけられると**　主ご自身がたとえられたよきサマリヤ人をほうふつとさせる行為である。イエスは目の前の人を救うためには、儀式的なけがれを受けることや（民数記19・11）、誤解を招くことを意に介さない。主は言葉だけでなく、父への堅い信仰によって行動された。この棺は箱型のものではなく、ユダヤ人のしきたりによる戸板のようなものであったので、なきがらはむき出しにされていた。

15　死人が起き上がって（アナカシゾウ）　病人が床の上で起き上がることを表す医師の専門用語で、ルカらしい表現である。他には使徒9・40に使われているだけ。直前の「起きなさい」はこれとは別の言葉で（エゲイロウ）、この方が一般的。**物を言い出した**　ほんとうに生き返った証拠である。これは主が永遠の命をもっておられることを示し、主ご自身の復活を予表している。**彼をその母にお渡しになった**　「返された」という翻訳も多い。

16　大預言者がわたしたちの間に現れた　人々はいにしえの大預言者エリヤやエリシャが死人をよみがえらせたことを連想したのであろう（列王記上17・20～22、列王記下4・33～35、ちなみにナインは、シュネムに近い）。しかしこの表現はイエスに対する正しい認識とは言えない。ルカはあくまでも「主」と記して、大預言者どころか神の子であることを明言している（13）。バプテスマのヨハネも牢獄の苦しみゆえか、イエスに対する確信が揺らぎ、確かめる必要に迫られた（18、19）。これに対しても主は、しるしと奇跡によって信じるようにと言われた（22、23）。**神はその民を顧みてくださった**（エピスケプトマイ）　これには友達や医者が病人を訪れるという意味もある。人々はこの偉大な奇跡に神の訪れを見た（ルカ1・68、78、使徒15・14、ヘブル2・6）。

17　ユダヤ全土およびその附近のいたる所に広まった　ユダヤ全国はもとより、隣接するシリヤ、フェニキアを含んでおり、宣教の初期からイエスの出来事は異邦人にまで知られていたことがわかる。ここに、みずから異邦人（ギリシャ人）であったルカの、異邦人に対する重荷を見ることができよう。

礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ7・11〜17
タイトル　愛にあふれたイエス様
暗唱聖句　主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。　ルカ7・13
目　標　主のみわざは主の深いあわれみから出たことを知る。

（山田）

導入

皆さんは自分がかわいがっていた動物や生き物が死んでしまったという経験がありますか。

かわいがっていればいるほど、それはとても悲しいことですね。また、やさしい家族が亡くなってしまった人がいるでしょうか。亡くなってしまった人とはもう話はできません。とても辛く、悲しいことです。

今日の聖書にも、一人しかいない大切な子ども、ひとり息子が死んでしまったお母さんのことが書かれています。ひとり息子が死んでしまい、お母さんは本当に悲しく思っていました。

主の心

夫のいない女の人（やもめ）として暮らしていたお母さんです。お母さんの家族はひとり息子だけです。そのひとり息子が死んでしまって、お母さんは独りぼっちになってしまいました。

やもめであるお母さんはナインという町に住んでいます。その町にイエス様と弟子たちが、たくさんの人たちと一緒にやって来ました。ひとり息子のお葬式をしているちょうどそのところに、イエス様たちが来られたのです。

独りぼっちになってしまったお母さんには、もう頼りになる人はいません。悲しくて泣いています。そのお母さんを見たイエス様には、お母さんの悲しみや寂しい心がとてもよく分かりました。イエス様はこのお母さんを本当にかわいそうに思いました。

イエス様の心は、このお母さんと一緒に悲しむ心です。イエス様は悲しむ人と同じ心になってくださる方なのです

主のみわざ

また、このお葬式にはたくさんの人たちが出席していました。みんな泣いています。でも、お母さんの心をよく分かって、同じように悲しんでいる人がどれだけいたでしょう。

お母さんの涙は止まりません。イエス様はやさしく「泣かないでいなさい」と声をかけられました。そして近寄って、死んだ人の入れられている棺に手をかけられました。

イエス様の時代、棺に触る人は誰もいませんでした。ユダヤの律法では、そんなことをすれば、自分が汚れると教えていたからです。

お母さんの心をとてもよく分かっているイエス様には、お母さんへのあふれる愛がありました。そしてイエス様の愛は、ひとり息子が生き返る奇跡のわざとなってあらわされたのです。

私たちがとても悲しくて辛いとき、イエス様は私たちの一番近くにいてくださいます。そして「泣かないでいなさい」と言ってくださるのです。

主のことば

「若者よ、さあ、起きなさい」。イエス様がこう言われました。すると、死んだ人が起き上がってしゃべり始めました。

イエス様はひとり息子であるその人を、泣き悲しんでいるお母さんに渡しました。死んでしまって、話すことのできなかった大切なひとり息子と、お母さんはもう一度話しができるようになったのです。もう独りぼっちでなくなったのです。イエス様は言葉によってこの奇跡をされました。

天地宇宙を造られた神様は、いつも言葉によって神様のわざをされます。今も神様は、聖書の言葉を通して私たちに神様のわざをされます。

私たち一人一人を、心から愛してくださっている神様です。ですから私たちに一番いいことを、いつもしてくださるのです。

まとめ

8月はイエス様がされた主の愛のみわざについて学んできました。百卒長の家来の病気を治し、罪人の取税人マタイを呼んでくださったイエス様。また、二人の盲人の目を開き、やもめのひとり息子を生き返らせてくださった主のみわざです。

このイエス様が私たちといつも一緒にいてくださるのです。

♪愛・あい・アイ♪　（プレイズワールド66）

ワーク解説

ワーク A

●話し方のヒント

皆さんがとっても悲しい時は、だれが慰めてくれますか？ 両親ですか？ きょうだいですか？ 友だちですか？ 色んな人が慰めてくれますが、どんなに皆さんが悲しいか、同じように分かってくれて、いつでもどこでも慰めてくれる人はだれもいません。けれども、人の心の思いを同じように分かってくださるイエス様は、いつでもどこでも、皆さんを優しく慰めてくださり、皆さんに一番良いことをしてくださるのです。

●ワークについて

イエス様の手を貼り、イエス様はどのように慰めてくださるか話し合いましょう。

ワーク B

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いてみましょう。

●質問2　やもめの一人息子の死。それは、夫に先立たれ、子も失い、孤独になってしまうという悲劇です。人生は様々な悲劇に満ちています。イエス様は絶望に打ちひしがれた人間を慰め、救うことのできる唯一のお方です。

●質問3　イエス様は、私たちの全ての悲しみ、苦しみを知っておられ、深い同情をもって、救ってくださいます。人間の最大の敵である死にさえも打ち勝たれたイエス様だからこそ、それができます。悲しみに打ちひしがれている人々に、このイエス様を伝えましょう。

ワーク C

●【深い同情】【泣かないでいなさい】

●第2問　やもめのさびしさ、悲しさを想像して話し合ってみましょう。（1）深い同情の意味は②です。（2）「泣かないでいなさい」という言葉の真意は、②の現実の復活ということです。

●第3問　今度は各自、自分が一番つらかったことを思い浮かべ、「絵」か「言葉」で書きます。もしかすると、つらすぎて思い出したくない子もいるかもしれませんが、一応そのように導きます。その場面・状況を思いながら、ロールプレイをしてみてはどうでしょうか。①生徒の一人が目をつぶって自分のつらかったことを思い出します。②先生か他の生徒が、肩に手を置いて「泣かないでいなさい」と思いを込めて語りかけます。イエス様はそうしてくださるんだ、という実感が少しでもてたら感謝ですね。

ワーク D

●質問は時間配分によってピックアップしてください。ディスカッションのルールは8／7の解説参照。

●8．はイエス様の十字架と復活です。

●先週に続き、今日もイエス様のお心を考えましょう。子どもたちの話を聞き、受け入れながら、大切なところは、そのつど最後に話して伝えます。

●質問の数を少なくしても、最後は招きの質問（☆）をします。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　形だけや偽りの同情はいやですが、本当の同情は人にとって必要と思いませんか。あなたはどんな時、同情を必要としますか。

●考えてみよう

1　母親にとって大切なひとり息子が死んでしまい、その子の葬式の時です。人が深い悲しみになる時に、その人に声をかけることが難しいとは思いませんか。（深い悲しみを共有できないので、避けてしまうか、何も言わないか、通り一遍の言葉しか出てこないことが多い）

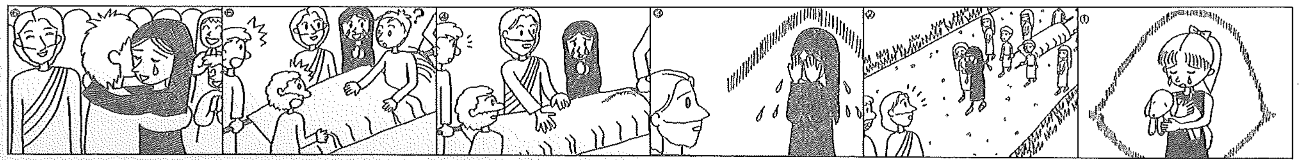
2　主イエス様の「深い同情」とはどんな思いだと思いますか。（人は死に対しては何もできない無力な者であることへの深い同情）

3　主イエス様は「泣かないでいなさい」と声をかけられました。どんな意味ですか。（①死んだ人は帰ってこないから、つらくてもがまんしなさい　②死からよみがえることができるから、希望を持ちなさい）

●自分に当てはめてみよう

1　主イエス様はどんな深い悲しみの中にある人に対しても深く同情することができるお方です。ヘブル4・15を持っておられるお方です。

2　主イエス様は「泣かないでいなさい」「若者よ、さあ起きなさい」と言われ、死から命へとよみがえらせてくださるお方です。どんな時にも希望を失ってはなりません。



9月

4日 聖書講解

聖　書　マタイ10・1～15
テーマ　弟子をつかわす

（金井）

序論

主イエスがメシヤであることは、主がなされたみわざによって証しされている。そのことを先月は学んだ。今月はイエスが「救い主」であるということを伝える福音宣教について学ぼう。

一、主イエスによる選び

主イエスは初め独りで宣教を開始されたが、間もなく主は弟子たちを育て、その中から指導者となるべき者を12人選ばれた。これが〈十二弟子〉である。12という数はイスラエルの部族数に対応している（19・28）。彼らは、イスラエルに代わって新しい神の民となるキリスト教会を代表する。

〈ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ、それからゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ〉、この4人は無学な漁師である（使徒4・13）。〈ピリポとバルトロマイ〉は旧約聖書に精通しており、メシヤを待望する人たちであった（ヨハネ1・45～49。バルトロマイの別名はナタナエル）。〈トマス〉は疑い深い慎重な人である（ヨハネ20・25）。〈取税人マタイ〉はローマ帝国と領主に仕え、同胞から嫌われる者であった。〈アルパヨの子ヤコブとタダイ〉は目立たない人たちである。〈熱心党のシモン〉はローマ帝国に対して独立闘争をしていた国粋主義者である。最後に〈イスカリオテのユダ〉。このユダはイエスを裏切った者である〉。

この12人は多様な個性の持ち主である。能力も性格も政治信条も金銭感覚も全く違う。主イエスはあえてこのようなバラバラな者たちを選ばれた。教会には様々な背景と立場を持った人々がいる。主がその一人一人を選び、〈呼び寄せて〉下さったのである。不要な者は一人もいない。主は一人一人にふさわしい働きを与えて、用いて下さる。

二、主イエスによる任命

弟子は師に倣う者である。彼らはまず主イエスのそば近くにあって、主の宣教活動をよく見て学ばなければならなかった。そうすることによって、彼らは主イエスと同質の宣教を継続し、拡大していくことができるように成長したのである。

時至って、〈イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威をお授けになった〉。宣教は霊の戦いである。霊の世界には階級的秩序がある。悪魔・悪霊は神より下位にあるが、人間より上位にあって、人間に影響を及ぼしている（エペソ2・2）。そこで、イエスは神から委ねられた御国の〈権威〉と聖霊の力によって悪霊を追い出された（12・28）。イエスは弟子たちにも御国の〈権威〉と聖霊の力を与えて、ご自分と同じ働きができるようにされたのである。このように特別に職権を委任されて遣わされた者を〈使徒〉という。

三、主イエスによる派遣

イエスは〈十二使徒〉に〈命じて言われた〉。

①〈イスラエルの家の失われた羊のところに行け〉。宣教はまず選民イスラエルから始められた。

②〈行って、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ〉。宣教は積極的に「出て行く」ことが大切である。伝道者は神からのメッセージを人々に伝える。

③〈病人をいやし、死人をよみがえらせ、重い皮膚病にかかった人をきよめ、悪霊を追い出せ〉。聖霊が働かれ、人々の霊肉をいやしてくださる。

④〈ただで受けたのだから、ただで与えるがよい〉。宣教をビジネスにしてはいけない。

⑤〈財布の中に金、銀または銭を入れて行くな。旅行のための袋も、二枚の下着も、くつも、つえも持って行くな。働き人がその食物を得るのは当然である〉。伝道者は富や雑事に心を奪われることなく、身軽に動かなければならない。教会は、伝道者が宣教に専念できるように十分な謝儀を備えたい（Iコリント9・14、Iテモテ5・17～18）。

⑥〈どの町、どの村にはいっても、その中でだれがふさわしい人か、たずね出して、立ち去るまではその人のところにとどまっておれ。その家にはいったなら、平安を祈ってあげなさい〉。拠点を定め、熱意のある者と協力して伝道するとよい。

⑦〈もしあなたがたを迎えもせず、またあなたがたの言葉を聞きもしない人があれば、その家や町を立ち去る時に、足のちりを払い落しなさい〉。拒絶されても失望するな。責任は彼らに帰する。

結論

私たちは皆、主イエスに選ばれて、弟子とされた。必要な訓練を受けて、宣教の働きに励もう。神が任命し、御国の権威を与えておられる牧師を敬い、教会全体が一致団結して伝道を進めよう。

研究資料

（足立）

マタイ10章にはイエスの「派遣の説教」が記されているが、それに先立って、「派遣のきっかけ」（9・35～38）と「12使徒の任命」（10・1～4）が書かれてある。10・5～15の内容は、「派遣に当たっての指示」となる。

テキスト

1　イエスは十二弟子を呼び寄せて　とあるが、特別な集団として登場するのはここが最初となる。いままで4・18～22、9・9で弟子に召されて応答した5人のことが記されているが、ここでは更なる段階に入っていく。マタイは　**十二弟子**　という表現を用いる唯ひとりの新約聖書記者である（11・1、20・17、26・20）。イエスには多くの弟子たちがいたが、12人は特にイエスと密接な関係にあったし、初代教会において類のない立場に置かれる運命にあった。ルカ6・12～13によると、イエスは徹夜の祈りの結果12人を選択した。その働きの内容に関しては、**汚れた霊を追い出す**　権威が強調されている（比較マタイ9・35）。

2～4　十二使徒　とあるが、これは「使徒」（アポストロス）という言葉をマタイが唯一使った個所であり、四福音書において「十二使徒」という表現はここだけの使用である。マルコ、ヨハネは「使徒」を各1回使うだけで、ルカには6回出てくる。しかし使徒行伝には28回、パウロ書簡には34回出てくる。明らかにイエスの地上生涯の期間には多くないが、初代教会の歩みにあっては重要な言葉であった。「使徒」は、遣わされた者の意味で、背後に派遣した者の権威がある。彼らはやがて起こされる初代教会において鍵の役割を持つようになった。

マタイはマルコ、ルカと同様に12人の名を記している（参照マルコ3・13～19、ルカ6・12～16、使徒1・13では11人）。マタイは彼らを6つのペア、つまり二人組で記している。そして　**シモンとその兄弟アンデレ**、**ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ**、**取税人マタイ**　に関しては召命の経緯が既に記されているが、他の7人は初登場である。**バルトロマイ**　は、おそらくナタナエル（ヨハネ1・45～49）と同一人物。**熱心党**　とは、ローマの支配を武力で駆逐しようとするユダヤ国粋主義者。イエスが十二弟子を選んだとき、超人的な能力を持つ者を選択しなかった。神は御自身の御業を成すために際立った人々を必要とはしない。また12人のある者たちは優れた賜物の持ち主たちで、他の者たちは至って普通の人々であったように思われる。

5～6　イエスは十二人を宣教に遣わすに当たり、敢えて宣教の範囲を限定された。ここにはイエスの死後、宣教の拡大が意図されていることが伺える。そして　**イスラエルの家の失われた羊**　こそ十二弟子が最も優先すべき宣教の対象であった。何よりもこの限定は伝道に不慣れな弟子たちへの主の配慮だっただろう。パウロも神のご計画に基づいて宣教の対象を絞っている（使徒13・46、18・6、19・9、28・25～28）。

7～8a　十二弟子の働きの内容は、神の国の到来を告知し、病める者を癒し、悪霊を追放することであった。彼らが伝えるメッセージは、洗礼者ヨハネのそれとまったく同じものである（3・2、4・17）。また十二弟子の働きは、様々なクリスチャンの伝道を通して使徒行伝において再現されている（使徒3・1～10、8・7、13、9・32～43、14・8～10、19・13～16、20・7～12）。

8b～10　働き人が身につけるべき経済原則が記されている。**ただで受けたのだから、ただで与えるがよい**　とあるが、弟子たちが受けた祝福はただ恵みによるものである故、同様に分け与えることが大切。働き人の生活が献げものに依存することが、できるだけシンプルに旅をすることで説明されている。お金、旅行運賃、必要な衣服にあらわされる、弟子たちが必要とするすべての財源は、彼らの伝道を受け入れる人々によって与えられる。

11～13　ここには伝道の戦略が記されている。弟子たちは自分たちのメッセージや伝道を受け入れる人々を探さなければならない。そして伝道の拠点を定める。また　**平安を祈って**　その家に入るよう命じられた。

14～15　これは福音のメッセージを受け入れない家や町を立ち去る際のこと。弟子たちのメッセージを拒絶することは、重大な罪と見られている。福音を拒んだ責任は、拒んだ側にあるという宣言を、神の代理者として厳粛に行う。

参考図書　内田和彦『マタイの福音書』『実用聖書註解』いのちのことば社、Blomberg,C.L.,Matthew(Broadman).Morris,L.,The Gospel According To Matthew(Eerdmans).

9月 4日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ10・1～15
タイトル　弟子をつかわす
暗唱聖句　その家にはいったなら、平安を祈ってあげなさい。マタイ10・12
目　標　全員、主のもとに集合！　それはまたつかわされるため。

（長谷川）

導　入

2学期が始まりましたね。どんな夏休みでしたか。きっと楽しい思い出が出来たと思います。今日は「振起日礼拝」の日、クリスマス目指して、また教会学校に励みましょうね。

12弟子の選び

イエス様は初めの頃、お一人で伝道をしておられました。「すべての町々村々を巡り歩いて」（9・35）とあるように、人々の救いのために歩き回ってくださっていました。「あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった」とも書いてあるように、大変お忙しい日々でした。悲しんでいる人、救いを必要としている人たちが大勢いることをごらんになって、とても、同情してくださっていました。イエス様のご愛が伝わりますね。

そこで、イエス様は考えられ、すばらしい福音を伝えるために弟子たちの特別な指導者として「12人の弟子」を選ばれました。

漁師をしていたペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの4人、旧約聖書をよく学んでいたピリポとバルトロマイ、慎重にものを考えるトマス、取税人マタイ、おとなしいアルパヨの子ヤコブとタダイ、熱心に国を愛していたシモン、そして最後にはイエス様を裏切ったユダの12人でした。

皆さんはこの12人のお弟子さんのことを聞いてどんなことに気づきますか？　それは、「イエス様は、色んな職業（仕事）の人たちを選ばれた」ということですね。

生まれた場所も、育ったところも、受けた教育も、持っている性格や物も、考えも、一人一人全く違ったことでしょう。イエス様は、一人一人が大切で、一人一人を必要な働き手として用いてくださるのです。そのために、12人を「呼び寄せて」くださいました。12人に期待して選ばれたのです。

つかわされた12弟子

イエス様に選ばれた12弟子は、まず「汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威」をイエス様から授けられました。特別な力を、イエス様から頂いたのです。それは、イエス様と同じような働きをするためでした。

次に、主は、いよいよつかわされるための7つの命令(守るべき教え)を弟子たちに話されました。

①まずはイスラエルの人たちの所から伝道しなさい。②出て行って「天国が近づいた」と宣べ伝えなさい。③病人をいやし、死人をよみがえらせ、重い皮膚病にかかった人をいやし、悪霊を追い出しなさい。④神様からただで頂いたのだから、ただで与えなさい。⑤余分なお金や、旅行に不必要なものは持って行かないように。身軽に働きなさい。神様は必要なものは用意されます。⑥どの町、どの村に入っても、協力してくださる方を探し、その方のところにおらせて頂きなさい。そして、その家の平安、祝福を祈ってあげなさい。⑦あなたがたを喜んで迎えず、あなたがたの言葉を聞かない人がいても失望しないように。聞かない責任はその人にあるのだから。と、細かく教えてくださいました。

イエス様は素晴しい先生でもあられますね。伝道旅行の持ち物のことまで詳しく教えてくださるのですから。従ったイエス様の弟子たちは、とても勇気が出たと思います。

まとめ

12弟子を選ばれたイエス様は、私たちも選んでくださっているのです。「〇〇君も」「〇〇ちゃんも」（出席生徒の名を呼んで？）それは、イエス様の救いを伝えるためです。また、イエス様の愛を私たちが実行するためです。「弟子」とは、先生に習って、先生をお手本にして生きている人のことです。写書（お習字）をする時、お手本をしっかり見て、お手本をまねて書くときれいな字がかけますね。そのように、しっかりイエス様を見つめて、イエス様のことをまねていくと、私たちも「弟子」になれるのです。

今日、イエス様はあなたを「呼び寄せて」おられます。「わたしのお手伝いをしてください」と。「ハイ！」と言って、自分に出来ることをしていきましょうね。

♪12でしのなまえ♪（ふくいん子どもさんびか13）

9月 4日 ワーク解説

ワーク Ⓐ

●話し方のヒント

イエス様は十二人の弟子たちを選んで、イエス様のように、苦しんでいる人を助け、神様のことを伝えに行きなさいと言われました。イエス様は弟子たちに特別な力を与え、大切なことも教えてくださったので、弟子たちは安心して行きました。イエス様は皆さん一人一人も選んで、「私を手伝ってください」と願っておられます。イエス様の力と助けをいただいて、喜んでお手伝いさせていただきましょう。

●ワークについて

イエス様が弟子たちに教えたことに〇、そうでないことに×をしましょう。

ワーク Ⓑ

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いて見ましょう。

●質問2　時間があれば、名前だけでなく、特徴なども話してあげると身近に感じられると思います。

●質問3　イエス様の12人の弟子たちは、皆同じではなく、それぞれ長所、短所含め特徴を持っていました。彼らは様々な失敗を経て、また聖霊に満たされることによって弟子として整えられていきました。他の人と比較するのではなく一人一人が神の栄光を表わすために造られたことを教え、主の弟子として歩むように導きましょう。

ワーク Ⓒ

●本日のみ言葉を書き入れます。

●第2問　神様の世界宣教のご計画について考えます。それは12弟子（使徒）を選んで訓練し、派遣するというもので、答えは②です。

●第3問　選ばれた12人の弟子のそれぞれの人となりを聖書から調べます。記載している聖書個所を開きながら確認してください。名前の順番は「講解」に出ている順番で、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、トマス、マタイ、ヤコブ、タダイ、シモン、ユダです。

●第4問　今、あなたが教会に来てイエス様を信じていることは、あなたが【今】、【日本】の人々に福音を伝えるためであることをとらえさせます。

ワーク Ⓓ

●イエス様の選んだ人たちは、私たちが選ぶだろうと思えるタイプと全くかけ離れていること、また特別な基準がないことに驚きと安堵感を覚えます。12人のタイプを見ることで、子どもたちがイエス様のお弟子さんにはいろんな人がいたことを知り、自分はどのタイプかを考えます。

●多くの人はイエス様の招きに対して、「私のようなものは…」と遠慮しますが、イエス様の召命は特別な基準がなく、イエス様が必要とされている人は、イエス様を必要としている人なのです。主の招きに応じ、主の働きにつかわされる子どもたちが起こされますように。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　「弟子―師（先生）」という関係にある人がいますか。（学校、塾、習いごとの先生）

2　先生から良い指導を受けている人は幸せです。

●考えてみよう

1　自分で主イエス様を選んだのではなく、主イエス様に十二弟子は選ばれました（ヨハネ15・16）。私たちも同じです。

2　十二弟子にはいろいろな人がいます［説教例、講解参照］。あなたと似たような人はいませんか。主イエス様はあなたの長所も短所もご存じで選ばれたのです。

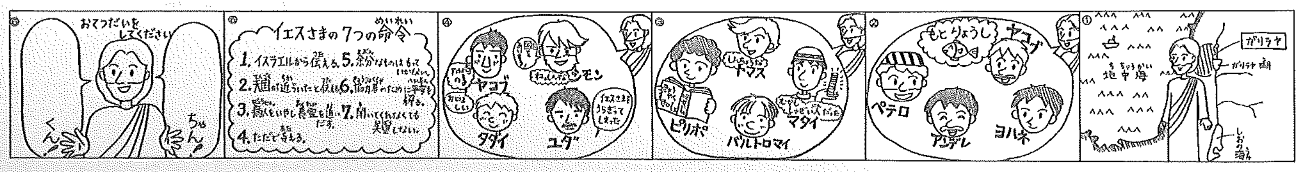
3　主イエス様は遣わされる前に、権威をお授けになりました。それは聖霊を受けることです（使徒1・8）。聖霊によって悪魔に勝利することができます。

4　「…平安を祈ってあげなさい」とありますが、まだ主イエス様を信じていない人のために祈りましょう。

●自分に当てはめてみよう

1　主イエス様の弟子であることを再認識し、誇りも持ちましょう。主イエス様は最高の師（先生）です。

2　主イエス様の弟子としてあなたのできることは何ですか。教会の中高生科で伝道のために何かできることはありませんか。小さなことでもやってみましょう。



聖 書　マタイ11・25～30
テーマ　偉大な招き

（金井）

序論

日本人は御利益信仰に染まっており、キリスト者でさえこの性質はなかなか抜けない。しかし、シンプソンの歌にあるように（新聖歌346）、「賜物より与え主」を喜ぶことこそ信仰の真髄である。救い主イエスと共に歩む恵みを味わいたい。

一、わたしのもとに来なさい

主イエスは数々の力あるわざによってご自分が救い主であることを各地の人々に示された。にもかかわらず、主イエスを信じようとせず、悔い改めない町がいくつもあった（11・20～24）。イエスは父なる神に祈って言われた、〈天地の主なる父よ。あなたをほめたたえます。これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださいました〉。律法学者やパリサイ人は自らの律法知識を誇っており、専門の律法学者ではないナザレの大工には耳を傾けようとしなかった。

一方、貧しい人や罪人、病人、障がい者、女性、子どもなど宗教的な教養が無いと言われた人々は、イエスのもとに集まった。〈幼な子〉のように主を求める彼らに福音が啓示されたのは、〈父〉なる神の〈みこころにかなった〉ことであった。彼らは〈子〉なる神イエスが〈選んだ者〉である。

イエスは言われた、〈すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう〉。律法学者やパリサイ人は膨大な数の戒律を人々に課した。彼らはこの「重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない」（23・4）。イエスはこの律法の「くびき」（使徒15・10）から人々を解放されるのである。

「安息日の主」（12・8）であるイエスは、私たちの霊も心も体も休ませてくださるお方である。イエスはみもとに来る人を〈すべて〉受け入れてくださる。イエスのみもとに行こう。重荷を降ろして、しばし休もう。私たちがボロボロで不格好であっても、主イエスは優しく迎えてくださる。

二、わたしのくびきを負いなさい

イエスは続けて言われた、〈わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい〉。〈くびき〉は牛など家畜の首にかけて、車や鋤を引かせる道具である。〈わたしのくびきは負いやすく〉いとイエスは言われる。イエスは青年時代にナザレで大工をしておられた。当時の大工は木工に関わる仕事は何でもした。イエスは「私の作るくびきはあなたにピッタリで負いやすいものだよ。私の大工の腕は一流だから」と自慢しておられるのである。

〈くびき〉が体型に合っていないと首が痛み、疲れてどうしようもない。あなたは自分に合わない仕事や生活のスタイルを作って、無理をしていないだろうか？ 心の叫びに耳を傾けよう。体のシグナルに注意しよう。疲れた時は静かに休んだらいい。元気が回復したら、また歩き出そう。あなたにピッタリの新しい〈くびき〉を付けて！

三、わたしに学びなさい

人には皆それぞれに負っていかなければならない〈重荷〉がある。私たちがキリスト者になったからといって、〈重荷〉が無くなるわけではない。私たちは自分の家庭や職場、境遇、立場、役割を離れることが、容易にはできないのである。

けれど、〈わたしの荷は軽い〉とイエスは言われる。この〈くびき〉は二頭で負うものである。あなたはもう独りではない。主があなたのパートナーとなって、共に重荷を負ってくださる。

イエスは、〈わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい〉と言われる。主イエスは〈柔和で心のへりくだった〉最高のコーチである。主はあなたのペースに合わせて一緒に歩きながら、一つ一つアドバイスを与えてくださる。私たちは主の弟子として、主を見習いながら成長していく。

主イエスの〈くびき〉、すなわち戒めはシンプルである。それは「互いに愛し合う」ことである（ヨハネ13・34、15・12）。主イエスのように〈柔和〉な心で人をあるがままに受け入れる。自分も背伸びをしないで〈へりくだる〉。これが霊的健康を持続するしなやかな生き方である。主イエスと共に歩み、主イエスに学ぶならば、あなたの〈魂に休みが与えられるであろう〉。

結論

主イエスは今も御手を広げて招いておられる。私たちはこのままの姿で主の御手に飛びこもう。主イエスと共にある時に、私たちの魂は安息を得る。主の導きに従って、主と共に歩いていこう。

研究資料

（足立）

マタイはここでイエスがささげた小さな祈りを紹介し、弟子たちに語ったことばを記している。この個所は3つの部分で構成されている。〈1〉イエスが教えた内容が学者や知識人に開かれてはいるが受け入れられないで、幼子が受け入れることに、感謝を表している（25～26）。〈2〉御父と御子との間にある特別な関係を示している（27）。〈3〉イエスに平安と安息を求める虐げられた人々を招いている（28～30）。最初の2つはルカ10・21～22と並行関係にあるが、招きはマタイにのみ見いだされる。

テキスト

25　そのとき とは、以下に語る内容と前述のものが同じ期間のものであったことを示している。しかし厳密には結びつけられない。ここでイエスの祈りは神を賛美することで始まる。いつものようにイエスは神を **父** と呼ぶ。神はイエス・キリストの父なる神である。**天地の主** とは、はるか彼方の暴君ではなく、地上のどこにあっても全てのものが敬意を払うべきお方であることを意味する。イエスは神が啓示される手段の故に、天の父に感謝している。それは神を知る方法が、人間の優秀性や知恵によらないというご計画にあるから（参照Iコリント1・18～19、2・6～8）。ここの主旨は、神を知ることは人間の知識や教育に依存しないと言うこと。霊的な理解は人の常識とは全く別のものである。幼子の存在は、彼らが知性的熟練や身につけた深遠な探求方法によってではなく、単純にイエスに信頼することで神を知るに至ることを教えている。単純な信頼こそ、私たちが最も謙遜になる道である。

26　ここでも父としての神のご性質が繰り返されている。卑しい者が神の国を発見できることは、**みこころにかなって** いる。もし賢者がそれを発見できるならば、卑しい者と同様の方法に与ることが主のみこころなのである。

27　この節は、イエスと天の父との信頼関係を詳述している点で際立っている。特にイエスを単純に **子** と表現しているのは、24・36と一致する。もちろんイエスを神の子とする見解は、本福音書の中心にある（2・15、3・17、4・3、6、8・29、14・33、16・16～17、17・5、21・37等）。一方神を「アバ父」と呼ぶことは、イエスのユニークな性質であると認められる。そしてこの関係は、イエス自身の自覚の中心にあったと認証される。また父なる神は、子であるイエスを仲立ちにしてご自身を表した。イエスと父なる神は全ての知識を共有しており、互いを知っている。子が父を知らせなければ、人は決して父を知ることはできない。そして御子の本質的な事柄は、人間の概観では明らかにされなかった（参照ルカ10・22）。

28　28～30節はマタイ特有の個所である。当時人々は、ユダヤ教の律法主義が要求する重荷に疲れていた。その彼らをイエスは恵み深く招いている。**わたしのもとにきなさい** とは、天の父に、或いは天の父のふところに人を近づける唯一のお方は、イエスであるという考えを示している。なぜならば父を知っている唯一のお方はイエスであり、イエスが父をあらわそうと選んだ者だけが父を知ることができるからである。その招きは全ての困惑する者に押し広げられている。イエスは人生の重荷に疲れ果てている者すべてを招いている。真の休息を与えるのはイエスである。

29～30　イエスは彼に従い、彼に仕え、彼から学ぶよう人々を招いている。**くびきを負う** という表現は、運ぶこと、または鋤で耕すことからの隠喩である。くびきは旧約聖書では、時には抑圧の象徴であった（イザヤ9・4、58・6、エレミヤ27～28章）が、神に仕える良い意味でも使われていた（エレミヤ2・20、哀歌3・27）。新約聖書ではくびきは常に比喩として使われていて、束縛か、ある種の権威への服従を意味する。律法のくびきと類似した表現がユダヤ人の間では共通のものであった。イエスは律法学者とパリサイ人が人々の生活に重い重荷を置いているのを非難している（23・4）。そしてイエスは、**わたしのくびきを負うて** と語る。くびきとは本来荷を負いやすくする物である。イエスが言わんとするのは、律法の重荷を負わされ、苦しめられている者たちと共に、自分が重荷を負うと言うこと。しかもイエスのくびきは、柔和と謙遜である。そのイエスのくびきを負い、彼から学ぶ者に真の安息が与えられる。それは、イエスのくびきは心地良いものだから。

参考図書 内田和彦「マタイの福音書」『実用聖書註解』いのちのことば社、Blomberg,C.L., Matthew(Broadman). Morris,L.,The Gospel According To Matthew (Eerdmans)。

9月 11日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ11・25～30
タイトル　偉大な招き
暗唱聖句　すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。　マタイ11・28
目　標　他には見られないイエス様の偉大な招きに応じよう。

導　入

（長谷川）

皆さんは、どこかの、また、誰(だれ)かからの「招待状」をもらったことがありますか？　学校の門の前で配られるアニメ映画の割引券？　遊園地の割引券？　温泉の招待券？　教会学校子ども大会の招待券？　いろいろありますね。招待状をもらうことはとってもうれしい、ラッキーなことですね。

今日は、他のものとは比べものにならない招待状であるイエス様のお言葉を学びましょう。

わたしのもとに来なさい

イエス様は私たちに「わたしのもとに来なさい」という招待状をくださっています。他のところに行かないで「わたしのもとに」と言ってくださっています。

この世の中には「招き」や「おさそい」がいっぱいあります。興味深いこと、行きたいところ、やりたいこともいっぱいありますね。「ここが楽しいですよ」「ここにいやしがありますよ」という声はあちこちにあふれています。でも、それらのものは、一時的で、本当に心を満足させてくれるものではありません。

でも、「わたしのもとに」と言ってくださるのが神の子イエス様ですから素晴しい約束が用意されているのです。「来なさい」と言ってくださるので私たちがイエス様のもとに「行く」時、その約束をいただくことが出来ます。どんな招待状をもらっても行かなければ何にもなりませんね。

あなたがたを休ませてあげよう

イエス様のところへ「行く」時、私たちにいただける約束は「休みが与えられる」ことです。

この「休み」とは、心と魂の休息、平安です。イエス様の時代の人々は、たくさんの守るべき律法にしばられてとても大変な日々を送っていました。「重荷」がいっぱいでした。そんな人々に「休み」を約束してくださったのです。イエス様に委ねる人生は、心と魂、そして、体も休ませていただけるのです。なんて素晴しい約束でしょうか。

「招き」にこたえた生き方とは？

「平安」と「喜びにあふれた」人生を用意してくださるイエス様は、このように生きるといいですよ、と2つの方法を教えてくださいました(29)。

1つは、「イエス様のくびきを負う」ことです。「くびき」とは、2頭の家畜を首のところでつないで農作業をさせる道具のことです。イエス様が「わたしのくびきを負うて」と言ってくださるのは、イエス様が備えてくださる人生をイエス様と一緒に歩くんですよ、と言ってくださっていることなのです。イエス様がぴったり一緒についていってくださるのですから、身軽ですし、とても安心ですね。

もう1つの方法とは、「イエス様に学ぶ」ことです。「わたしに学びなさい」とイエス様は言われましたね。「学ぶ」とは「まねる」ことです。勉強でも、スポーツでも、教えてくださる先生やコーチの言われることをよく聞いて、まねる時に上達します。自分勝手なことばかりしていては上手になれないし、楽しくもありませんね。

イエス様に学ぶ時、イエス様は「おだやかでへりくだった」お方ですから、私たちによーく教えて導いてくださるのです。

「イエス様と一緒に歩く」「イエス様に学ぶ」生き方をしていきましょうね。とても幸いですよ。

まとめ

Y牧師先生は、若い頃(ころ)色々なことで悩んでいました。お仕事に行く電車の窓から、沿線にある教会の看板に、今日の聖句が大きく書かれているのが目に入りました。「わたしのもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。キリスト」と書かれてあったのです。毎日毎日電車の窓から見ているうちに「一度、教会へ行ってみよう！」と決心し、日曜日に教会へ行きました。イエス様に全ての悩みを打ち明けると、本当に心が安らかに変えられ、救われました。今は、喜んでイエス様のために働いておられます。

私たちもイエス様の招きにこたえていきましょうね。イエス様にすべておまかせする時、心は平安と喜びにあふれます。

♪いつくしみふかき♪　（こどもさんびか61）

9月 11日 ワーク解説

ワーク Ⓐ

●話し方のヒント

皆さんが悲しい時、苦しい時、つらい時、疲れた時、だれの所に行きますか？　イエス様は「わたしのもとに来なさい」と言って招いてくださっています。イエス様はどんな時も一緒にいてくださって、慰め癒(いや)し、力づけ、休みを与えてくださる神様だからです。皆さんがイエス様の所に行く（イエス様を信じてお祈りする）なら、イエス様は皆さんの心を、安心で一杯にしてくださいます。

●ワークについて

重荷を負った人々をイエス様の腕の中に貼(は)りましょう。

ワーク Ⓑ

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いて見ましょう。

●質問2　子どもなりの重荷があります。そして罪の問題は子どもであっても霊的に深く探られています。これをイエス様のもとへ持っていくこと、特に十字架によって、救いのみわざがすでに完了していることを教え、信仰に導きましょう。また日常のさまざまな重荷もイエス様にゆだねていくように導きましょう。クリスチャンの生涯はイエス様のもとにきて休むというだけではなく、キリストのくびきを負うものとして、主に学び、主と共に歩む生涯です。そしてそこに魂の平安が与えられます。

ワーク Ⓒ

●28～29節を掲げています。【すべて重荷を負うて苦労している者】【くびき】【学び】

●第2問　この招待状の差出人と受取人を書きます。【イエス様】【すべて重荷を負うて苦労している者】

●第3問　「すべて重荷を負うて苦労している者」にはどういう人がいるか考えます。ここで色々と話し合ってはどうでしょうか。最終的には「あなた」は入っているかどうか、どうしてかという話し合いをしましょう。

●第4問　イエス様が休みを与えてくださるその方法について確認します。【もと】【くびき】【学ぶ】で、その具体的中身について話し合い、かっこの中に書き込みます。【イエス様を信じる】【祈り、礼拝し共に歩む】【み言葉を学び従う】など。

ワーク Ⓓ

●今回のワークの構成は説教例に従っています。時間の関係でワークが出来ないときは、説教準備にこのワークを参考にしていただければと思います。

●3．③「イエス様に学ぶ」に「学ぶ」は「まねる」とありますが、イエス様をまねることができるでしょうか。まねるように勧めるのなら、重荷を負わせてしまいます。できないから、出来る者と変えられるイエス様（内住のキリスト）を子どもにもわかるように語らせていただきたいものです。これなくして魂に真の平安はないと思います。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　あなたの「重荷」は何ですか。（勉強、人間関係、ない人もいるかもしれません）

2　その苦労をどのように解決しますか。

●考えてみよう

1　主イエス様は「すべて重荷を負うて苦労している者はわたしのもとにきなさい」と言われました。主イエス様のもとに行って解決できない重荷はないのです。

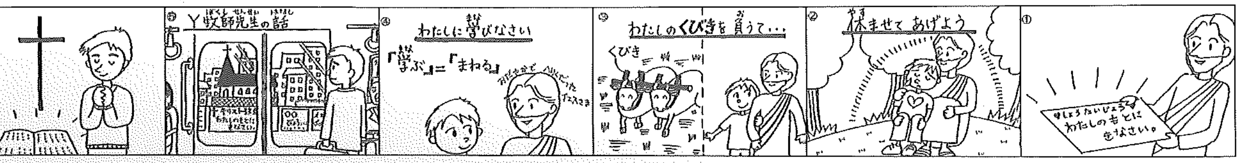
2　主イエス様は「きなさい」と招いておられます。だれでも、どんな時でも、どんな重荷を持っていても、行くことができます。招かれていますので、そのまま行けばよいのです。

3　「休みが与えられる」とは心の平安です。魂の救いによる平安を得ることができます。いつも主イエス様が共におられるなら、心の平安を得ることができます。（思春期に精神的なケアが必要な子もいるとは思いますが、主の臨在から来る平安を祈ることも大切です）

●自分に当てはめてみよう

1　あなたは、主イエス様の所に行って重荷（罪、人生の苦しみ、死の恐れなど）を降ろしましたか。まだの人は今日、重荷を降ろしましょう。

2　あなたは、主イエス様と共に歩み、学んでいますか。いつのまにか主イエス様から離れたり、自分勝手に歩んでいませんか。



9月

18日 聖書講解

聖　書　ヨハネ3・1～16
テーマ　神の愛

（金井）

序論

4つの福音書にはそれぞれ個性があるが、皆、共通した目的を持っている。ヨハネによる福音書にはズバリ、「これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって永遠の命を得るためである」と記されている（20・31）。今日は、私たちに永遠の命を与えるために御子を遣わされた神の愛について学ぼう。

一、神から遣わされた御子イエス

主イエスがエルサレムに上られた時、〈ニコデモ〉という男が訪ねてきた。彼は①宗教家＝〈パリサイ人〉であり、②政治家＝〈ユダヤ人の指導者〉（最高法院の議員）であり、③学者＝〈イスラエルの教師〉である。彼が来たのは〈夜〉であった。人目を避けて、忍んで来たのである。

ニコデモはイエスを〈先生〉と呼ぶ。この原語はユダヤ教の教師「ラビ」である。彼はイエスに、〈わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています〉と言う。ニコデモはイエスが力あるわざによって示した〈しるし〉を認めており、イエスに心惹（ひ）かれていた。

主イエスはニコデモの求道心を認めつつ、彼の信仰の限界を看破して、重要な真理を示された。〈よくよくあなたに言っておく〉と三度繰り返されているが、〈よくよく〉は原文では「アーメーン、アーメーン」であり、これは主イエスが特に重要な真理を語る場合に用いられた表現である。まさにイエスは神から遣わされて〈天から下ってきた者〉であり、〈天上のこと〉を知り、〈神の国〉について教える特別な〈教師〉である。

二、聖霊による新生

イエスはニコデモに言われた、〈だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない〉。〈新しく〉と訳される語は「上から」という意味も持っている。神が天から賜る霊的生命によって新しい霊の人は誕生する。神の国に生きることができるのは、この天的な命を持つ者だけである。

ニコデモはこれを悟らず、〈人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいって生れることができましょうか〉と疑問を呈した。彼は地上のレベル、肉のレベルでしか考えることができなかったのである。

イエスは答えられた、〈よくよくあなたに言っておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である〉。〈水〉は洗礼者ヨハネが授けた水の洗礼を指す。それは予備的なものであり、今やイエス・キリストの名によって洗礼を受ける者は、聖霊を受けて新生の恵みにあずかるのである（マルコ16・16、使徒2・38、Ⅰコリント12・13、テトス3・5～6）。

〈イスラエルの教師〉ニコデモは〈霊〉については無知であった。そこで、イエスは彼に説明された。〈風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである〉。〈風〉と〈霊〉は同じ原語である。風は目に見えないが、音や作用によってその存在が知られる。聖霊も同様である。聖霊は御心のままに自由に働き、人々に新しい命をお与えになる。

三、永遠の命

聖霊が人々に下るために、イエスにはなさねばならないことがあった。それは人類の罪の贖いである。聖なる御霊は罪と同居できないからである。

イエスは言われた、〈ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである〉。荒野でへびにかまれたイスラエルの民は、モーセがさおの上に掛けた青銅のへびを仰ぎ見て生きた（民数記21・4～9）。そのように、罪という霊的猛毒のために永遠の滅びに向かっている私たちも、十字架に上げられた〈人の子〉（メシヤの称号。ダニエル7・13）イエスを仰ぐ時に、罪が赦され、〈永遠の命〉を受けて救われるのである。ニコデモは確かにイエスに出会って変えられている（7・50～51、19・39）。

結論

神は私たちが滅びることを望まれず、〈ひとり子〉を遣わして真理を啓示された。神は〈御子〉を十字架につけて、その命を代価として私たちの罪を贖（あがな）われた。御父と御子の痛み、ここに真実の愛がある。御子イエスを信じて永遠の命を得よ！

9月

18日 研究資料

研究資料

（石田）

16～21節は、ヨハネの説明であるように受け取られるし、そう理解するように15節までが括弧で閉じられているが、主イエスの言葉の続きとして読めなくもないし、その恵みも小さくない。

テキスト

14　モーセが荒野でへびを上げたように　主イエスは、民数記21・9に記されている出来事を引用して、ご自分の死に方と、その意味（15）を語られた。これはニコデモが「イスラエルの教師」（10）、つまり律法の大家であることを踏まえての発言。出エジプト後の荒野で、神に不平をもらしたイスラエルの民が、猛毒の蛇にかまれて苦しみながら死んで行った。そのように、生まれながらの人間は神に背いているという、罪の毒によって霊的に死んでいる状態にある。このとき神は毒蛇を取り除かないで、青銅の蛇を仰ぎ見ることによって命を取りとめ、癒（いや）されるようにされた。そのように神は、霊的に死んでいる状態の人間がただ主イエスの十字架を信じることによって、罪赦され、永遠の命を得る道を開かれた（15）。主は、この青銅の蛇が、ご自分の予表であると言っておられる。しかし典型的なユダヤ人であるニコデモにとって、メシヤが十字架に上げられ、殺されることによって贖いを成し遂げるとは、受け入れがたいことであっただろう。**人の子**（ホ・ヒュイオス・トゥー・アンスローポス）　この表現はニコデモに対してメシヤに関する預言（ダニエル書7・13、14）を思い起こさせるために使われている。**上げられなければならない**（ヒュプソオー）　これは13節の「（天に）上った」（アナバイノー）とは別の言葉。これは主イエスが十字架の木の上に上げられるということである（十字架への高挙）。主イエスの場合、上げられることは死を意味すると説明されていることからも明らか（ヨハネ8・28、12・32、33、34）。さらに天に上げられること（栄光への高挙）をも指している。上げられた主イエスを信じることは、永遠の命である（15）。

16　神は…愛して下さった（アガパオー）　主イエスがニコデモに教えられた内容がここに要約されている。神が愛して下さったということは、神がその人の存在それ自体を無条件で受け入れておられるということである。相手の良し悪しを抜きにして、一人ももれなく受容しておられる。そこには善良な市民か極悪非道の人間かという区別、おそらくニコデモが拘（こだわ）ったであろう選民か異邦人かという区別もない。神は、ご自分に敵対している人をも愛される（ロマ5・8、10）。人に愛される所があるからではなく、神の本質が愛だから人を愛されるのである（Ⅰヨハネ4・8、16）。「神はわれわれに対するその愛に先立って、また独立して、永遠に愛である」（ウェスレアン神学事典）。しかしそれは決して清濁併せ呑（の）み、人のすることは何でも是認しているという意味ではない。神は、罪人は愛されるが罪は憎まれる。あくまでも憐れみと同情の愛である。ちなみにこれは、神を愛する者に向けられるときの特別な愛とは異なる。いわば片思いと相思相愛に違いがあるように。**この世**（コスモス）　これは「世界、全世界」とも訳される言葉で、全時代、全世界の人類を指しており、そこにはキリスト者とそうでない人の区別はない（同じ用例は1・10、29、6・33、51、8・12、ロマ3・19、Ⅱコリント5・19、Ⅰヨハネ2・2、4・14）。この世を愛されたという言葉は、神の愛の気の遠くなるような広さをよく表している。アウグスティヌスいわく「神は私たちの一人びとりを、あたかも私たちのただ一人だけを愛されるように愛される」。**そのひとり子を賜わったほどに**　これは父なる神が、そのひとり子なる神を受肉させ、人類の罪の贖いのために地上に遣わしたことを意味している（ベツレヘムからカルバリまで）。ひとり子なる神を、神でありつつ人間とすることは、後戻りできない決定的な行為である（神の右に座しておられる主イエスは、今も神でありつつ復活体を持った人であられる）。だから神は人類の救いのために、ご自分を提供されたと言える。これが神にとってあまりにも高い代償であったことは、もっと知られてよい。　**ひとり子**（モノゲネース）この言葉は単なる一人っ子を意味してもいるが、主イエスについて用いられるときは、神の御子に対する称号となる（ヨハネ1・14、18・3、16、18、Ⅰヨハネ4・9）。これは、主イエスが神と人との唯一の仲保者であり（Ⅰテモテ2・5）、この方以外には救いがないこと（使徒4・12）を示す言葉である。**御子を信じる者がひとりも滅びないで**　主イエスの贖いのみ業を受け入れて初めて、神から永遠の命をいただくことができる。信じなくても自動的に救われているということでは決してない。

9月 18日

礼拝メッセージ例

聖書 ヨハネ3・1〜16
タイトル 神の愛
暗唱聖句 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。 ヨハネ3・16
目標 すべての人が生まれ変わり、永遠の命を得られるようにしてくださった神の愛を知る。

導入

（長谷川）

おはようございます。今日の中心聖句はとても素晴しく、また、有名な個所ですね。皆さんの中には暗唱しているお友だちもいると思います。

「聖書の中の聖書」、「新約聖書の富士山」などと言われてもいる聖句です。この1節の中に神様の大きな愛がたくさん詰められていることを一緒に学びましょう。

イエス様を訪ねたニコデモ

イエス様がエルサレムに滞在中、ニコデモという立派な指導者が夜こっそりとイエス様を訪ねて来ました。イエス様のなされたたくさんの奇跡を知って、イエス様に心を引かれていたようです。

イエス様はニコデモに「だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」と言われました。ニコデモは驚きました。そうです。人間がもう一度生まれ変われるはずがない、と思ってびっくりしたからです。

そこでニコデモは「人は年をとってから生まれることがどうしてできますか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか」と言いました。その通りです。お母さんのお腹にもう一度入って生まれなおすことなど絶対にできないことですね。では、イエス様の言われた「新しく生まれる」とはどういうことなのでしょうか？ それは、体の生まれ変わりのことではないのです。「魂の生まれ変わる」こと、「新しい心につくり変えられる」ことなのです。

これは、人の力や努力、また、学問できることではありません。神様の霊（聖霊）の力によってだけ出来ることなのです。「風は見えないけれども、ものが動くことでその存在がわかるように、聖霊が働かれると、人が新しい心に変えられているのがわかるのです」とイエス様は言われました。

ニコデモに示された天国への道

イエス様は、人間の力や何かで天国へ行くのではないことをわかりやすくニコデモに話してくださいました。それは旧約聖書をよく知っていたニコデモにはよくわかる話でした。昔イスラエルの民が毒蛇にかまれた時、モーセが荒野で青銅の蛇をさおに掛けたのを見た人だけが助かった話でした。ただ「青銅のへびを見上げた」人は助かったのです。何かよい行いをした、よいお薬を飲んだ人が助かったのではなかったのです。モーセの用意した「青銅のへび」を見ればよかったのです。

イエス様は、ニコデモに「よーく聞きなさい。私も十字架に上げられます。それを見た(信じた)人は救われる（天国へ行ける）のです」と教えてくださったのです。罪という毒に犯されている人間が救われる唯一の道は、イエス様の身代わりの十字架を見上げることしかないのです。

ニコデモはイエス様を信じ、イエス様を愛する人に変えられました。その証拠に、イエス様が十字架で死んでくださった時、アリマタヤのヨセフと共にイエス様を葬るために、たくさんの没薬と沈香を献げました（19・39）。

まとめ

神様は私たちを愛してくださっているので、私たちに天国を用意してくださっています。でも、人間は罪があるのでそのままでは天国に入ることはできません。その罪の身代わりとして、神のひとり子イエス様が十字架にかかってくださいました。そのことを計画してくださったのは神様でした。大切なひとり子を私たちに与えようとしてくださった神様の愛の深さ、また、十字架をいやがらずに受けてくださったイエス様の愛の深さ、本当に感謝ですね。

5人の子どもがいたOさん、親戚から1人養子に欲しいと頼まれました。大金持ちの親戚です。親戚ということでとても悩みました。でも、一人一人の寝顔を見ていると一人一人がとても大事で誰一人としてあげられませんでした。

その時、Oさんは、ひとり子をくださった神様のご愛のお心がよくわかって涙が止まりませんでした。

私たちのために命を捨てて永遠の命を与えてくださるために、ひとり子をくださった神様に心から感謝しつつ、イエス様のご愛にこたえて生きていきましょうね。

♪かみさまは♪ （こどもさんびか5）

9月 18日

ワーク解説

ワーク A

●話し方のヒント

皆さんの心の中に、汚い心・罪はありませんか？ 罪があったなら、そのままでは天国に入ることはできません。神様は、皆さんのことを大好きなので、皆さんが天国に入れるように、一人の大切な子どもであるイエス様を十字架にかけられました。このイエス様を信じるとき、皆さんの心は罪の心から清い心に変えられ、心がきれいな神の子として新しく生まれるのです。皆さんはもう新しく生まれ変わりましたか？

●ワークについて

飛び出すカードを作り、「神様の愛を信じます」と告白しましょう。

ワーク B

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いて見ましょう。

●質問2　イエス様は新しく生まれることの必要を強調しました。人は善行によって神の国を見ることができるのではありません。それ程、人は罪に犯されています。しかし、神はイエス様によって新しく生まれる道を備えてくださいました。すでに救われていても何も変わっていないのではと思っている子どもに対し、全く新しくされたことをみ言葉によって教えましょう（Ⅱコリント5・17等）。

●質問3　神の愛は、十把一絡げでなく一人一人に注がれています。子が犠牲になることは親自らが死ぬよりつらいことであることからも神の愛の大きさを教えましょう。

ワーク C

●み言葉は16節全体です。【そのひとり子を賜わった】【この世】【永遠の命】

●第2問　【永遠の命】

●第3問　答えは①の【新しく生まれる】、別の言葉では「水と霊とから生まれる」。

●第4問　「そのひとり子を賜わった」ことの中身を考えます。そして新しく生まれるということは人間の力や努力によってはできないことを、モーセが掲げた青銅のへび（民数21・4〜9）と対比しながら教えます。見上げることは、ただ信じて仰ぎ見ることです。

●第5問　「この世」の中に「あなた」も入っているね、と確認しながら、イエス様を信じる信仰を改めて握ります。

ワーク D

●イスラエルの教師であるニコデモに対しては、旧約聖書から紐解（ひもと）いて、十字架にあげられるメシヤの使命と新生の福音を解き明かされるキリストの知恵と適応されるお姿に目を見張る思いです。

●キリストを信じず罪の中にとどまる者は、永遠に肉であり、滅びを刈り取ります。しかし、キリストを信じることで、罪を赦され、新しく霊に生まれ変わり、永遠の命に至ります。子どもたちがキリストを信じ、新生を体験しますように。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　ヨハネ3・16のみ言葉を知っていましたか。「聖書中の聖書」と言われている個所です。ぜひ暗記して、覚えてください。

2　「神、ひとり子、愛、永遠の命」と福音の本質を示す大切な言葉です。確認してみましょう。

●考えてみよう

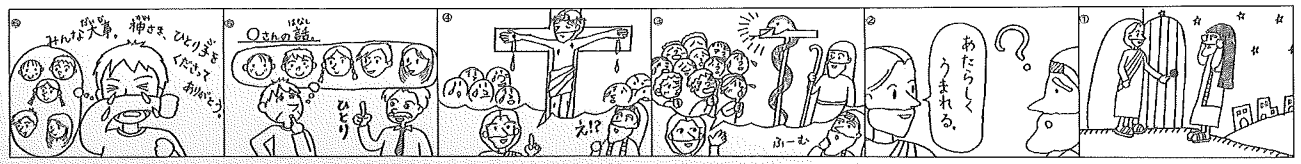
1　「新しく生まれる」とはどんなことですか。（主イエス様を信じることによって、罪が赦され、心が新しくなることです。洗礼を受けた子の中にも、救いの確信のない子がいます。悔い改めと信仰を再確認し、み言葉によって救いの確信を与える時としましょう。確信がなければ、この世に流されてしまいやすいからです）

2　「モーセが上げた荒野のへび」は何を示していますか。（最初は理解できなかったニコデモも主イエス様が罪のために十字架につかれるお方であることがわかりました）

●自分に当てはめてみよう

1　「この世」の所に自分の名前を入れて、読んでみてください。そして読んだとおりに信じましょう。

2　福音とはヨハネ3・16です。単純な真理で、だれでも救われることができます。主イエス様を信じていない人に教えてあげましょう。むずかしいことではありません。



9月

25日 聖書講解

聖　書　ヨハネ5・1〜9
テーマ　ベテスダの池

（鎌野）

序論

キリストは、老若男女どんな人々でも同じように招いておられるが、人々の態度には二つのケースが見られる。一つはニコデモや百卒長のように自分から求めてくる場合であり、もう一つはナインのやもめのように求める力さえない場合である。今日学ぶのは後者のケースだ。このような人々に対して、主はご自分のほうから近付いて来られ、何に頼るべきかを示されるのである。

一、言い伝えに頼るのか

この出来事は〈ユダヤ人の祭〉のときにエルサレムで起こった（どういう祭りかは、研究資料参照）。楽しい祭りの時でも、病気に苦しむ多くの人々は、〈ベテスダの池〉のほとりで、目を皿のようにして水面をにらんでいた。それは、〈水が動いた時まっ先にはいる者は、どんな病気にかかっていても、いやされたからである〉。これは当時の言い伝えだったと思われる。〈そこに三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があった〉。長い間苦しんできた彼は、何とか元気になりたいとの一心でこの言い伝えに頼っていた。

現代でも、様々な「言い伝え」が流布している。神社仏閣は言うに及ばず、学歴神話、土地神話、結婚神話、ある種の健康食品神話等、それさえあれば健康になれる、金持ちになれる、幸せになれるという話があちこちにある。しかし、多くの場合、それは利己的な願望になりやすい。真っ先に入った者だけがいやされるというのなら、それは、他の人を押しのけても、自分だけが良くなることを求める生き方にほかならない。

二、人の力に頼るのか

彼はそれまで何度か池に飛び込んだであろう。しかし、病気は良くならなかった。いやされた人も何人かはいただろうが、彼はそのたびに悔しい思いをしたに違いない。自分の力だけではだめだと思って、家族や友人に助けを求めた時もあった。しかし38年もたてば、そういう人もいなくなってしまう。だから、主がご自分のほうから近づいて、彼に〈なおりたいのか〉と言われたときも、〈水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません〉としか、答えられなかった。人の力に頼っているなら、しばしばこのように絶望的な状況になることを知らねばならない。

主が彼に〈なおりたいのか〉と尋ねられたのはなぜだったのか。主は、彼が〈長い間わずらっていたのを知って〉おられた。絶望的な状況であることもご存じだった。だからこそ、尋ねられたのである。人の力の限界を知ったときこそ、信仰が生まれるチャンスなのだ。それは「信仰の父」アブラハムにおいても真実だった。「彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた」と書かれているとおりである（ローマ4・18）。

三、救い主に頼るのか

主イエスは彼に、〈起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい〉と命じられた。もし彼が、「馬鹿なことを言うな。起きることも歩くこともできないから、こんなに長い間苦しんできたのではないか」と反発したのなら、彼はそのままの状態だったろう。しかし彼は、主の権威あることばを聞いて、やってみようとしたのだ。すると、起きることができた。床を取りあげることもできた。そして歩くことさえもできた。言い伝えでもない、人の力でもない、ただ主イエスのことばにより頼んだとき、普通では起こりえないことが起こったのである。

「主に拠て恩恵を受くる者は其侭で他の力なしに恩恵を頂戴することが出来ます」（バックストン『ヨハネ伝講義』91頁）。何もできないというありのままの自分の姿を認め、ただ主に拠り頼む時にこそ、主の恵みを受けることができる。主はナインのやもめを見て深く同情し、ひつぎに近寄って死んでいた息子に「起きなさい」と命じられた（ルカ7・14）。これは、この男に言われたのと全く同じ言葉である。主は絶望の中にある者こそ憐れまれる。主イエスこそ、ベテスダ（その意味は「憐れみの家」）と言うにふさわしいお方なのだ。

結論

救い主イエスは、今でもすべての人々を招いておられる。救いを求める人はもちろんだが、求めることさえできない人々をも憐れんでおられるのだ。「競争社会」と言われる現代、望みを失っている多くの子どもや大人がいる。そういう人々に、本当に頼るべきお方を知らせようではないか。

9月

25日 研究資料

研究資料

（石田）

テキスト

1　ユダヤ人の祭り　主はユダヤ人として律法に従って祭りに参加された。当時のユダヤ人の祭りには5つあり、その中でこの祭りがどれに当たるかは記されていないが、多くの聖書学者たちは、これを過越の祭りであると解釈している。異本の中には定冠詞のついているものがあり、その場合は過越の祭りを指す（新改訳欄外注）。そうだとするとヨハネの福音書では他に3回の過越の祭りに触れているから（2・13、6・4、11・55）、公生涯に4回の過越の祭りがあったことになり、主のお働きの期間は3年余りということになる。また「ユダヤ人の」と記していることから、異邦人の読者を意識していたことがわかる。

2　ヘブル語でベテスダと呼ばれる池　「ベテスダ」は、憐れみの家という意味で、ヘブル語を解さない異邦人の読者への配慮がある。次の段落にあるユダヤ人との安息日論争からしても、主がいけにえ（律法主義、形式主義）よりも憐れみを好まれることが浮かび上がってくる。

3　病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者など　彼らは当時の医療では、手の施しようがなく、池の名にふさわしく、神の憐れみにすがるほかない人々であった。彼らはベテスダ池についての言い伝え（3、4）に一縷の望みをかけていた。しかしそれは人を欺き、希望を打ち砕くものだった。人が自分の力で自分を救おうとする努力は不毛である。**からだを横たえていた**（カタケイマイ）未完了時制なので、淡い望みを抱きながら習慣的に横たわっている姿が描かれている（6、マルコ1・30、使徒28・8）。

5　三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人　この長さからしてベテスダ池に身を横たえていた人々の中で、彼は最も悲惨な状態の一人であったのかもしれない。この段落全体より、彼が社会から見捨てられ、病気の治ることも諦め、生きる気力も失っている状態にあったと推測される。主は社会のどん底にいる人に近づき、いやし、救おうとされる。「悲しんでいる人たちは幸いである…」。

6　イエスはその人が…長い間わずらっていたのを知って　主イエスは初めて見るこの病人のことを、神の知恵によって知っておられたことがわかる。主は38年にも及ぶこの病人の苦しみ、悩み、失望などをご存知であった。主が偉大な医者でもあられることをここに見る。**その人に「なおりたいのか」と言われた**　主イエスがこのように尋ねられた背後には、この病人が治りたいという願いをほとんど失っていた状態が推測される。それだからこそ主はご自分からこの病人に近づいて行き、なおりたいという願いを起こさせようとしておられる。主は選びと救いのイニシアティブをもって、無力な彼を導かれた。彼の他にも大ぜいの病人やからだの不自由な人がいたが、主はひとりの人を徹底的に取り扱うことからみわざを始められる。

7　主よ　「先生」（ラビ）というほどの呼び方で、この病人が特にイエスを救い主としてあがめたわけではない。**わたしを池の中に入れてくれる人がいません**　この病人は「なおりたいのか」という主の問いかけに正面から答えていない。彼は、自分がなおるためには池の中に入れてくれる人がいなければならないとしか考えられなかった。これは彼の38年間にわたる固定観念で、彼の人格にまで深くしみ込んでいた。彼はこの時点では、イエスの言葉に従えば驚くべきことが起きるとは想像もしていないので、信仰の働く余地もない。

8　起きて、あなたの床を取り上げ、そして歩きなさい　ここに3つの行為が命じられているが、どれもこの病人にとっては本来、実行不可能であった。しかし主は彼の不信仰な言葉をさえぎるようにして決然と命じられた。

9　この人はすぐにいやされ　彼がイエスの言葉に信頼して行動を起こそうとしたとき、主の全能の力が著しく働いた。これは「最初のしるし」（2・11）、「第二のしるし」（4・54）に続いて、イエスが救い主であることを表す第三のしるしである。しかし主はこれが公になるのを避けられた（13）。群衆が癒しだけを求めるようにならないためであろう。**床をとりあげて歩いて行った**　ここに自然の回復の経過をたどったのではなく、主の超自然的な力によって瞬時に、しかも完全に癒されたことが明らかにされている。また、罪の赦しといやしの関係が浮かび上がってくる（14）。「ごらん、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない」とあることから、彼の病の原因が罪であること、その罪が赦された証拠として病の癒されたことが見えてくる。主は癒されたことよりも、罪の赦されたことの方に彼の目を向けさせ、赦された者にふさわしく歩むべきことを教えておられる。

礼拝メッセージ例

聖　書　ヨハネ5・1～9
タイトル　ベテスダの池
暗唱聖句　長い間わずらっていたのを知って、その人に「なおりたいのか」と言われた。　ヨハネ5・6
目　標　イエス様こそが真にあわれみの家であることを信じる。

導　入

（長谷川）

皆さんは長い間病気をしたことがありますか？風邪で何日も学校や幼稚園を休まなければならない時など、つらいですね。また入院しなければならなくなった時など、もっとつらいですね。自分だけでなく、お家の人が長い間病気にかかっているときもつらいですね。

今日は、なんと38年間もの長い間病気で苦しんでいた人のお話です。

ベテスダの池

エルサレムにベテスダの池がありました。ベテスダとは「あわれみの家」「恵みの家」という意味でした。

その池はとても不思議な池で、水が動いた時に真っ先にそこに入った人はどんな病気も癒されると、信じられていたのです。しかも、本当に癒された人がいたのでした。ですから、池の周りにはたくさんの病人が「今度は私が！」とチャンスがやって来るのを待っていました。「その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた」と書かれてある通りです。

ベテスダの池は「癒しの池」なのですが、問題は水が動いた時に「真っ先に入る者」だけが癒されることでした。考えてみても、足の不自由な人や目の不自由な人、重病の人は「真っ先に」入ることなど不可能ですね。せっかくの「癒しの池」も不平等だったのです。「誰でも」という訳にはいかなかったのです。

38年間苦しんでいた病人とイエス様

なんと、そのベテスダの池に「三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があった」のです。38年とは、とても長い間苦しんでいる、ということです。その人は、ベテスダの池でじっと、しかも、長い間「水が動くこと」「一番に入ること」を待っていました。とてもつらい毎日だったと思います。入りたくても出来なかったのですから。

ところが、そこに、イエス様が来てくださいました。イエス様はその人が横になっているのを「見」しかも、38年もの長い間病気であることを「知って」お声をかけてくださいました。イエス様は、全部を知っていてくださるのです。

イエス様は「なおりたいのか」と聞かれました。「当たり前」のことですね。どうしてそう聞かれたのでしょうか？それは、もう自分なんてなおらない、池に一番には入れないとあきらめていたこの人にもう一度「希望の心」を与えるためでした。

この病人は「なおりたいのですが、誰も自分を池に入れてくれません、私が入りかけるとほかの人が先に入るのです」と文句のようなことを言ってしまいました。それくらいつらくて苦しい毎日だったのです。

イエス様は、全部をご存じで「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と言われたのです。驚くべき言葉です。38年間も病気だった、自分で歩けなかった人に「起きて、床を取りあげ、歩きなさい」とは。もう一つ驚くことは、その病人がイエス様のお言葉を信じて「起き上った」ことです。イエス様に頼って起きたのです。お言葉通りやってみたのです。その時、彼は癒され歩くことができました。池の水でいやされたのではなく、イエス様によって癒されたのでした。

まとめ

イエス様は信じて頼る人を「誰でも」助けてくださいます。「最初」の人だけではなく、「誰でも」です。そしてどんなに長い間「もうだめだ！」と思って苦しみ、あきらめていた人でもイエス様は助けることのできるお方です。

「水に一番に入る」などの私たちの努力や、何かよいことをしたから助けられるのではなく、ただイエス様にお頼りするだけで救いと助けがあるのです。感謝ですね。

イエス様は今も変わらず私たちを助けてくださいます。また、癒してくださいます。どんなに希望がなくなったと思える時でも、イエス様におすがりする時、必ず素晴らしいことが起こります。

♪主がわたしの手を♪（ホーリネス子どもさんびか89）

ワーク解説

ワーク A

●話し方のヒント

皆さんが病気だったら、「水が動いた時、一番に入った人が癒される池」があったら絶対に入りたいですね。この三十八年間寝たままの男の人は、自分で池に入ることができず、もう病気は一生治らないとあきらめていました。けれども、「なおりたいのか？」と聞いてくださったイエス様を信じて、言われた通り起きてみると、病気が治り、歩けるようになったのです！イエス様を信じるなら、すばらしいことが起こります！

●ワークについて

穴に指を入れ、男の人を起こし歩かせましょう。

ワーク B

●質問1　聖書を開いて読み、今日のみ言葉を覚えながら書いて見ましょう。

●質問2　ベテスダの池は人間世界の縮図のような所です。弱い者の集まりの中でも競争社会であり、真の神ではなく迷信、偶像にすがろうとする霊的盲目、そして責任転嫁と絶望。イエス様は自らこの暗黒の世界に来てくださり、本当のあわれみと救いを与えてくださるお方です。

●質問3　迷信、占い、お守りなどは昔も今も変わらず、全ての世代にわたり、その生活に入り込んでいます。具体的に取り上げてイエス様にのみより頼むように導きましょう。私たちに与えられている救いの名はこのお方以外ありません(使徒4・12)。

ワーク C

●【なおりたいのか】

●第2問　38年間病気であった人の気持ちを考えます。色々と想像して話し合ってみてください。答えは②です。

●第3問　イエス様がどうして「なおりたいのか」と言われたのか、その真意を話し合い考えます。答えは③です。

●38年間もだめだったし、「なおりたい」と即答できなかったこの人が、イエス様のお言葉で癒され立ち上がっていったその理由を考えます。信仰を働かせたということで、答えは①です。本当に頼るべきは自分でも人でも池でもなく、イエス様だと信じて、信仰を働かせたのです。

ワーク D

●質問に答えていきます。

●38年間の病の苦しみはいかなるものだったでしょう。真っ先に池に入れば治るという希望すらも、もはや彼にとっては、怒りといらだちと絶望のほか、何物でもありませんでした。彼の内にはドロドロした苦々しいものが満ちていました。それが38年間の病を負わざるを得なかった人の現実でした。主はそんな彼に、「なおりたいのか」と尋ねました。それをきっかけに彼の内なるものが噴き出してきました(7節)。私たちは人の苦々しい思いは聞くに耐えず、拒絶してしまいますが、主は彼の内なる苦々しい思いを吸い取るように、引き出されました。まさに彼の罪を主はご自分の身に負われ、彼はその重荷から解放されたと同時に、癒されたのです。主の言葉に答える力が与えられ、主の優しさ、忍耐、愛、み業をほめたたえます。

中高科へのヒント

●話し合ってみよう

1　自分が変わりたくても変われないことで、悩んだことはありますか。（性格、能力など）

2　その時、どうしましたか。（あきらめた、解決した）

●考えてみよう

1　ベテスダの池に38年も横たわっていた人はどんな気持ちだったでしょうか。（先を越した他の人が癒されて、くやしい思いや、あきらめの気持ちなどあったのでは）

2　主イエス様はこの男を見つめ、声をかけられました。大勢の人がいるのになぜ。（主イエス様は、だれでもよかったのではなく、その人と個人的な関係を持ってくださるお方です。あなたに目をとめてくださるお方です）

3　主イエス様が「なおりたいのか」と言われた時に「なおりたい！」と言いませんでした。なぜでしょう。（「なおる」という気持ちもなくなってしまったからでは。自分がなおらないことを他人のせいにしている）

●自分に当てはめてみよう

1　「起きて…床を取り上げ、歩きなさい」の言葉によって、彼は〝すぐに〟癒され、歩きだしました。あなたはどうしますか。主イエス様は私たちの罪を赦してくださいます。また自分でも変えられない欠点、短所なども、主イエス様によって変えていただくことができます。

牧羊ひろば

「わたしたちの教会学校」

　待望教会では毎週日曜日午前9時から10時10分頃（ころ）まで、教会学校の礼拝、分級を行っています。分級は第1週から第5週まで違ったプログラムが用意されています。クラスに分かれてワークを使った分級、みんな一緒に誕生会、折り紙タイムの分級もあります。

　現在は10名くらいのお友だち（信徒の子女）が入れ替わり、立ち替わり集っています（平均5～7名）。現在、教会学校や、教会学校礼拝のネーミングを新たにして、活動を見直している最中です。教会学校の礼拝が、大人も含めて、家族で出席できるものとなり、一つの礼拝としての意義付けができるようになればと願っています。教会学校に出席している子どもの半数以上が洗礼を受けているので、信仰の成長も祈りの課題です。

ワイワイ子供お楽しみデー

　多くの祈りの課題を抱える中、待望教会の目玉ポイントは、牧師夫妻を含め、7名の教師がおり、朝は牧師よりも早く教会に来て準備をし、月に一度のCS定例教師会が必ず行われ、子どもたちのために暖かい配慮と思いを込めて奉仕していることです。信徒の子女はじめ、教会外の子どもたちも安心してお送りいただけるスタッフがいることは教会学校の宝だと思います。今来ている子どもたちのニーズを考えると、子どもにもきよめを伝える必要があるのではと考えています（子ども聖会など）。

　教会学校の働きに日夜労苦している者として、互いに励まし合えたらと願い、今日はそれらの先生方に質問をして、一筆ずつ書いてもらいました。

CS教師名　**高橋なおみ先生**

Q　CS教師年数は？

A　20年です。

Q　CS教師の恵みは？

A　メッセージ、奉仕により、より一層砕かれたみ言葉の学びができること、幼子との親しい交わりが持てることです。

Q　CSにおける個人的課題は？

A　一緒に学び、一緒に遊び、一緒に喜び、一緒に涙し、一緒に成長していく、話のわかる教師になること。

イースター

CS教師名　**高橋秀治先生**

Q　CS教師年数は？

A　ヘルパーの年数も含めると、25年です。

Q　CS教師の恵みは？

A　CS生徒の成長が見られることです。

Q　CSにおける個人的課題は？

A　礼拝出席数の増加もさることながらCS生徒の霊的成長。

Q　CSの子どもたちにひと言。

A　信仰を捨てないでほしい。

Q　全国のCS教師の方々へひと言。

A　朝早くからのご奉仕おつかれ様です。

誕生会

CS教師名　**兼子匡司（かねこただし）先生**

Q　CS教師年数は？

A　24年です。（途中10年ほど休職期間あり）

Q　CS教師の恵みは？

A　牧羊者の教案を通してみ言葉を学ぶことのできる恵み。何よりも子どもたちによって信仰が励まされることです。

Q　CSにおける個人的課題は？

A　ひとりを大切にしていくこと。同じ目線で一緒にイエス様を見つめること。

Q　CSの子どもたちにひと言。

A　ぼく（私）ひとりくらい教会学校へ行かなくていいや、などと思わないで教会学校に来てね。

Q　全国のCS教師の方々へひと言。

A　許されるならば、全国のCS教師の方々が生涯現役で！

CS教師名　**上森恭子先生**

Q　CS教師年数は？

A　24年です。

Q　CS教師の恵みは？

A　幼子を愛しておられるイエス様の愛にふれることができることです。

Q　CSにおける個人的課題は？

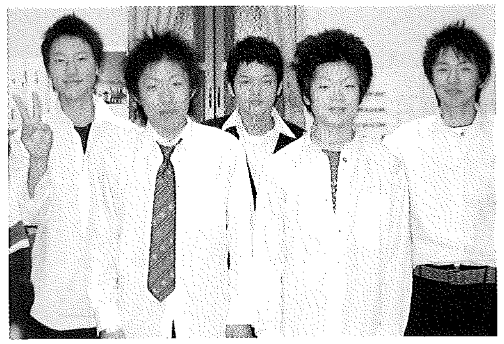
A　①イエス様のもとに来ようとしている幼子の味方になること。②神様のために働きたいと思う子どもたちが起こされること。

Q　CSの子どもたちにひと言。

A　〝わたしがついている〟じゃなくって、〝イエス様がついているから大丈夫〟

Q　全国のCS教師の方々へひと言。

A　同労者の先生方といつか奉仕の労苦、喜びを分かち合いたいなあと、思っています。



　是非、待望教会の教会学校を覚えてお祈りください。

（待望教会牧師、CS校長、上森泰造）

おわりに

『牧羊者』二〇〇五年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。執筆者の方々には、いつもながらお忙しい中、多大なご協力をいただき心から感謝いたします。「子ども聖書日課」の内容が充実し、子どもたちや教会学校教師、他の大人の方々にまで愛され用いられる「子ども聖書日課」とされるように引き続いてお祈りください。

　教会学校局では来年とその次の年度のカリキュラム、その他を検討し始めております。どうぞお祈りください。「牧羊者」がいよいよ子どもたちの救霊と育成のために、教会学校教師の方々や主にある兄弟姉妹の育成にも大いに用いられるように、引き続きお祈りください。

　終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

聖書講解	鎌野　善三	金井　望	長谷川宣恵
研究資料	足立　宏	石田　高保	
メッセージ例	小野　淳子	山田みち代	長谷川ひさい
ワーク	鎌野　幸	小平　徳行	
	長尾　秀紀	加藤　清	上森　恭子
中高科	小岩　裕一		
フラッシュカード	土屋　直子		
み言葉カード	陰山　恭子		
子ども聖書日課	小野　淳子		

　また、監修を手伝ってくださった鎌野善三師、石田高保師、森明子師、打ち込みをしてくださった藤井正子師、青木美恵子師、楠淳子師、陰にあってお手伝いくださった兄弟姉妹の方々、また、発送とワーク印刷をされた教団事務所の方々、そして、印刷会社あくとの本田慈郎兄と奥様に心から感謝いたします。（長谷川和雄）

聖書教育教案誌　**牧羊者**
二〇〇五年度　Ⅱ巻
二〇〇五年六月十日発行
発行所　有限会社　ベラカ出版
企画・監修　日本イエス・キリスト教団教会学校局
神戸市兵庫区塚本通三―三―一九
電　話（〇七八）五七五―五五一一
ＦＡＸ（〇七八）五七五―六六一一
印刷所　有限会社　あくと
電　話（〇二九七）七八―五九三五
＊日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み